

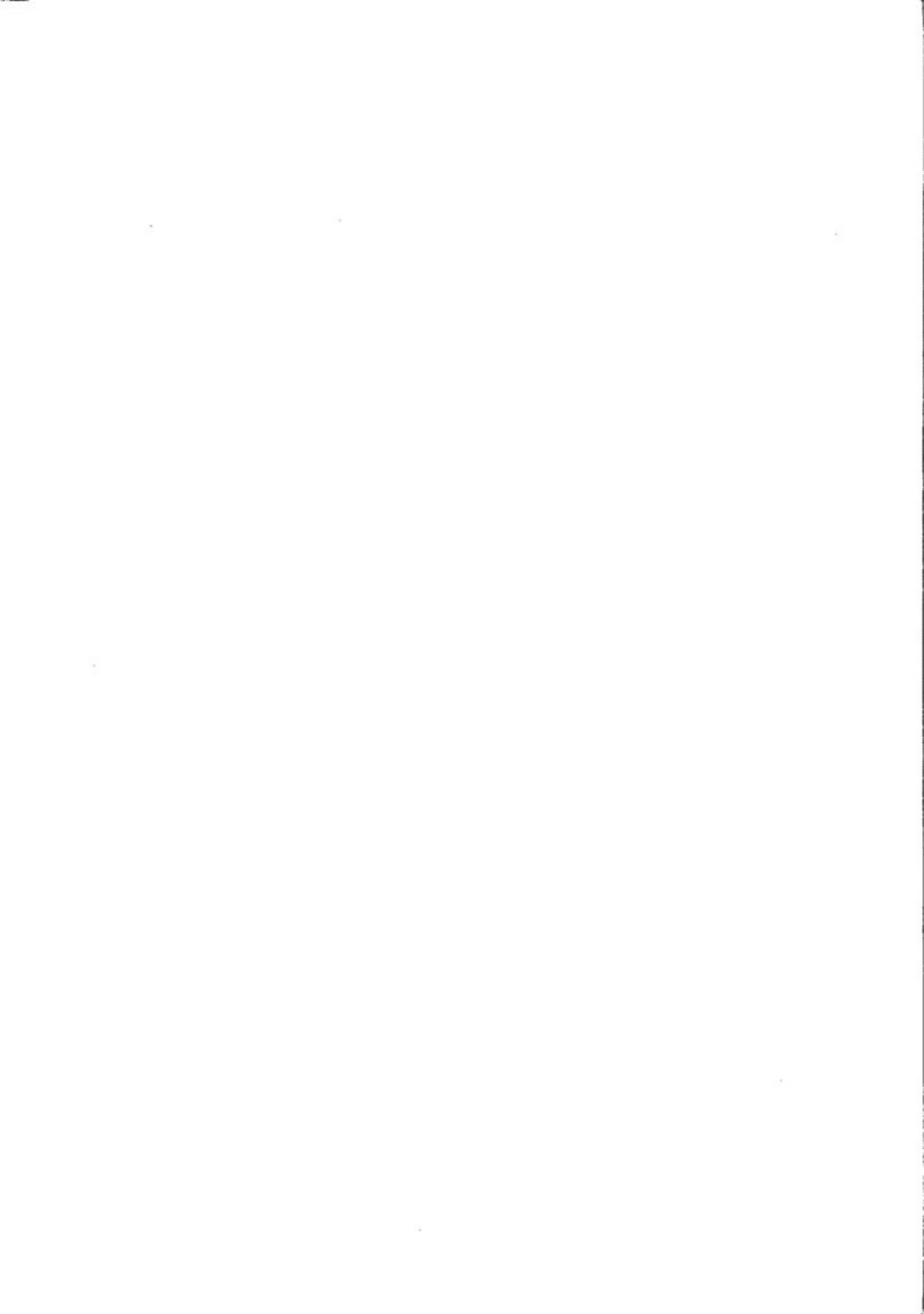
財團
法人

八尾市文化財調査研究会報告97

- I 久宝寺遺跡（第42次調査）
- II 東郷遺跡（第36次調査）
- III 東郷遺跡（第67次調査）
- IV 八尾寺内町遺跡（第4次調査）
- V 弓削遺跡（第6次調査）

2007年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財團
法人 八尾市文化財調査研究会報告97

- I 久宝寺遺跡（第42次調査）
- II 東郷遺跡（第36次調査）
- III 東郷遺跡（第67次調査）
- IV 八尾寺内町遺跡（第4次調査）
- V 弓削遺跡（第6次調査）

2007年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、開発に伴う発掘調査を実施することにより、これらの文化財を破壊から守ること、また発掘調査による記録保存を行い、市民の財産である文化財を後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成3・14・15・17・18年度に行いました民間の開発に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。

今回報告する遺跡のうち特に久宝寺遺跡第42次調査では古墳時代前期の居住域が存在していることが判明しました。また、東郷遺跡第67次調査では古墳時代前期の墓域と考えられる遺構を検出しました。さらに弓削遺跡第6次調査では弥生時代後期、奈良時代、鎌倉時代の各時代の居住域を検出しています。これらの調査によって得られた情報は、当時の人々の生活や社会の変化を知る上で貴重な役割を果たしています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎 健二

序

1. 本書は、財團法人八尾市文化財調査研究会が平成3・14・15・17・18年度に実施した、民間の開発に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成19年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
 1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I 楠口 薫 II・IV 荒川和哉 III・V 西村公助で、全体の構成・編集は西村が行った。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成13年度版)をもとに作成した。
 1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
 1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北(国土座標第VI系(日本測地系))を示している。
 1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器-白・須恵器・陶磁器-黒・木器・瓦・石-斜線
 1. 色については『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
 1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

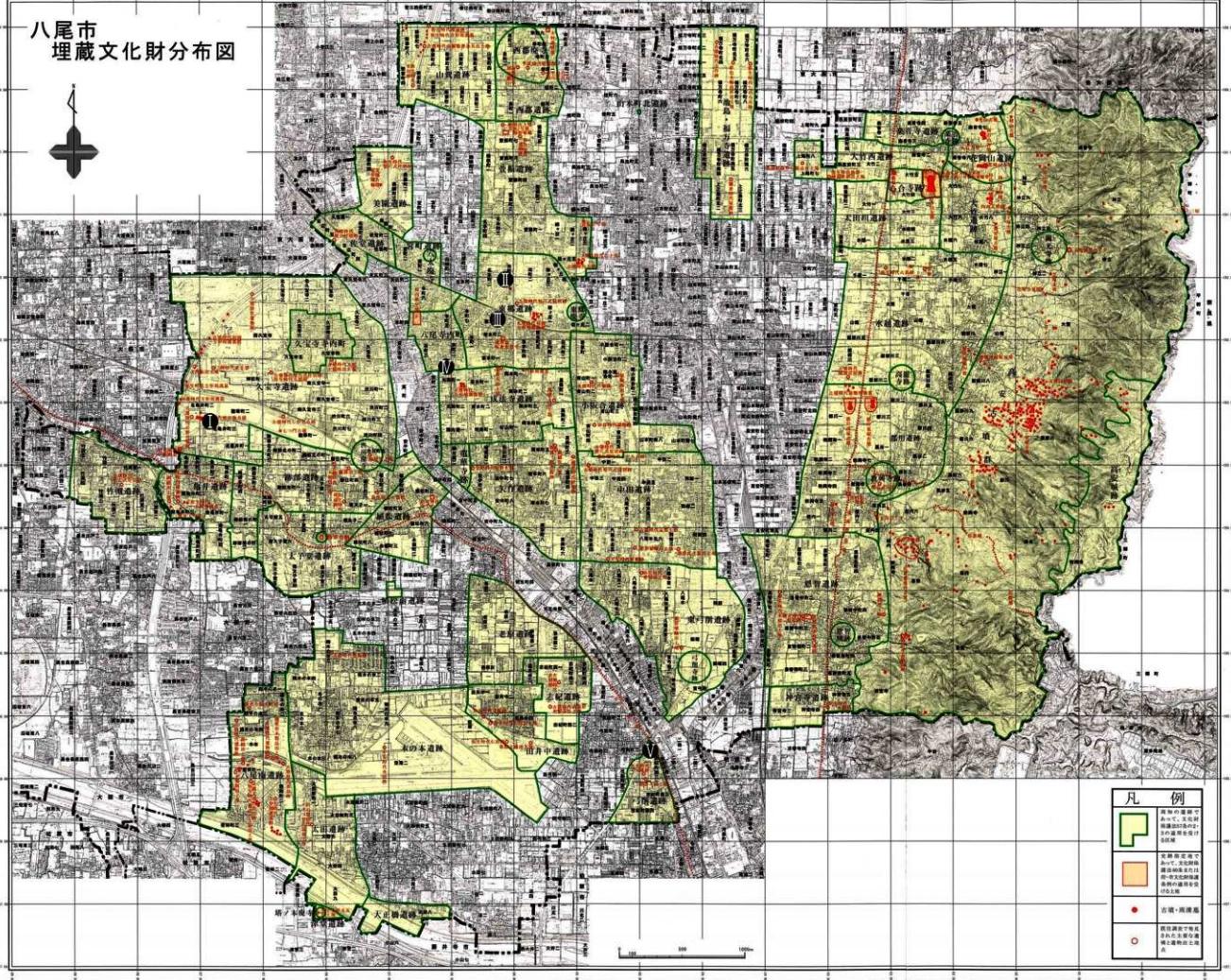
序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 久宝寺遺跡第42次調査(K H 2002-42)	1
II 束郷遺跡第36次調査(T G 91-36)	21
III 束郷遺跡第67次調査(T G 2006-67)	39
IV 八尾寺内町遺跡第4次調査(Y C 2005-4)	45
V 弓削遺跡第6次調査(Y G E 2005-6)	53

報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図



I 久宝寺遺跡第42次調査 (K H 2002-42)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市北龜井町3丁目41番地で実施した地下通路・インフラ幹線工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第42次(KH2002-42)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成14年9月30日～10月24日(実働15日間)にかけて、樋口　薰を調査担当者として実施した。調査面積は約61m²である。
1. 現地調査では、同時期に久宝寺遺跡(大阪竜華都市拠点地区竜華東西線2-1工区)を発掘調査されていた、(財)大阪府文化財調査研究センター(現(財)大阪府文化財センター)の西村歩、南条直子の両氏に、本調査地にまで足を運んでいただき、地層の解釈をはじめ、貴重なご意見を頂戴した。記して感謝の意を表します。
1. 現地調査にあたっては、伊藤静江・垣内洋平・加藤邦枝・鈴木裕治・竹田貴子・田島宣子・永井律子・村田知子の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成18年12月28日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測一飯塚直世・市森千恵子・國津れいこ・鈴木・中野靖之・藤田勇貴・實樹姫美子、図面トレースー市森・徳谷尚子、樋口、山名康子、写真撮影・樋口、写真編集ー山名、本書の執筆及び編集ー樋口が担当した。

本　文　目　次

第1章 はじめに	1
第2章 調査概要	2
第1節 調査の方法と経過	2
第2節 検出遺構と出土遺物	3
1) 基本層序	3
2) 検出遺構と出土遺物	4
第3章 まとめ	19

挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図	1
第2図 調査区地区割図	3

第3図 東壁・南壁断面図(S = 1/50)	5・6
第4図 第1面平面図	7
第5図 SK101~106断面図(S = 1/40)	8
第6図 SK101~105出土遺物(S = 1/4)	8
第7図 SD101内出土土器集積101平面図	9
第8図 SD101内出土土器集積101出土遺物(S = 1/4)	10
第9図 第2面平面図	12
第10図 SK202平・断面図	13
第11図 SK202出土遺物①(S = 1/4)	14
第12図 SK202出土遺物②(S = 1/4)	15
第13図 第2面横出遭構断面図(S = 1/40)	16
第14図 SD203出土遺物(S = 1/4)	17
第15図 地層内出土遺物(S = 1/4)	18

表 目 次

表1 調査地一覧表	2
-----------------	---

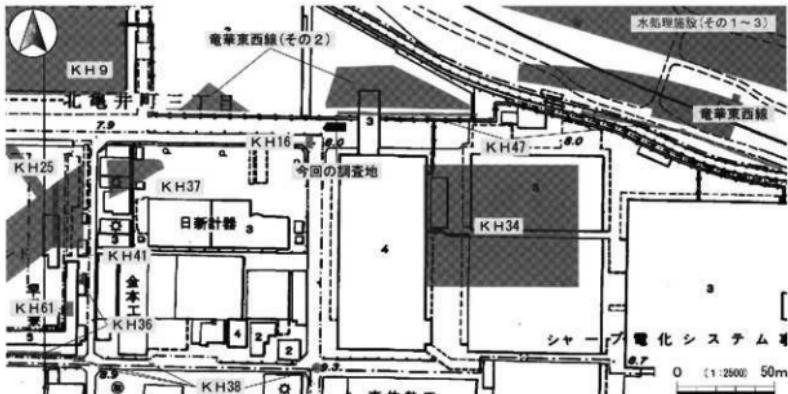
図 版 目 次

図版一 調査地周辺状況(東から) 第1面全景(西から) 第2面全景(西から)	
図版二 SD101(南東から) SD101内出土土器集積101(北から) SD101内出土上土器集積101(西から)	
図版三 SK202(北東から) SK202(北から) SK202遺物出土状況(北から)	
図版四 南壁断面(T.P.+5.2~6.5m:北から) 南壁断面(T.P.+4.5~6.0m:北から) 南壁断面(T.P.+2.9~4.0m:北西から)	
図版五 出土遺物	
図版六 出土遺物	
図版七 出土遺物	

第1章 はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。この八尾市の中西部に広がる久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた沖積地上に立地している。現在の行政区画では、久宝寺1~6丁目、西久宝寺、南久宝寺1~3丁目、北久宝寺1~3丁目、龍華町、渋川町1~7丁目、神武町、北龟井町1~3丁目、東大阪市大蓮東5丁目、大蓮南2丁目の東西約1.6km、南北1.7Kmがその範囲と推測されている。

当遺跡は、昭和10年(1935年)、式内社「許麻神社」の西側に位置する小字「西口」「栗林」(久宝寺5丁目)で実施された道路工事中に、弥生時代中期～古墳時代の土器をはじめ、丸木舟の残片が出土し、遺跡の存在が認識されるようになった。以後、当遺跡では、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター)、八尾市教育委員会、当調査研究会による調査が数多く実施されており、その結果、繩文時代後期から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。近年は、JR久宝寺駅周辺において大規模な調査が行われており、その結果、弥生時代後期～古墳時代前期については、竪穴住居をはじめとする居住関連遺構群、弥生時代の方形周溝墓や、弥生時代の墓制とは性格を異にすると考えられる古墳などの墓域関連遺構群、水田や畑といった生産関連遺構群が、整然と地域をわけて展開する様子が解明されつつあり、当該期の「ムラ」の構造を知る上で貴重な情報を得た。また、飛鳥時代～平安時代初頭をみると、掘立柱建物や井戸をはじめとする居住関連遺構を検出しているほか、奈良三彩や綠釉陶器、墨書き土器、硯などの、一般的な集落からは出土の稀な遺物が多く出土している点が注目される。これらの成果は、当遺跡内に官衙や寺院などの施設が存在した可能性を彷彿させる。なお、本遺跡の南東には、飛鳥時代に比定の素弁蓮華文軒丸瓦を葺いたとされる渋川廃寺が存在することから、それらに付随する遺構群が展開している可能性も考えられる。



第1図 調査地周辺図

表1 調査地一覧表(地図番号は第1図に対応)

地図番号	調査名(略号)	調査地番	調査面積(m ²)	調査機関	文献
KH9	久宝寺第9次(KH91-9)	北龜井町3丁目1-72	4100	八文研	成海佳子 1992「13.久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」[平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KII16	久宝寺第16次(KII93-16)	北龜井町3丁目	25	八文研	高萩千秋 1994「久宝寺遺跡第16次調査(KH93-16)」[〔財〕八尾市文化財調査研究会報告42]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KH25	久宝寺第25次(KH98-25)	北龜井町3丁目	2800	八文研	原田昌則・坪山真一・鶴口めぐみ・占川晴久 2000「久宝寺遺跡(第25次調査)」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告88]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KH34	久宝寺第34次(KH2000-34)	北龜井町3丁目41	1501	八文研	消滅 2001「5.久宝寺遺跡第34次調査(KH2000-34)」[平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KH36	久宝寺第36次(KH2000-36)	北龜井町	136	八文研	原田昌則・金城満夫 2004「久宝寺遺跡(第36次調査)」[〔財〕八尾市文化財調査研究会報告77]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KH37	久宝寺第37次(KH2001-37)	龜井	943	八文研	原田昌則・金城満夫 2004「久宝寺遺跡(第37次調査)」[〔財〕八尾市文化財調査研究会報告77]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KH38	久宝寺第38次(KH2001-38)	北龜井町2・3丁目	12	八文研	高萩千秋・成海佳子・西村公助・鶴口真一 2003「久宝寺遺跡(第38次調査)」[〔財〕八尾市文化財調査研究会報告75]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KH41	久宝寺第41次(KH2002-41)	北龜井町2丁目	12	八文研	西村公助・鶴口真一 2003「X IV 久宝寺遺跡第41次調査(KII2002-41)」[〔財〕八尾市文化財調査研究会報告75]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KH42	久宝寺第42次(KH2002-42)	北龜井町3丁目41	61	八文研	本書に掲載
KH47	久宝寺第47次(KH2002-47)	北龜井町2・3丁目	4	八文研	成海佳子 2003「V 久宝寺遺跡第47次調査(KH2002-47)」[〔財〕八尾市文化財調査研究会報告78]〔財〕八尾市文化財調査研究会
KH61	久宝寺第61次(KH2004-61)	北龜井町2丁目	93.6	八文研	荒川和哉 2006「5.久宝寺遺跡(第61次調査)」[〔財〕八尾市文化財調査研究会報告88]〔財〕八尾市文化財調査研究会
電車東西線	龜井			大文セ	西村歩・奥村茂輝 2004「久宝寺遺跡・電車地区発掘調査報告書VI」[〔財〕大阪府文化財センター調査報告書第118集]〔財〕大阪府文化財センター
電車東西線(その2)	龜井			大文セ	西村歩・奥村茂輝 2004「久宝寺遺跡・電車地区発掘調査報告書VII」[〔財〕大阪府文化財センター調査報告書第118集]〔財〕大阪府文化財センター
水処理施設(その1~3)	龜井			大文セ	未報告

※調査機関=大文セ:(財)大阪府文化財センター 八文研:(財)八尾市文化財調査研究会

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、地下通路・インフラ幹線工事に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第42次調査にある。本調査地は、シャープ株式会社八尾工場内に位置し、平面形状は東西約12m、南北約6mの不定形を呈する。調査面積は約61m²である。

調査は、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(T.P.+8.6m前後)下

1.5~2.0mまでを機械掘削とし、以下現地表下2.7m(T.P.+5.9m)前後までの0.7mを人力により掘削・平面的な調査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。さらに時間の許す限り、下層における遺構の有無、及び地層堆積状況の把握に努めた。

調査に際しては、方位は座標北で示し、高さは東京湾標準潮位(T.P.値)を使用した。

調査では、遺構平面図の作成や遺物の取り上げの際、遺構・遺物の絶対的位置を示す必要が求められる。そこで本調査では、平成9年度から旧国鉄竜華操車場跡地内で断続的に行われている「八尾市都市計画事業大阪竜華都市拠点上地区画整理事業に伴う調査」において当調査研究会が設定した地区割り方法を採用し、これに備えた。この地区割りは、旧国鉄竜華操車場を中心とした東西2km、南北1kmについて国上座標第VI系を基準として区画したもので、これによると本調査地はVI-7-5 E・F、6 E・F地区の範囲に跨る。

調査の結果、第1面で古墳時代前期～中期の遺構群を、第2面で弥生時代後期～古墳時代前期の遺構群を検出した。出土遺物はコンテナ(縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m)5箱を数える。

第2節 検出遺構と出土遺物

1) 基本層序

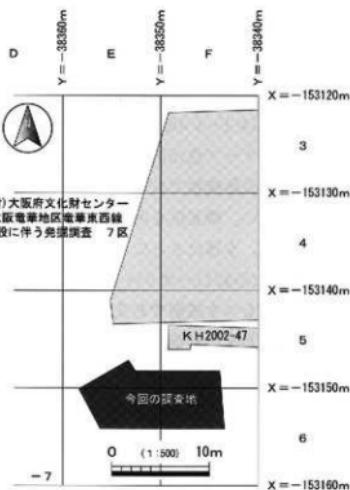
発掘調査開始直前における本調査地の状況は、既存の構築物等は存在せず、整地が行われており、平坦面を成していた。現地表面の標高は、T.P.+8.6m前後である。調査の結果、現地表下2.0~2.4mまでは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)、以下、現地表下5.8mまでの3.4~3.8m間にわたり、1~9層の基本層序を確認した。以下、各地層の特徴を述べる。

0層 現代の客土・盛土層である。

1層 灰白色(10Y7/1)～灰色(10Y4/1)粘土質シルト～極細粒砂。水平に発達したラミナ構造を形成する河川堆積物である。調査区の東方にのみ存在する。

2層 灰色(7.5Y4/1)細礫混シルト質粘土。攪拌の顕著な淘汰不良の地層である。水田耕作土の可能性が高い。基本的には、調査区全域に存在したと推測されるが、後世の搅乱の影響で、点在した状態で分布する地層である。

3層 暗灰色(N3/)極粗粒砂～細礫混粘土質シルト～極細粒砂。後述する4層水成層の土壤化部分に相当する。本層の形成時期は、地層内に弥生土器や古式土器片が混在することから、弥生時代後期～古墳時代初頭頃に比定される。本層はさらに3層(3-1～3-3層)



第2図 調査区地区割図

に細分できた。本層上面において、第1面を検出した。

- 4層 灰色(N4/)～オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質粘土～シルト。下方に向かうにつれて、ラミナ構造が顕著になる水成層で、弥生時代後期の上器が混在する。後述する、自然堤防を形成する5層の西側に展開する後背湿地に堆積した水成層であろう。本層はさらに4層(4・1～4・4層)に細分できた。本層上面が第2面に相当する。
- 5層 灰オリーブ色(5Y6/2)シルト～中疊。下方に向かうにつれて粗粒化の傾向が強くなる、洪水性の堆積物である。本層の上位1cmほどは、酸化鉄分の沈着が顕著で、地層の締まりも良い。調査区を南東から北東方向に舌上に伸びる自然堤防の母材となる砂疊層に相当する。本層はさらに2層(5・1・5・2層)に細分できた。
- 6層 灰色(5Y4/1)～オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト～極細粒砂。水平方向に発達したラミナ構造をもつ水成層である。概ね植物遺体がラミナ状に連続して堆積しており、穂やかや流速のもとで形成された地層であることが推測される。ただし、西方に向かうにつれて砂疊が優勢になり、それに伴いラミナ構造も水平なものから、東から西に傾く斜交ラミナに変化している。本層はさらに9層(6・1～6・9層)に細分できた。
- 7層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土～細粒砂。植物遺体の水平なラミナ構造が連続的に発達した地層で、西に向かうにつれて粗粒化の傾向が強くなる。本層はさらに3層(7・1～7・3層)に細分できた。西方では、本層上面から切り込む一時期の流路(7層上面NR)を確認した。
- 8層 暗オリーブ灰色(5G3/1)シルト質粘土～細粒砂。上方において植物遺体を多量に含む水成層である。本層はさらに6層(8・1～8・6層)に細分できた。西方では、本層上面から切り込む一時期の流路(8層上面NR)が認められる。
- 9層 黄灰色(2.5Y5/1)～灰色(5Y4/1)シルト～細疊。東から西に傾く斜行ラミナの発達した洪水性の堆積物である。本層はさらに5層(9・1～9・5層)に細分できた。本層上面において、調査区を南西から北東方向に横切る一時期の流路(9層上面NR)の痕跡を確認した。

2)検出遺構と出土遺物

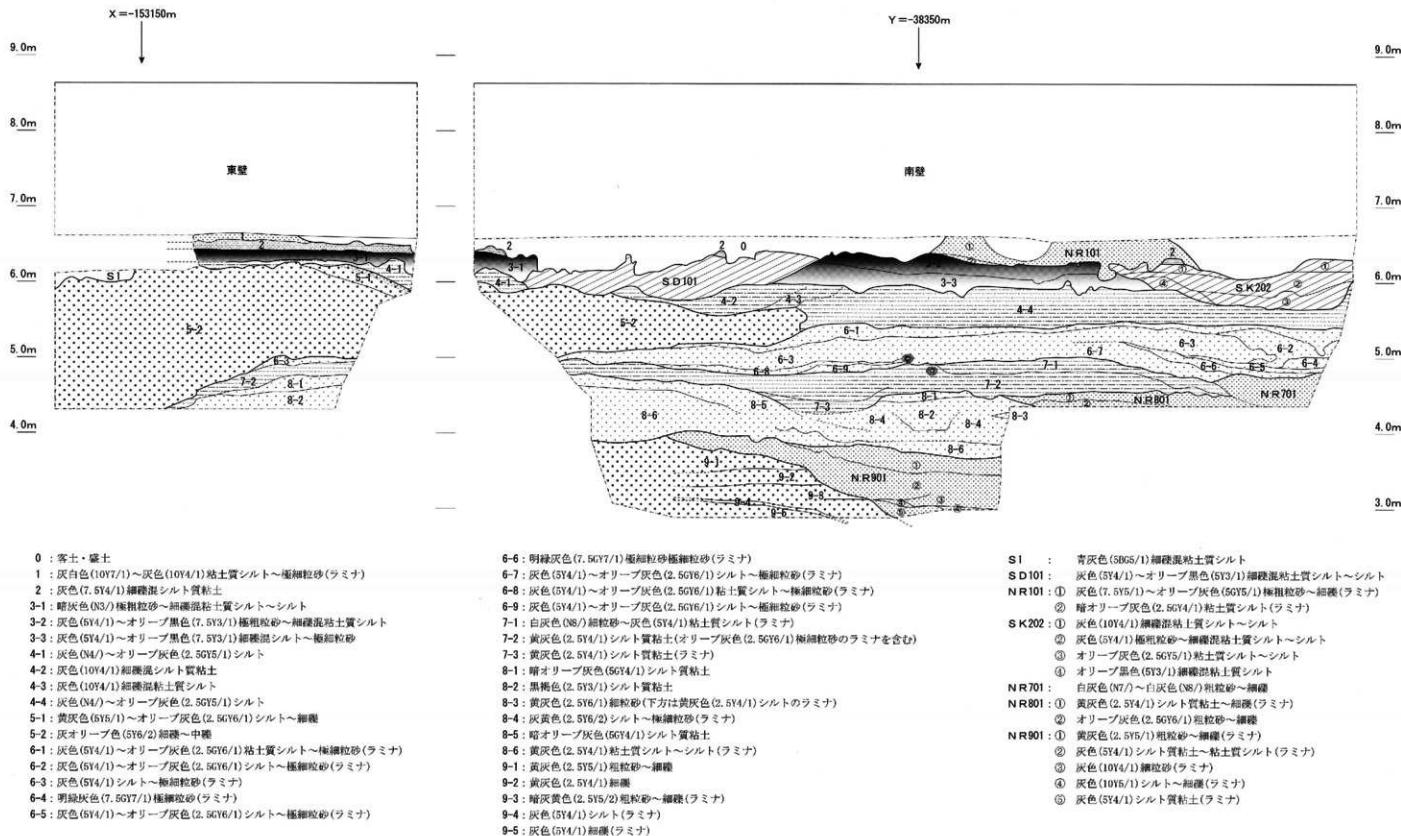
第1面(古墳時代前期～古墳時代中期)

3層上面において平面精査を行い、検出した遺構面である。ただし、3層の上位には客土・盛土層をはじめ、水成層、水田耕作土などから成る0～2層が堆積していることから、3層上位はこの影響で削平を受けた可能性が高い。したがって、考古学的には0～2層下面検出遺構面と呼称すべきである。本遺構面では、土坑6基(SK101～SK106)、溝1条(SD101)、流路1条(NR101)を検出した。

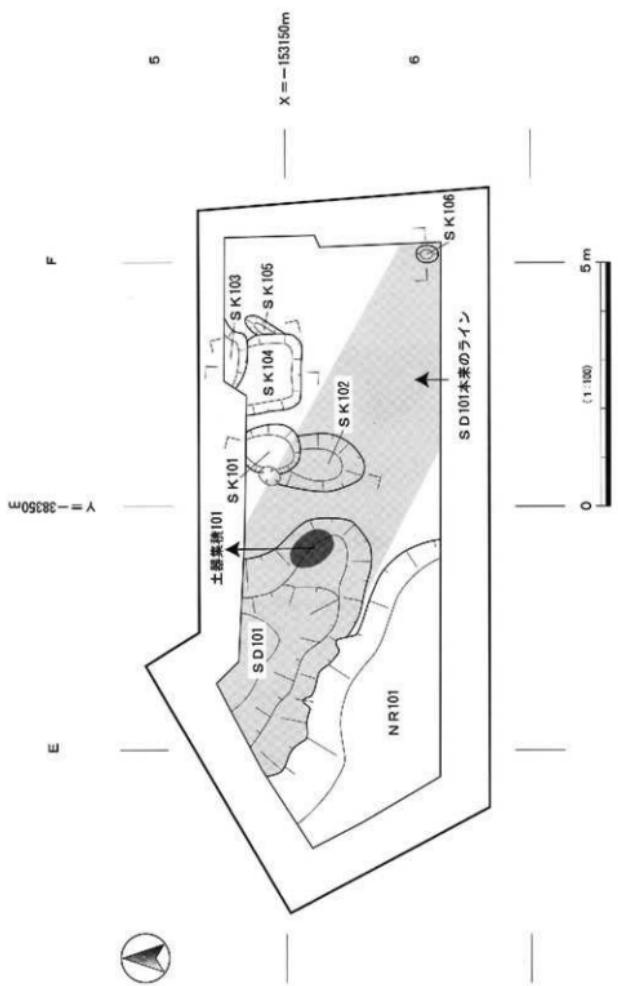
土坑(SK)

SK101～106

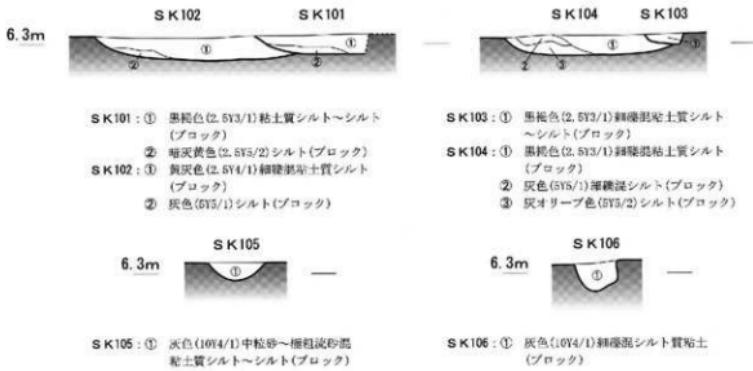
VI-7-5F・6F地区において土坑を6基(SK101～106)検出した。いずれの土坑も、本来の遺構基盤層は3層より上位に存在したと推測される。このうちSK101・102は、後述の2層下面検出遺構であるSD101を切っていることから、2層より上位に基盤層が存在した可能性が高い。各土坑の平面形状を見ると、SK101・102・106は概ね南北に長軸をもつ楕円形、SK104は方形に近い形状を成す。埋土は、各土坑ともに1～3層から成るブロック土で充填されていた。遺物は、SK101～105において若干の出土を見たが、いずれの遺物も、埋土内に混在したものであり、遺



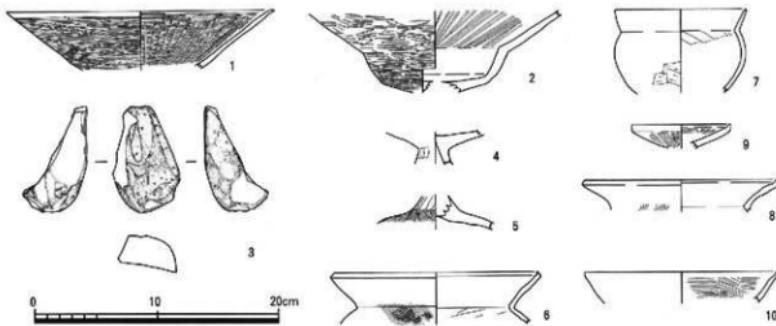
第3図 東壁・南壁断面図 (S = 1/50)



第4図 第1面平面図



第5図 SK 101～106断面図 (S = 1/40)



第6図 SK 101～105出土遺物 (S = 1/4)

構の加工時、あるいは機能していた時期を示すものではない。遺物は、いずれも庄内～布留式期（古墳時代初頭～前半）の所産である。以下では、各構造から出土した遺物の概説を行う。

SK 101からは1～3が出土した。1・2は古式土師器高杯。1は口縁端部～口縁部が直線的に伸びる高杯で、有稜高杯の可能性が高い。外・内面ともに横位ミガキを密に施した後、装飾調のミガキを加えている。胎土は精良である。2は有段高杯の口縁部～杯部。外面は横位密ミガキ、内面は放射状ミガキを施す。3は石製品。素材は安山岩で、表面に研磨痕が見える。砥石である。

SK 102からは4・5が出土した。両者とも古式土師器高杯の柱状部付近細片で、この内5は脚部の開きが大きい点が特徴的である。楕形高杯の可能性が高い。

SK 103からは6が出土した。6は古式土師器甕の口縁端部～肩部細片である。口縁端部は上内

方に若干拡張しケズリ調整を施し、銳角に屈曲するもので、いわゆる庄内式甕である。

S K104からは7~9(古式土師器)が出土した。7は小型丸底甕である。口径と体部最大径がほぼ等しい個体で、体部下位にケズリ、頸部内面に板ナデなどの調整が見える。8は甕の口縁部~口縁端部細片。大きく外反する口縁部と上方に若干拡張する端部をもつもので、頸部内面の屈曲も鋭利である。9は小型器台の受部~受端部。受端部は上方に拡張し、その結果、直立する端面が形成される。調整は、内・外面ともに密なミガキを施している。

S K105からは古式土師器甕10が出土した。口縁端部は上方に拡張気味で、内面には横位ハケナデが見える。

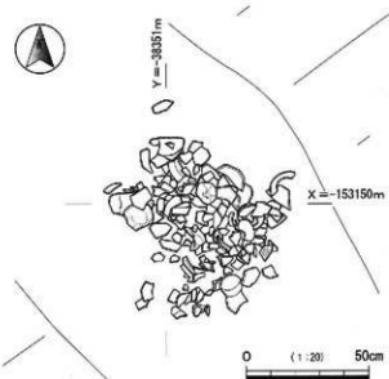
溝(S D)

S D101

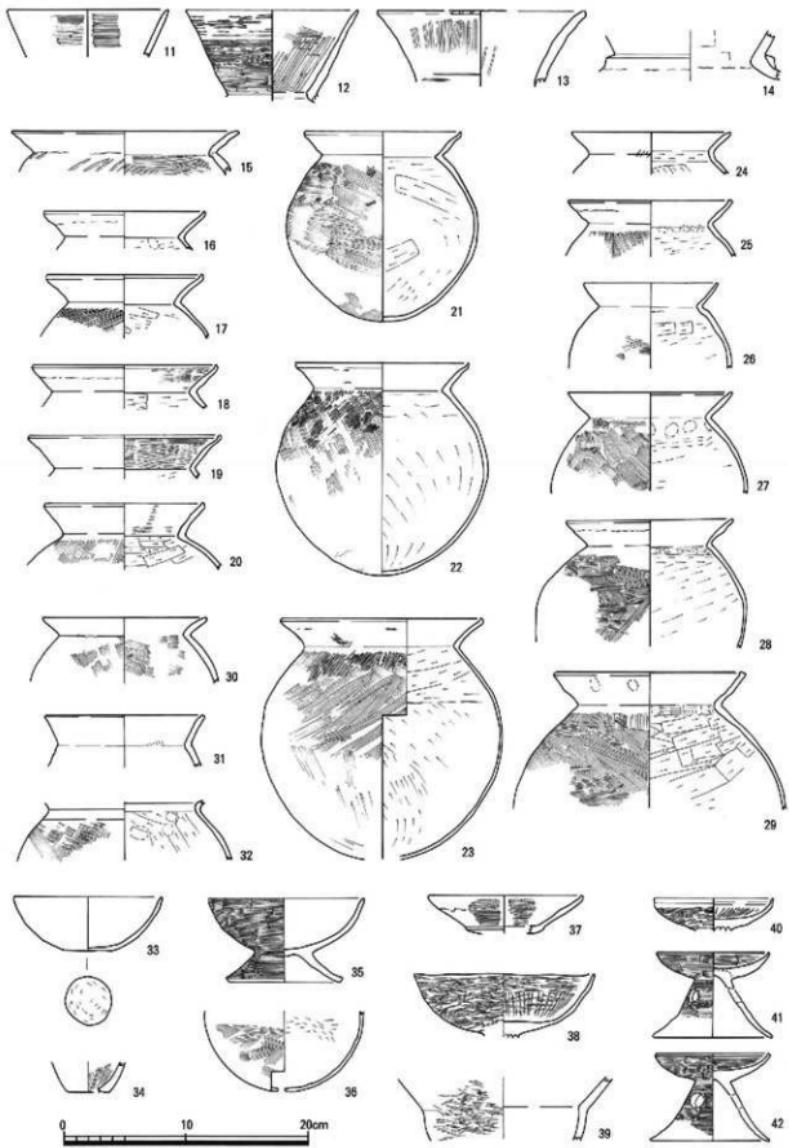
VII-7-5 E・F、6 E・Fに跨る南東~北西方向にほぼ一直線に伸びる溝である。本遺構は、上位に攪拌の著しい2層水田耕作土が介在していることから、2層下面検出遺構である。規模は、検出長12m以上、幅約3m、深さ0.4m以上を測る。断面形状は浅い椀形を呈し、埋土は2層のブロック土から構成される。なお、本遺構は、第1面検出時には南東部分を確認することができず、全容が判明したのは第2面検出段階であった。

本遺構の中央やや北東よりの東肩付近では、約1m四方の限定された範囲において土器集積(土器集積101)を検出した。土器集積101の出土状況からは、意識的に埋置した様子は窺えない。むしろ、本土器集積の北東方面からの投棄により形成された可能性を想定したい。なお、この土器集積には、時間的断絶を示す間層などは認められない。したがって、一回の行為により形成された土器集積であり、一括資料として有効と思われる。

土器集積101は、古式土師器壺・甕・器種不明底部・高杯・小型器台などで構成される。11~14は壺である。11・12は直口壺。内・外面ともに密なミガキを施すもので、胎土は精良。13はミガキ調整を施した広口壺である。14は頸部付近の細片。頸部には断面三角形の突帯を貼り付けている。15~33は甕。15は弥生系の甕で、体部外面には右上りの粗いタタキを、内面には横位ハケナデを施す。16~23は、外反する口縁部と、上方に拡張した口縁端部をもち、頸部内面が鋭利に屈曲する、いわゆる庄内式甕である。調整は、概ね体部外面は右上りの細かいタタキを行った後ハケナデを、内面はケズリを施す。この内、全体の形状が判明した21~23を見ると、球形の体部を有し、底部は丸底を成す。また23のように、肩部~体部中位外面において、最終的に装飾調の調整を行う個体も存在する。この装飾は、原体にハケ状の工具を用いていると推測され、左下から右上に進んだ後、軽く折り返し、また左下に戻る行為を1単位としており、肩部付近を一周



第7図 SD101内出土土器集積101平面図



第8図 S D 101内出土土器集積101出土遺物 (S = 1/4)

しているものと思われる。24～29はほぼ直線的～若干内湾気味の口縁部と、頸部が鈍角に屈曲する甕である。調整は、概ね体部外面は右上りの細かいタタキ後丁寧なハケナデを、内面はケズリを施す。30・31は短く外反する口縁部と、丸く終息する口縁端部を有するもので、両者ともにハケナデ調整が見える。32は頸部～体部上位細片。体部外面には左上りタタキが施され、特異である。搬入品の可能性も考えておきたい。33は椀である。底面はケズリ調整が行われ、平坦面が成形される。34は器種不明の底部。内面には縦位ハケナデが見える。35は短脚椀である。八の字に聞く短い脚部が付くもので、外面は横位密ミガキが施される。山陰地域からの搬入品の可能性が高い。36は球形の体部を有し、底部に穿孔が存在するもので、有孔鉢であろう。37～39は高杯。37は有稜高杯で、内・外面に横位密ミガキが施される。38は椀形高杯。横位ミガキ後、内面には放射状ミガキが加わる。39は有段高杯。外面には横位ミガキが施される。40～42は小型器台である。40は受端部を上方に拡張し、若下外反する端面を形成するもので、外面が横位ミガキ、内面は放射状ミガキを行う。41・42は内湾する受部と上方に若干拡張する端部を有するもので、脚部は八の字状に聞く。調整は内・外面ともに横位密ミガキである。搬入品の可能性も考えられる。これらの遺物群の帰属時期については、球形化した体部を有する庄内式甕や有段高杯の存在、小型器台の形態的特徴などから判断すると、大多数が庄内式期の新段階に帰属することが推測されるが、29のように布留式甕も存在することから、布留式期古段階を考えておきたい。

流路(N R)

N R 101

VI-7-5 E・6 E 地区検出の一時期の流路である。概ね南東～北西方向に伸びる流路で、規模は、検出長7m以上、幅3m以上、深さ0.3m以上である。断面形状は浅い椀状を呈し、埋土はラミナ構造の顕著な粘土質シルト～細礫の2層から成る。なお、本遺構は上位に0層が堆積していることから、0層下面検出遺構であり、本来の遺構基盤層は不明である。出土遺物はなし。

第2面(弥生時代後期～古墳時代前期)

4層上面において平面精査を行い、検出した遺構面である。ただし、4層の上位には上壌化の進行した3層が堆積しているため、本来は3層下面検出遺構と呼称すべきである。ここでは、土坑5基(S K201～205)、溝7条(S D201～207)と、第1面で完全に検出できなかった S D101を検出した。なお、S K201・202、S D201～206は、N R 101の下面で検出した遺構である。

土坑(S K)

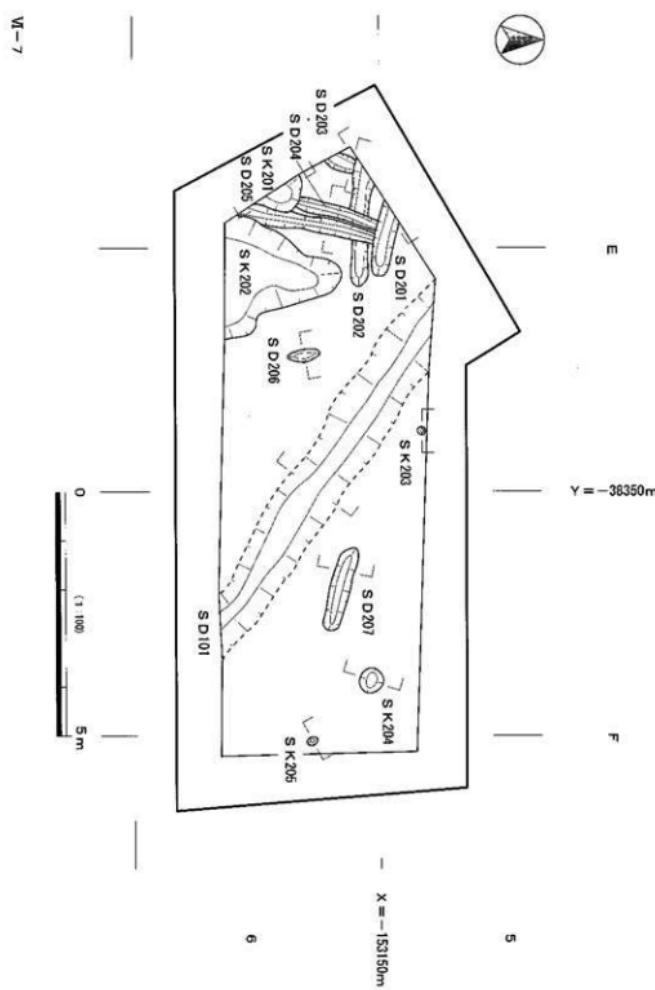
S K201

VI-7-6 E 地区検出の土坑である。南西部分が調査区外に伸びるため全容は不明であるが、概ね南北に主軸をもつ隅丸方形であった可能性を想定したい。検出規模は東西長約0.8m、南北長0.5m以上、深さ0.1m以上である。断面形状は浅い皿形を呈し、埋土はブロック土の单層が充填される。出土遺物はなし。

S K202

VI-7-6 E 地区検出の土坑である。平面形状を見ると、検出部分では不整三角形を成すが、南部分が調査区外に伸びるため全容は分からず。検出規模は、南北長2.3m以上、東西長2.5m以上、深さ0.7m以上を測る。断面形状は椀状を成し、埋土は4層のブロック土から成る。

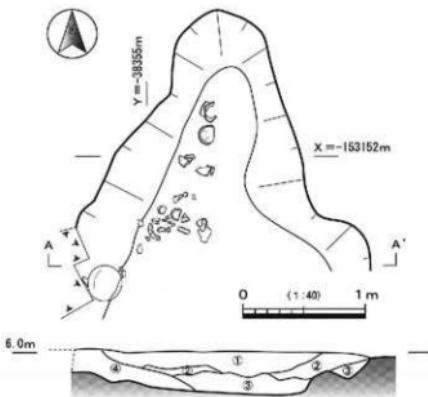
第9回 第2面平面図



本遺構からは、古式土師器壺・甕・器種不明底部・高杯・小型椀・小型丸底土器・小型器台・小型有段鉢・搬入土器・石製品などが多く出土した。これらの遺物は、出土状況からは規格性が認められないことから、投棄された遺物群の可能性が高い。遺物は、遺構内を充填するブロック土に混在しており、したがって、遺物の帰属時期が本遺構の廃絶時期を示すものと推測される。

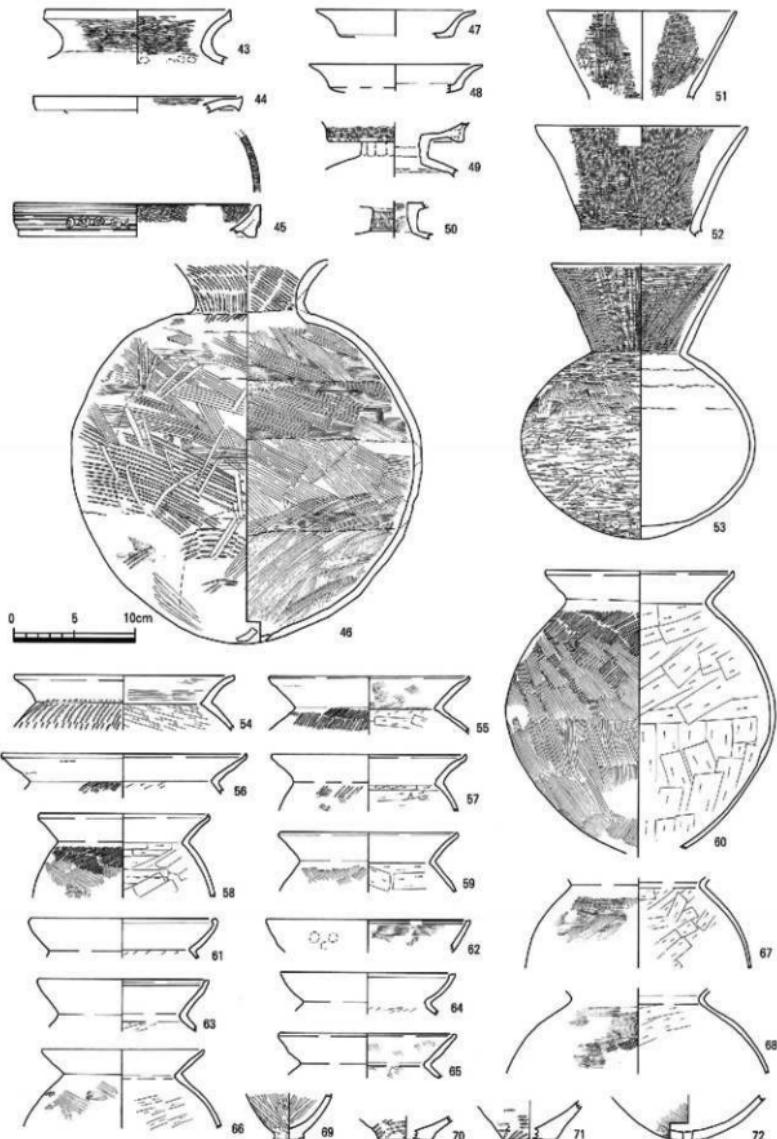
43~53は壺である。43は短頸壺。内・外側ともに横位密ミガキを施す。44~46は広口壺である。45は口縁端部細片。端部上面には若干内傾する平坦面を形成し、端部下端には断面三角形を成す粘土帯を貼り付けて下方に拡張を行う。端

面には凹線文を施した後、竹管押圧円形浮文を貼り付け、加飾する。内面には波状文も見える。46は頸部~底部である。頸部はタタキ出し成形を行う。3分割成形の体部は球形を成す。底部には焼成後に施した穿孔が認められる。47・48は生駒西麓産と推測される二重口縁壺。49・50は短く直立する頸部をもつもので、この内、49は若干内傾する口縁端面に波状文や円形浮文を貼り付けて加飾する。51~53は直口壺である。いずれも胎上は精良で、内・外側ともに密なミガキを施した丁寧な作りである。54~68は甕である。54は外反する口縁部と丸く終わる端部を有し、頸部内面の屈曲が鋭利なものである。頸部はタタキ出しにより成形される。55~60は庄内式甕で、外反する口縁部と上方に拡張する端部を有し、頸部内面の屈曲がケズリ調整により鋭利になるものである。体部外側には右上りタタキ後、ハケナデを施す。口縁部内面はハケナデを施すもの(55)と横ナデのものに分類される。61~68は、内湾する口縁部と内厚する口縁端部を有し、頸部内面の屈曲が横ナデにより鈍角を成すもので、布留式甕の可能性が高い。体部外側は右上りタタキ後、ハケナデを丁寧に施す。口縁端部が内側に丸く肥厚するもの(61)と、内側に肥厚し、内傾する平坦面を形成するもの(63~65)に分類される。また、口縁部内面の調整がハケナデのもの(62・65)と横ナデのものの2種類が存在する。66は、直線的な口縁部と、やや尖り気味の口縁端部を有し、頸部内面の屈曲が横ナデにより丸みを帯びたものである。69~72は壺又は甕あるいは鉢の体部下位~底部である。69は突出した底部をもつもので、体部は縱位ミガキを施す。70・71は甕か?ドーナツ底を成し、外側にはタタキが見える。72は有孔鉢。丸底の最下部に円孔をもつ。73~80は高杯である。73・74は有稜高杯、75は楕円高杯である。いずれも、内・外側ともに密なミガキが施され、精製品である。76・77は柱状部細片。78~80は大きく開く裾部を



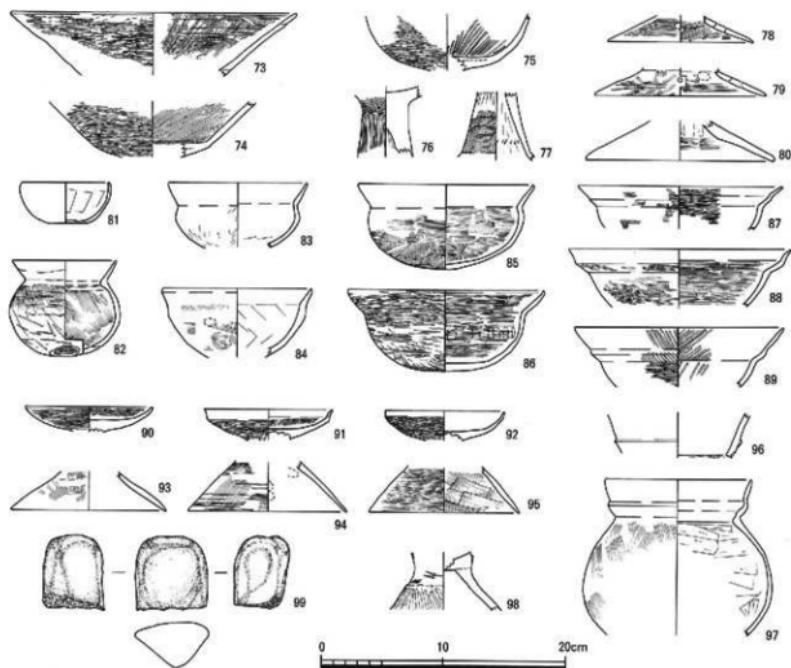
第10図 S K202平・断面図

- ① 灰色 (5Y1/1) 横縞状～縦縞状上質シルト～シルト(ブロック)
- ② オリーブ色 (5Y5/1) 黏土質シルト(ブロック)
- ③ オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 黏土質シルト～シルト(ブロック)
- ④ 淡色 (10Y4/1) 黏土質シルト(ブロック)



第11図 SK 202出土遺物① (S = 1/4)

もつもので、概ね、外面はハケナデ後ミガキ、内面はハケナデ調整を施す。81は小型椀。口縁部は内湾し、大きな平底を有する。82～84は小型丸底土器。直線的に短く開く口縁部をもつもので、体部の形状で3種類に分類できる。82は扁球形を成し、口径と体部最大径がほぼ等しい。83は扁球形であるが、口径が体部最大径を凌ぐ。84は半球形の体部を有する。82の底部には、焼成後にされた穿孔が1個存在する。85・86は小型鉢である。85はハケナデ、86は密なミガキ調整である。87～89は有段口縁鉢。いずれも胎土は精良で、ミガキ調整も密に行う。精製品である。90～95は小型器台である。この内、90～92は受部細片で、受部が内湾するもの(90)、口縁端部が外反気味に直立するもの(91・92)に区分できる。いずれも密なミガキ調整が行われる。93～95は裾部細片。外面調整は概ねハケナデ後ミガキ調整である。96～98は搬入品と推測される。96は壺の口縁部・頸部細片。口縁部には断面が低い三角形を成す突帯が巡っている。頸部内面の屈曲は鋭利。山陰地域の上器を模倣したもののが考えられる。97は二重口縁壺。山陰地域からの搬入品であろう。98は脚台部。底面が平坦を成す底部に、八の字に開く脚台部が付くものである。脚台部外面はミガキ。99は石製品。素材は砂岩と推測され、3面に研磨による加工痕が確認できた。



第12図 SK 202出土遺物②(S=1/4)

これらの遺物群は、有段高杯の存在や小型器台の形態などからは、庄内式期新段階の特徴が色濃く反映されているが、布留式甕も混在しており、S D101内出土土器集積101と同様に、布留式期古段階に帰属時期を求める。

S K203

VI-7-5 E 地区検出の土坑である。S D101下面検出遺構である。平面形状はほぼ円形を呈する。規模は径約0.15m、深さは約0.06mを測る。断面形状は楕円形を成し、埋土はブロック土の単層で充填される。出土遺物はなし。

S K204

VI-7-5 F・6 F 地区検出の土坑である。3層下面検出遺構である。平面形状はほぼ円形を呈する。規模は径約0.5m、深さは約0.12mを測る。断面形状は楕円形を成し、埋土はブロック土の単層で充填される。出土遺物はなし。

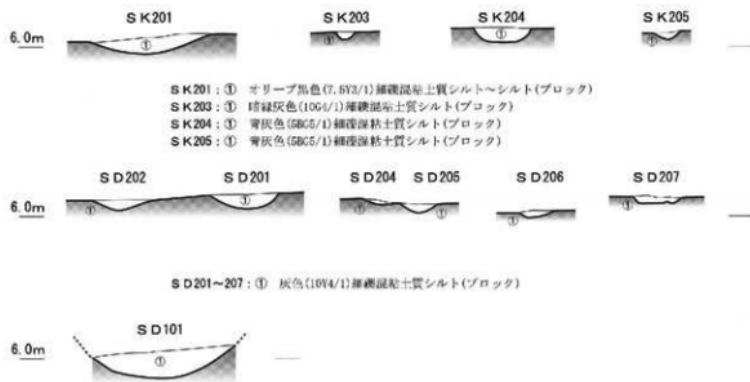
S K205

VI-7-6 F 地区検出の土坑である。3層下面検出遺構である。平面形状はほぼ円形を呈する。規模は径約0.2m、深さは約0.06mを測る。断面形状は楕円形を成し、埋土はブロック土の単層で充填される。出土遺物はなし。

溝(S D)

S D201~207

VI-7-5 E・6 E 地区で検出した溝群である。S D101・N R101下面検出遺構である。溝群は概ね東-西方向に伸びる溝群(S D201・202・207)と南-北に伸びる溝群(S D203~206)に分類できる。検出規模はそれぞれ長さ0.5~1.8m、幅約0.3~0.4m、深さ約0.03~0.12mを測る。断面形状は楕円形である。埋土は、第4層を巻き上げたことにより生じたブロックが充填されており、耕作に伴う搅拌溝の可能性が高い。遺物については、若干の出土を見た。この内図化できたものは、S D203から出土した1点(100)である。



第13図 第2面検出遺構断面図(S=1/40)

100は古式土師器広口壺の口縁部～口縁端部細片である。口縁部は緩やかに外反し、端部には外傾のにぶい端面が見える。外面調整は横位ミガキである。内面には赤色顔料の塗布が認められる。古墳時代前半の所産か。



第14図 SD 203出土遺物
(S=1/4)

地層内出土遺物

3層内出土遺物(101～122)

弥生時代後期後半～古墳時代前期(布留式期)の遺物が出土した。以下概説を行う。

101は大きく外反する口縁部を成す広口壺。102は器台。口縁部は内湾し、端部は粘土帯を貼り付けて、拡張する。凸を成す端面には櫛搔直線文を施す。口縁部調整はミガキである。103は壺の体部細片。波状文と直線文で装飾を行う。104～108は壺である。104・105は弥生系の壺。体部は2分割成形で、最大径は中位に位置する。体部外面には右上りの粗いタタキを、内面は板ナデを施す。106・107は庄内式壺、108は布留式壺と推測される。109～113は壺または壺かあるいは鉢の体部下位～底部である。109は上げ底の底部をもち、外・内面ともにミガキ調整を施す。110～112は平底、113はドーナツ底を成す。114は直線的に長く伸びる口縁部を有する粗い作りの壺である。口縁端部はつまみ調整による乱れが残り、口縁部～体部にかけて粘土接合痕が顕著に見える。115～120は高杯の柱状部である。概ね縦位ミガキのもの(115)と、縦位板ナデ後、横位密ミガキのもの(116～120)に分類できる。この内、120は、杯部内面にミガキを施す。121は小型丸底土器。体部は扁球形を成し、口径が体部最大径を上回る。122は小型器台。外面は横位密ミガキを施す。

4層内出土遺物(123～128)

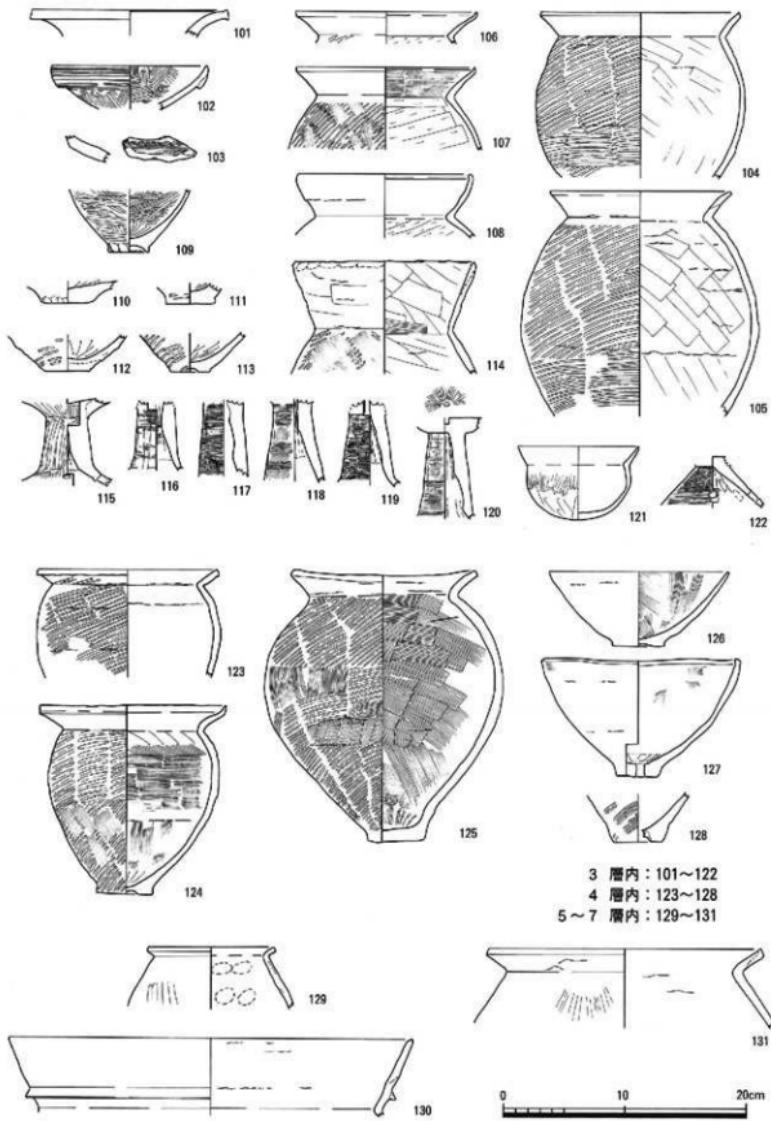
弥生時代後期初頭に帰属する遺物群が出土した。なお、今回の報告では、これらの遺物群を4層内出土遺物としたが、①：遺物群は一箇所からまとまった状態で出土した、②：遺物群は摩滅を受けていない、③：遺物群の内、数固体は完形に近い状態で出土した、ことなどの特徴を有することから、遺構に伴う遺物であった可能性が高い。

123～125は、体部最大径が中位より上に位置し、いちご形を成す壺である。短く外反する口縁部を有し、外傾の端面を形成するもの(123・125)と、短く外反する口縁部をもち、上方に拡張する端部を有するもの(124)に区分できる。体部は2～3分割成形で、右上りの粗いタタキを施す。126・127は鉢。この内127の口縁端部は上方に拡張を行う。底部はドーナツ底(126)と突出する平底(127)が認められる。127の底部中央には円孔が穿たれることから、有孔鉢である。

5～7層内出土遺物(129～131)

弥生時代中期～後期に比定される土器群が出土した。

129～131は壺である。129は短く外反する口縁部を有し、外傾の平坦面をもつもので、肩部の開きが小さい点が特徴的である。体部外面には縦位ミガキが見える。東部瀬戸内地域からの搬入品の可能性が考えられる。130は口縁部外面に断面三角形の突帯が廻る大型の個体で、山陰地域産と推測される。131は129に比して、肩部が丸く開くものである。



第15図 地層内出土遺物 ($S = 1/4$)

第3章 まとめ

今回の調査区周辺では、平成14年1月～8月にかけて、(財)大阪府文化財センターにより竜華東西線2-1工区外埋蔵文化財発掘調査が実施されており、弥生時代前期～中世の遺構群を重層的に検出した。このうち、T.P.+6.5m前後で検出した古墳時代初頭～前期にかけての遺構面では、微高地上に構築された4棟の竪穴住居を検出している。これらの住居は、耕作に伴うと推測される多数の溝群に切られており、住居の廃絶後に開墾行為が行われたことが判明した。また、井戸枠に井樋を転用した奈良時代の井戸を検出しており、当然のことながら、これらの時代の生活面が本調査区にも広がっている可能性が高いと判断し、これらの時代の遺構面を中心に調査を進めていった。その結果は、先述の通りである。本調査区では、古墳時代中期以降の遺構面・生活面は近代～現代の搅乱で破壊されており、その痕跡を残していないことが明らかになった。唯一、NR101だけが、調査区を南東から北西に横切る流路の痕跡として確認できたのみである。

古墳時代初頭～前期については、(財)大阪府文化財センターの調査で明らかになった、竪穴住居で構成された居住域の西への広がりが、本調査区でも確認できた。本調査区における当該期の遺構として、SD101とSK202が挙げられる。SD101は本調査区を南東から北西に直線的に伸びる溝である。この溝の東肩では、約1m四方の限定された範囲において土器集積101が出土したが、出土状況からは意識的に埋置した様子は窺えず、むしろSD101より北東側から投げ込まれたものと判断することができる。SK202については、SD101内出土土器集積101とほぼ同時期の遺物群が出土した。この遺物群は、廃絶時に形成された遺構埋上に混在したものであり、したがって、遺構の性格を予測することは難しい。ただし、両遺構ともに、本調査区の北東に位置する(財)大阪府文化財センターが検出した居住域との関係は指摘できそうである。

弥生時代後期については、4層内出土遺物に注目したい。当遺物は、出土範囲がある程度限定できることや、出土遺物がほぼ完形に近いものが多いことなどから、遺構に伴うものであった可能性が考えられる。この場合、遺構基盤層は、4層上面、あるいは4層内が想定される。

弥生時代後期以前については、ラミナ構造の発達した水成層が早く堆積していることから、遺構面が存在する可能性は低い。地層断面の観察では、重層的に、時期の異なる流路を数条確認しており、本調査区を含む周辺一帯が、常に流芯に近い地点に位置していた可能性が考えられる。

参考文献

- ・中西靖人・尾谷雅彦・寺川史郎・金光正祐・山口誠治 1987『久宝寺北(その1～3)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・松岡良恵・今村道雄 1987『久宝寺南(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・折本 哲 1986『久宝寺南(その3)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・藤井淳弘 1999「1. 久宝寺遺跡(98-415)の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会
- ・後藤信義・島崎久恵・福島里浦・長田芳子 1998『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・(財)大阪府文化財調査研究センター 1998『久宝寺遺跡七ツ門 古墳現地検討会資料』
- ・西村 歩・酒井泰子・佐伯博光・後藤信義・長田芳子 1999『久宝寺遺跡・竜華地区』(財)大阪府文化財調査研究センター

- ・西村 歩・酒井泰子・長田芳子 2000「久宝寺遺跡(竈華東西線)の発掘調査成果」『2000年度竈華会資料』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・原山昌則・吉田珠己・岡田清一・古川晴久・樋口 眞 2006「I 久宝寺遺跡(第23次調査)」「久宝寺遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告89」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・清 斎・坪田真一・古川晴久・樋口 真 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書—大阪竈華都市拠点地区竈華東西線3工区の掘削工事に伴う」(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原山昌則・西村公助・岡田清一 2004「I 久宝寺遺跡(第28次調査)」「久宝寺遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告77」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・坪山真一 2003「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書—大阪竈華都市拠点地区竈華東西線4工区に伴う—」(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子・樋口 真・金親潤夫 2000「4. 久宝寺遺跡第33次調査(K H2000-33)」「平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村 歩他 2004『八尾市 久宝寺遺跡・竈華地区発掘調査報告書VI—大阪竈華都市拠点地区竈華東西線建設に伴う発掘調査—(財)大阪府文化財センター調査報告書 第118集』(財)大阪府文化財センター

図 版



調査地周辺状況(東から)



第1面全景(西から)



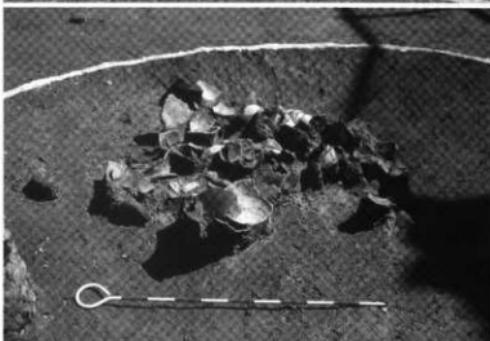
第2面全景(西から)



SD 101(南東から)



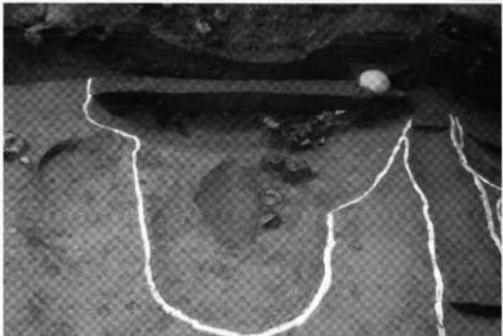
SD 101内出土土器集積101(北から)



SD 101内出土土器集積101(西から)



S K202(北東から)



S K202(北から)



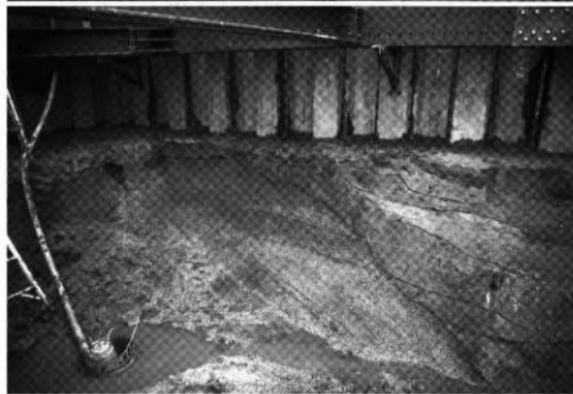
S K202遺物出土状況(北から)



南壁断面
(T.P. +5.2~6.5m : 北から)



南壁断面
(T.P. +4.5~6.0m : 北から)



南壁断面
(T.P. +2.9~4.0m : 北西から)



21



22



23



28



33



35



41



42



49



46



53



60



81



82



85



86



97



104



121



123



124



126



125



127

II 東郷遺跡第36次調査（T G 91-36）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市光町1丁目1-37地内で実施した工場付自動車展示場建設工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第36次調査(TG91-36)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成3年5月20日から6月18日(実働24日)にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約550m²である。
1. 現地調査においては、磯上サカエ・沖田純一・小田久一・垣内洋平・坂下学・濱田千年・船倉早苗・真柄竜・正木洋二の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成19年2月28日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測—北原清子・徳谷尚子・村田知子、図面レイアウト・遺構図面トレースー荒川和哉、遺物図面トレースー山内千恵子、遺物写真撮影ー徳谷が行い、他に黒田幸代・藤原由理子の協力を得た。
1. 本書の執筆・編集は、荒川が行った。

本　文　目　次

第1章 はじめに	21
第2章 調査概要	22
第1節 調査の方法と経過	22
第2節 疎序	22
第3節 検出遺構と出土遺物	26
1)検出遺構と遺構に伴う出土遺物	26
2)土器群とその出土遺物	31
3)遺構に伴わない出土遺物	33
第3章 まとめ	36

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	21
第2図 調査区設定および地区割図	22
第3図 確地層断面図	23・24
第4図 第1面検出遺構平面図	27
第5図 第1面検出遺構出土遺物実測図	28
第6図 第1面検出溝断面図	29
第7図 溝201出土遺物実測図	29
第8図 第2面検出遺構平面図	30
第9図 落込み202断面図	30
第10図 土器群出土遺物実測図	32
第11図 遺構に伴わない出土遺物実測図	34

表 目 次

表1 第1面検出遺構出土遺物観察表	28
表2 溝201出土遺物観察表	29
表3 土器群出土遺物観察表	33
表4 遺構に伴わない出土遺物観察表	35

図 版 目 次

図版一 北調査区 北壁西部地層断面	
北調査区 第1面全景	
南調査区 第1面全景	
図版二 南調査区 溝101完掘状況	
北調査区 溝101堆上断面	
北調査区 溝101遺物出土状況	
図版三 南調査区 落込み101完掘状況	
北調査区 第2面全景	
北調査区 溝201完掘状況	

- 図版四 北調査区 落込み202完掘状況
北調査区 落込み202埋土断面
北調査区 土器群Ⅰ検出状況
- 図版五 北調査区 土器群Ⅱ北部検出状況
北調査区 土器群Ⅲ下部検出状況
南調査区 土器群Ⅳ南部検出状況
- 図版六 第1面検出遺構・溝201出土遺物
- 図版七 土器群Ⅰ・土器群Ⅱ・土器群Ⅲ出土遺物
- 図版八 土器群Ⅲ・土器群Ⅳ出土遺物
- 図版九 土器群Ⅳ・遺構に伴わない出土遺物
- 図版一〇 遺構に伴わない出土遺物

第1章 はじめに

東郷遺跡は、八尾市の中央部の北西寄りに位置する近畿日本鉄道大阪線八尾駅(以下、近鉄八尾駅とする)周辺の東西約1.2km、南北約1.0kmの範囲に所在する弥生時代中期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、本町1・2丁目、東本町1～5丁目、北本町2丁目、光町1・2丁目、桜ヶ丘1～4丁目、庄内町1・2丁目、旭ヶ丘1丁目の一部がその範囲に含まれる。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P. +7.0～9.2mを測る。

東郷遺跡は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に面されている河内平野の南部の北寄りに位置する。河内平野の南部は、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が西ないし北方向に放射状に流れている。東郷遺跡は、旧大和川水系のうち旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。

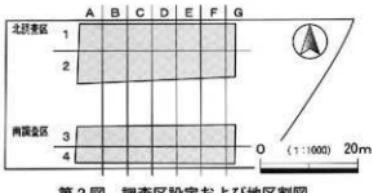
今回の調査地を含む近鉄八尾駅とその北側一帯では、昭和55(1980)年の八尾都市計画事業近鉄八尾駅前土地区画整備事業以降、ビル・共同住宅・店舗の建設などの各種工事、および楠根川河川改修工事によって破壊される遺跡を対象とした発掘調査が大阪府教育委員会(以下、府教委とする)・八尾市教育委員会(以下、市教委とする)・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、調査研究会とする)により実施されている。

その結果、弥生時代後期の土坑・河川、古墳時代初頭(庄内式期)～前期(布留式期)の居住域・



第1図 調査地周辺図

墓域・生産域、平安時代～鎌倉時代の水田などが検出され、近世以降は主に耕作地であったことが確認されている。の中でも、古墳時代初頭から前期にかけてが、当遺跡の中心となる時期であることがわかつており、調査結果に基づいた当該時期の遺構群の推移が確認されている。



第2図 調査区設定および地区割図

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は工場付自動車展示場建設工事に伴うもので、市教委・調査研究会が東郷遺跡内で実施した発掘調査の第36次調査(T.G91-36)にあたる。

調査地は八尾市光町1丁目、近鉄八尾駅の約260m北方に位置している。調査地は北側に底辺を持つ台形を呈する(第1図)。調査地の北部に北調査区、南部に南調査区を設定した。調査区の上幅の規模は、北調査区が東西31m・南北11～12m、南調査区が東西31m・南北7.5mで、それぞれ東西に長い矩形を呈する。

調査区には地区割を設定した。南北の区割は各調査区の長軸で南北に分け、東西の区割は5mを1単位として区画した。地区の呼称については、南北方向は算用数字(北調査区北部は1、南調査区南部は4)、東西方向はアルファベット(西から東へA～G)で示した。北調査区北西部が1A地区、南調査区南東部が4G地区となる(第2図)。

調査に際しては、現地表(T.P.+7.4～7.5m)下1.0～1.3mを重機による掘削の対象範囲とし、以下約0.5mについては人力掘削を行った。掘削は、北調査区の北辺・西辺と南調査区の南辺に鋼矢板を打設し、北調査区から開始した。

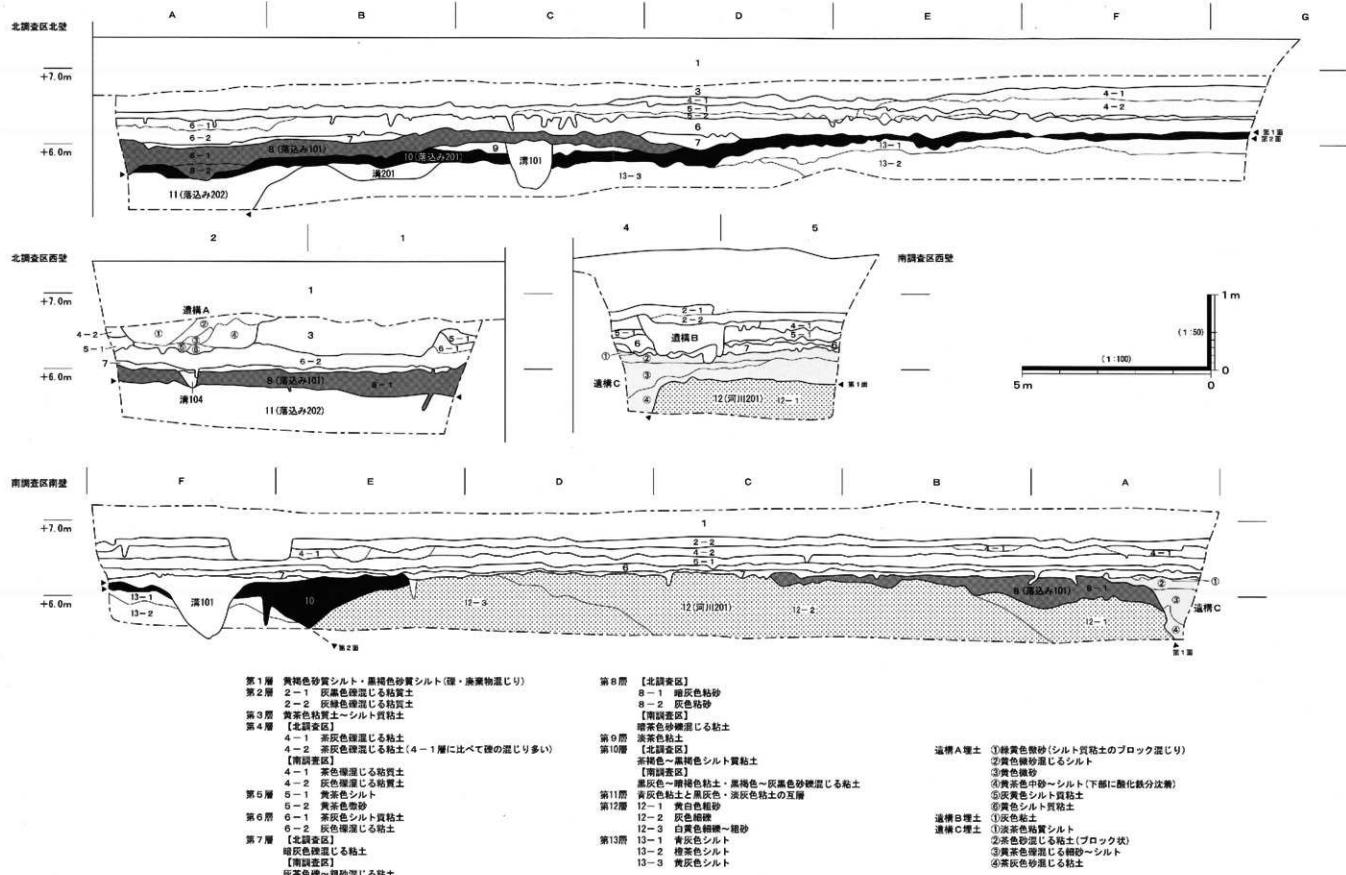
遺構検出面の呼称については、機械掘削が終了し、人力掘削による調査で遺構を検出した面を「第1面」と呼称し、上位の遺構検出面から順に番号を付した。遺構名については、遺構種別+遺構検出面番号+遺構番号(2桁)で表現した(例、落込み101=第1面検出の落込み1)。

調査の結果、弥生時代後期後葉ないし古墳時代初頭前半と推測される溝1条・落込み1箇所、古墳時代初頭前半の溝4条・落込み2箇所・土器群4箇所、古墳時代初頭前半までには埋没していた河川1条が検出された。出土遺物は、整理用コンテナ(60×40×20cm)6箱を数える。

第2節 層序(第3図、図版一)

調査地に堆積する地層は、北調査区と南調査区とでは異なる部分が多い。上層部分は、南調査区では旧水田耕作土である第2層が見られるが、北調査区では近代の盛土である第3層が見られる。下層部分では、南調査区では古墳時代初頭までにはすでに埋没していた河川の流路に堆積した砂礫層である第12層が見られるが、北調査区では見られない。

調査地の旧地形は、南北方向では南側が、東西方向では東側が高い。南側が高いのは、この河川に砂礫が厚く堆積したことによると推測される。河川形成以前から東側が高く西側が低いため、



第3図 墓地断面図

西側の低い方向に河川が形成されたと考えられる。今回の調査で検出された遺構は、その旧地形の落込みと、その落込みに廃棄された土器群、そして溝である。

調査地で確認した各地層を、小規模な遺構埋土を除き、堆積相などから分類し層序とする。

第1層：黄褐色砂質シルトからなる上層(整地層)と径数cmの礫や廃棄物・ブロック土を含む黒褐色砂質シルトからなる下層(盛土層)に分けられる。現地表面である上面の標高は、北

調査区ではT.P.+7.4m、南調査区ではT.P.+7.5m前後で、層厚は80cm前後である。

第2層：礫混じる粘質土。南調査区にのみ見られる。灰黒色を呈する上層と灰緑色を呈する下層に分けられる。旧水田耕作土である。上面の標高はT.P.-6.8m前後で、層厚は10~15cmである。

第3層：黄茶色シルト質粘土。北調査区にのみ見られる。近代の盛土である。機械掘削で上部を除去したため、上面の標高は不明であるが、T.P.+6.9mよりは上位にある。層厚は、機械掘削後の残存部分で20~50cmである。昭和23年の米軍撮影の航空写真に見られる水田の間を東西に伸びる農道の盛土と推定される。北調査区西壁で、本層を切る遺構埋土(遺構A)が確認できる。遺構Aは、農道に付随する用水路と推定される。

第4層：北調査区では、黄茶色礫混じる粘土。中央部より東側に見られる。上面の標高はT.P.+6.5~6.75mで、層厚は0~40cmである。南調査区では、茶灰色礫混じる粘土。第2層の水田耕作土の床土となっている。上面の標高はT.P.+6.7m前後で、層厚は10~15cmである。南調査区西壁で、本層を切る遺構埋土(遺構B)が確認できる。

第5層：黄茶色シルト～微砂。両調査区に見られる。北調査区の中央部より東側では、上層のシルトと下層の微砂の2層に分かれる。上面の標高は、北調査区ではT.P.+6.35~6.5m、南調査区ではT.P.+6.6m前後である。層厚は、北調査区では0~20cm、南調査区では15cm前後である。近世以前の遺物を含む。遺物については、後で記載する。

第6層：灰色礫混じる粘土。両調査区に見られる。上面の標高は、北調査区ではT.P.+6.3m、南調査区ではT.P.+6.4~6.5mである。層厚は、北調査区では20~30cm、南調査区では10cmである。水田耕作土と推測される。中世以前の遺物を含む。

第7層：北調査区では、暗灰色微砂混じる粘土。南調査区では灰茶色礫～粗砂混じる粘土。全体にわたって薄く堆積しているが、見られない部分もある。上面の標高は、北調査区ではT.P.+6.0~6.1m、南調査区ではT.P.+6.3~6.4mである。層厚は、両調査区ともに10cm前後である。古墳時代中期以前の遺物を含む。

第8層：北調査区では、暗灰色粘砂。南調査区では暗茶色砂礫混じる粘土。上面の標高は、北調査区ではT.P.+5.9~6.15m、南調査区ではT.P.-6.3~6.4mである。層厚は、両調査区ともに0~40cmである。土器群I・土器群IIの遺物は、本層に帰属する。土器群以外の部分でも古墳時代初頭前半の遺物を含む。南調査区南壁・西壁で、本層を切る遺構埋土(遺構C)が確認できる。土器群IVの遺物は、遺構Cの埋土に帰属する。本層の下面は第1面。【落込み101埋土】

第9層：淡茶色粘土。北調査区の溝101の両肩に沿って見られる。上面の標高はT.P.+5.9~6.0mで、層厚は0~15cmである。

第10層：北調査区では、茶褐色～黒灰色シルト質粘土。南調査区では、黒灰色～暗褐色粘土。河川201の上位では、河川201の埋土である第12層の砂礫と混じり合っており、黒褐色～灰黑色砂礫混じる粘土である。北調査区では全域に見られるが、南調査区では東部のみ見られる。上面の標高は、北調査区がT.P.+5.8～6.15m、南調査区ではT.P.-6.2～6.35mである。層厚は、北調査区が5～25cm、南調査区が0～70cmである。古墳時代初頭前半の土器群Ⅲの土器は本層に帰属する。土器群Ⅲ以外の部分では、遺物を含まない。遺物については、後で記載する。本層の下面是第2面。【落込み201埋土】

第11層：青灰色粘土と黒灰色・淡灰色粘土の互層。粘土には木本・草本の植物遺体を含む。【落込み202埋土】

第12層：白黄色・黄白色を呈する砂礫。上部は土壤化しており、茶褐色・淡茶色を呈する。南調査区の東部を除く部分に見られる。上位(西)から、黄白色粗砂(12-1層)・灰色細礫(12-2層)・白黄色細礫・粗砂(12-3層)が堆積する。河川の流路充填堆積物である。上面の標高はT.P.+5.7～6.35mである。灰色細礫(12-2層)がT.P.+4.0m程度まで落ちることを確認した。【河川201埋土】

第13層：青灰色シルト。落込み201・河川201で切られる部分以外の全域に見られる。上面の標高は、北調査区がT.P.-6.1～4.8m(確認部分)、南調査区がT.P.+6.15～5.65m(確認部分)である。層厚は、北調査区が0～80cm以上で、南調査区が0～45cm以上である。

第14層：白灰色粗砂。北調査区東部で部分的に確認した。上面の標高はT.P.+4.55～5.65mで、層厚は20cm以上である。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構と遺構に伴う出土遺物

・第1面(第4図、図版一)【古墳時代初頭前半】

第1面は、第8層までを除去した面である。標高は、北調査区がT.P.+6.15～5.5m、南調査区がT.P.+6.3～5.5mである。第1面では、古墳時代初頭前半の溝4条(溝101～溝104)・落込み1箇所(落込み101)が検出された。

溝101(第5・6図、表1、図版二・六)

北調査区の中央部(1～2C、D地区)、南調査区の東部(3E、3～4F地区)で検出された。南東～北西方向に伸びる溝で、幅1.20～1.50m、深さ0.55～0.6mを測る。埋土については、第6図に示したが、ブロック上からなる上層と、一部に葉理の見られる下層に大別できる。埋土の上層から古墳時代初頭前半(庄内式古相)の完形に近い古式上師器の高杯1点(1)が横に倒れた状態で出土している。他の出土遺物はない。

溝102(第5・6図、表1、図版六)

北調査区の西部(1～2B、2C地区)で検出された。南から北西へ僅かに屈曲して伸びる。北壁断面で確認できないことから、北端は北調査区内で終結していることがわかる。幅0.35～0.65m、深さ0.06～0.12mを測る。埋土は、灰黑色砂混じる粘土の単層である。埋土から古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器片が出上している。その中の1点(2)を図化した。

溝103(第5・6図、表1、図版六)

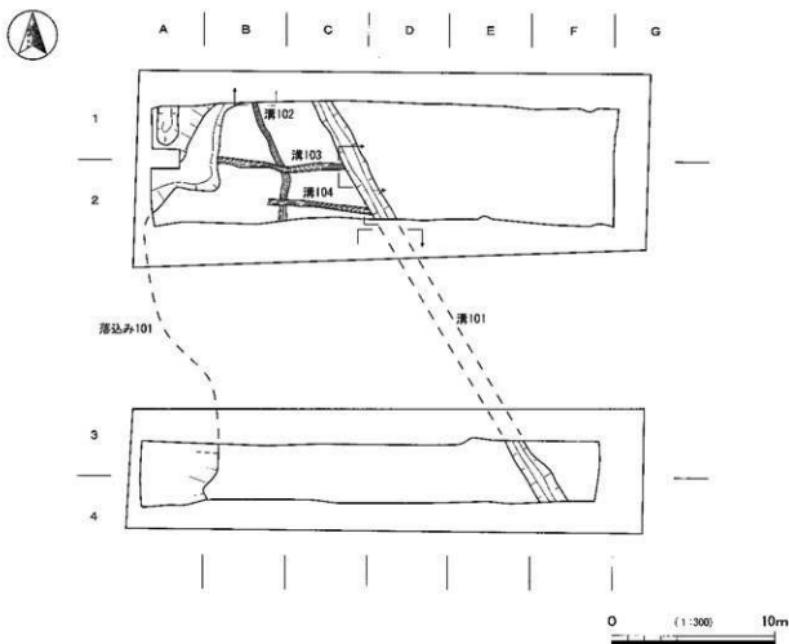
北調査区の西部(1B・2B・C地区)で検出された。東西方向に伸びる。西壁断面で確認できることから、西端は北調査区内で終結していることがわかる。幅0.40~0.60m、深さ0.10mを測る。埋土は、褐色灰色砂混じるシルト質粘土である。埋土から古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器片が少量出土している。その中の1点(3)を図化した。

溝104(第6図)

北調査区の西部(2B~C地区)で検出された。溝103の南側に2.0~2.5mの間隔を置き、平行して伸びる。幅0.50m前後、深さ0.10m前後を測る。埋土は、上位から①褐色灰色砂混じるシルト質粘土・②灰色微妙である。①から土器片が出土しているが、図化できる遺物はなかった。

落込み101(第5図、第1表、図版三・図版六)

北調査区の西部(1A・B・2A・B地区)、南調査区西部(3~4A地区)で検出された。西側に緩やかに下がる地形の一部を検出したもので、第4図の平面形は、より深く落ち込む部分を示したものである。壁断面の観察から、実際は、両調査区とともにB地区とC地区の境界付近から西側に落ち込んでいる。北調査区の北西部(1A地区)には溝状の窪みが南北に伸びている。東側を除き調査区外に至るため、全体規模・平面形状は不明である。深さは0.40mを測る。埋土は、上位から①暗灰色粘土・②灰色礫混じる粘土である。南調査区では、第11層の粗砂の影響で、①は



第4図 第1面検出遺構平面図

暗茶色砂礫混じる粘土である。②は北調査区の溝状の深みに堆積する土である。埋土から古墳時代初頭前半(庄内式古相)の上器片が出土している。土器群I・土器群IIの出土遺物は、落込み101の埋土である第8層に帰属する。土器群とその出土遺物については、後でまとめて記載する。落込み101埋土の土器群以外の部分から出土した土器の中の4点(4~7)を図化した。

第1面で検出された遺構の帰属時期は、出土遺物と層位から、古墳時代初頭前半に比定される。

ちなみに、第4図は現地調査において遺構を完掘した状況を図化したもので、第1面検出遺構の実際の切り合いで、壁断面に掛かる遺構埋土等を検討した結果、以下のことが確認された。

(i) 北調査区西壁で確認される落込み101の埋土を切る

溝状の遺構埋土は、溝104の埋土であり、溝104と同一の埋土をもつ溝103も落込み101を切る遺構である。

(溝103・溝104は第8層上面遺構である。)

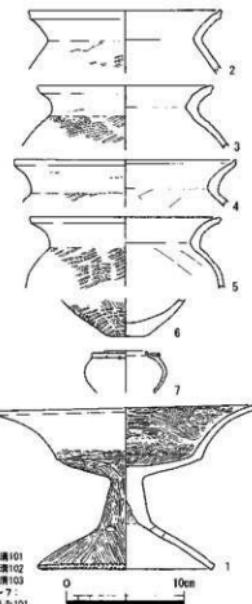
(ii) 落込み101は第8層下面遺構である。

(iii) 溝101は第9層上面遺構である。

(iv) 以上のことから、遺構の切り合いは、上位より溝103・溝104→落込み101→溝101、溝103・溝104→溝102となる。溝102と溝101・落込み101の切り合いは不明である。

・第2面(第8図、図版三)【古墳時代初頭前半以前】

第2面は、第10層までを除去した面である。北調査区がT.P. +6.1~4.5m(確認部分)、南調査区がT.P. +6.15~5.5m(確認部分)である。第2面では、古墳時代初頭前半以前の落込み1箇所(落込み202)・古墳時代初頭前半までは埋没していた河川(河川201)が検出され、古墳時代初頭前半の落込み2箇所(落込み201・落込み202)、古墳時代初頭前半と推定される溝1条(溝201)が検出された。

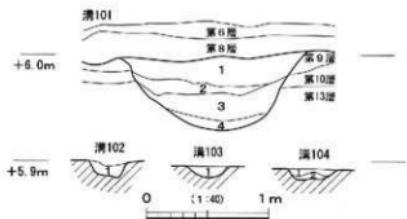


第5図 第1面検出遺構出土遺物実測図

表1 第1面検出遺構出土遺物観察表(計測値の括弧内は復元値)

発見場所 図版番号 番号	遺物 名	出土遺構	種類 等	既存度	計測値 (mm)	確認・文様等		色 調	編 号
						外:山部-横ナギ、体部-下、腹方向へうれき 内:山部-横方向へうれき、側部-ナギ	10YR7/2.5/3に似る黄褐色 (部分的に2.5YR6/8褐色)		
第6図 図版六	1 漏101	古式土器 高杯	口縁部-横部の 1/3未く	口径22.0 底高13.5 底直径14.8	外:山部-横ナギ、体部-下、腹方向へうれき 内:山部-横方向へうれき、側部-ナギ	10YR7/2.5/3に似る黄褐色 (部分的に2.5YR6/8褐色)			
	2 漏102	V様式系 丸	端の1/4	口径(18.4)	外:山部-横ナギ、体部-ナギ	外:10YR6/2/3に似る黄褐色 内:10YR6/3/4に似る黄褐色	付着		
	3 漏103	V様式系 丸	口縁部-体部上 端の1/3	口径(14.9)	外:山部-横ナギ、体部-ナギ 内:山部-横ナギ、体部-ナギ	外:10YR5/2/3に似る黄褐色 内:2.5Y/1灰褐色			
	4 落込み101	V様式系 丸	口縁部の1/3、 体部上端の1/3	口径(18.8)	外:山部-横ナギ、体部-ナギ 内:山部-横ナギ、体部-ナギ	10YR7/2.5/3に似る黄褐色 (内:10YR5/1灰褐色)			
	5 落込み101	V様式系 丸	口縁部-体部上 手の1/6	口径(16.2)	外:山部-横ナギ、体部-ナギ 内:山部-横ナギ、体部-ナギ	10YR6/3/4に似る黄褐色			
	6 落込み101	V様式系 丸	底深3.7		外:山部-横ナギ、体部-ナギ 内:ナギ	外:10YR6/3/4に似る黄褐色 内:10YR7/2/3に似る黄褐色	斑斑有り		
	7 漏込み101	古式土器 小形無底碗	1/3	11.3(3.5)	外:山部-横ナギ、体部-ナギ 内:山部-横ナギ、体部-ナギ 壁のため研磨不規 体部上半に1束の受部状の突起を有し、尖端に2個の粗孔(径1mm、1.2mm範囲)を有す	5YR6/6褐色			北熱系か (※)

* 文様の有無を除き、概似する小形無底碗が北熱系地方で見られる。(1986『庄内道跡』) 石川県立埋蔵文化センター、他)



第6図 第1面検出溝断面図

溝201(第3・7図、表2、図版四・六)

北調査区西部(1~2B地区)で検出された。南北方向に伸び、幅1.8~3.25m、深さ0.15~0.25mを測る。南側・北側は調査区外に至るため、全長は不明である。埋土は青灰色粘土の単層である。埋土から弥生土器(第V様式)が出土している。図化した2点(8・9)以外は、小破片である。

溝201の埋土は、第3図に示した。壁断面の観察によると上位の第10層と色調が異なるだけで類似しており、第10層と同質である可能性が高い。溝が幅広で浅いことと併せ考えると、人為的に掘削されたものではなく、溝状の窪みで、その窪みが第13層上面で検出されたと考えられる。

落込み201

北調査区中央部以西(1A~E、2A~E地区)で検出された。第13層が北調査区の中央部東寄りから西側に段をなして下がっており、下がった部分を落込み201とした。北調査区東部との比高差は約0.3mである。落込みの斜面上で土器群Ⅲの出土遺物は、落込み201の埋土(第10層)に帰属する。土器群Ⅲとその出土遺物については、他の土器群とともに後で記載する。

落込み202(第9図、図版四)

北調査区西部(1~2A・B地区)で検出された。第13層が西側へ落ち込む地形で、東肩のみを検出した。緩やかに下がる上段から、急に下がる下段の2段に落ち込む。上段の肩はほぼ南北に、下段の肩は南西-北東に伸び、深さは検出部分で1.15mを測る。埋土については第9図に示したが、粘土の互層からなる上層と砂礫からなる最下層に分けられる。埋土からは植物遺体が出土したが、人工遺物は出土していない。

埋土に人工遺物を全く含まないことと、埋土が最下層を除き植物遺体を層状に含む粘土の互層であることから、西側に深く落ち込む滯水状態にあった自然地形と考えられる。この自然地形は、次に記載する河川201の河道の一部で、河川201の砂礫に相当する埋土最下層の砂礫で埋没し切れずに窪地となっていた部分と推定される。

【溝201】

1 青灰色粘土・散砂のブロック

2 灰色粘土シルトと散砂の互層

(植物遺体を薄く挟む)

3 灰色細砂(植物遺体を含む)

4 青灰色粘土シルト

【溝202】

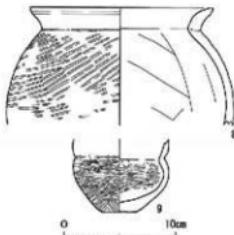
1 黒灰色砂混じる粘土

【溝203・溝204】

1 暗灰色砂混じるシルト質粘土

2 灰色微砂

*断面図の実測箇所は第4図に示した。



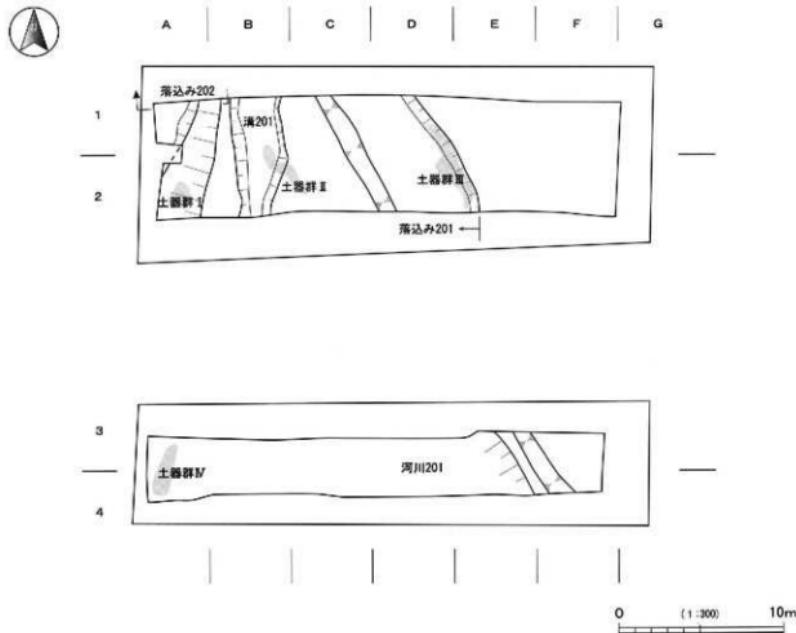
第7図 溝201出土遺物実測図

表2 溝201出土遺物観察表(計測値の括弧内は復元値・推定値)

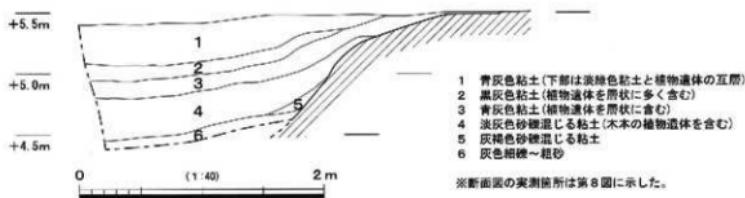
発掘場号 区分番号	遺物 番号	出土遺物 位置	種類 特徴	埋土度	計測値 (cm)	調整・文様等	色 虞	備考
第7図 図版六	8 溝201	第V様式 壺	口縁部-全体上 半の1/3	口径(16.3) 内:口縁部-壺ナギ、体部-右上りのタタキ 内:口縁部-壺ナギ、体部-ナギ	外:10YR76.5/1に近い黄褐色 内:10YR7.5/2に近い黄褐色			
	9 溝201	第V様式 小型甌	口縁部-口縁 部の1/2-体部1/2 底部(8.7) 底径(2.8)	口径(8.0) 内:口縁部-壺ナギ、体部-横方向へのラスク、直面-ナギ 内:口縁部-壺ナギ、体部-上半-横方向へのラスク、体部下半 斜め方向へのラスク	2.5Y7/2灰黄色			

河川201

南調査区東部(3~4E地区)で第13層が西側へ落ち込むのが確認された。落込み202と同様に西側に深く落ち込む。落ち込んだ西側には流路充填堆積物である砂礫が堆積しており、その部分を河川201とした。河川の肩は、南東~北西方向に伸びる。砂礫は、東から白黄色細礫~粗砂・灰色細礫・黃白色粗砂が側方に堆積する。砂礫の堆積後、河川の縁は窪んでおり、砂礫が混じる粘土が堆積する。埋土(砂礫混じる粘土・砂礫)からの出土遺物はない。この砂礫層に相当する地層は、南側の各調査地(第17次・第28次・第44次)で確認されており、古墳時代初頭前半までには



第8図 第2面検出遺構平面図



第9図 落込み202断面図

すでに埋没していた河川と推定されている。

先に記載したように、落込み202の埋土最下層の砂礫が河川201の砂礫に相当すると推測される。この推測が成り立つならば、河川201は南東側からの流れが、当調査地内で蛇行し北方向に流れを変えたと推定される。

第2面で検出した遺構の帰属時期については、落込み201・落込み202が、出土遺物と層位から古墳時代初頭前半に比定される。溝201は、出土遺物からは弥生時代後期後葉に比定されるが、埋土が落込み201の埋土である第10層と同質である可能性が高いことから、古墳時代初頭前半と推定される。落込み202については、埋土からの出土遺物がないために、明確に帰属時期を比定できないが、河川201の河道の一部であると推定されることから、古墳時代初頭前半以前と推定される。

2) 土器群とその出土遺物

第8層・第10層から土器を主体とする遺物が多く出土している。特に土器が集中して出土した部分を土器群とした。北調査区で3箇所、南調査区で1箇所検出され、北調査区の上器群を西から土器群Ⅰ～土器群Ⅲ、南調査区の上器群を土器群Ⅳと呼称した。土器群から出土した上器の器種はV様式系甕が殆どで、他の器種は少ない。他の器種は壺・高杯・鉢で、器台は見られない。壺・高杯には東海系の特徴を持つものが含まれる。土器群全体として残存率は低いものが多いが、土器群Ⅳの出土遺物は他の上器群に比べて残存率は高い。以下に各土器群について記載する。各土器群の位置は、第8図に示した。

土器群Ⅰ(第8・10図、表3、図版四・七)

北調査区南西部(2A地区)、落込み101の底で検出された。南北1.8m・東西1.0mの範囲で土器が出上している。土器群Ⅰの出土遺物は、第8層(落込み101埋土)に帰属する。出土遺物の量は整理用コンテナ約1/2箱である。土器群Ⅰとその周辺の第8層出土の上器には庄内甕を全く含まない。出土遺物の中から1点(10)を図化した。

土器群Ⅱ(第8・10図、表3、図版五・七)

北調査区西部(1～2B・C地区)、落込み101が下がり始める斜面上で検出された。南北3.0m・東西2.5mの範囲で上器が出上している。土器群Ⅱの出土遺物は、この斜面上の第8層(落込み101埋土)に帰属する。出土遺物の量は整理用コンテナ約2/3箱である。土器群Ⅱとその周辺の第8層出土の上器には庄内甕を微少量に含む。出土遺物の中から3点(11～13)を図化した。

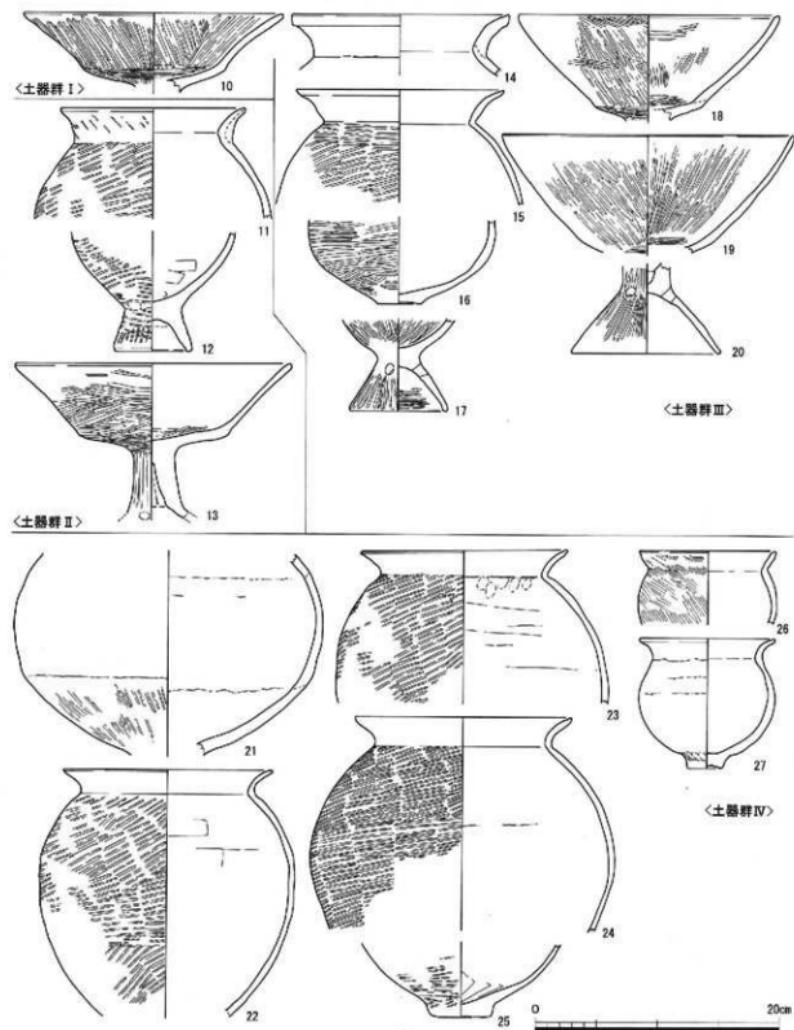
土器群Ⅲ(第8・10図、第3表、図版五・七・八)

北調査区中央部の東寄り(1～2D・E地区)、落込み201が段をなして下がる部分の斜面上で検出された。南北5.5m・東西2.6mの範囲で土器が出上している。土器群Ⅲの出土遺物は、この斜面上の第10層(落込み201埋土)に帰属する。第10層からは土器群Ⅲ以外の部分では遺物は出土していない。出土遺物の量は整理用コンテナ3/2箱である。土器群Ⅲから出土した上器には庄内甕を全く含まない。器種は甕を土体とするが、他の土器群に比べ壺・高杯が多い。そして、壺・高杯には東海系のものが目立つ。出土遺物の中から7点(14～20)を図化した。

土器群Ⅳ(第8・10図、第3表、図版五・八)

南調査区南西部(4A地区)で検出された。南北3.5m・東西1.3mの範囲で上器が出上している。

現地調査では落込み101の埋土中の土器群として取り上げられたが、出土位置と壁断面の記録の検討から、以下のことが確認できる。



第10図 土器群出土遺物実測図

- (i) 南調査区南壁で、落込み101の埋土(第8層)を切る遺構(遺構Cと呼称)が見られる。
- (ii) 遺構Cの埋土は、上位から①淡茶色粘質シルト・②茶色砂混じる粘土(ブロック状)・③黄茶色砂混じる細砂シルト・④茶灰色砂礫混じる粘土である。
- (iii) 土器群IVの出土遺物は、主に遺構Bの埋土②に帰属し、埋土③からも遺物が出土している。現地調査では遺構Cの埋土は落込み101の埋土とともに掘削されたため、平面的には落込み101の一部として検出された。出土遺物の量は整理用コンテナ約1/2箱である。土器群IVから出土した土器には庄内甌の破片を微量に含む。出土遺物の中から8点(21~28)を図化した。
- 土器群I~土器群IVから出土した土器は煮炊具である甌を主体とし、かつ個体の残存度も低いことから、居住域での日常生活で使用されていたもので、破損して使用できなくなったものを集落の縁辺部の落込み・遺構埋土に廃棄したものであると推測される。

3) 遺構に伴わない出土遺物(第11図、表4)

南調査区第5層~第7層・北調査区第6層出土遺物(図版九・一〇)

南調査区の西部で第5層~第7層の掘削中に近世以前の遺物(土器[V様式系・土師器・須恵器]・埴輪・瓦・石器の破片)が、北調査区の第6層から中世以前の遺物(土器[V様式系・土師器・須恵器・中世土師器・東播系須恵器])が微量に出土している。南調査区では第5層~第7層が薄く一緒に掘削したため、第5層~第7層の遺物を地層ごとに分けて取り上げることができなかったが、

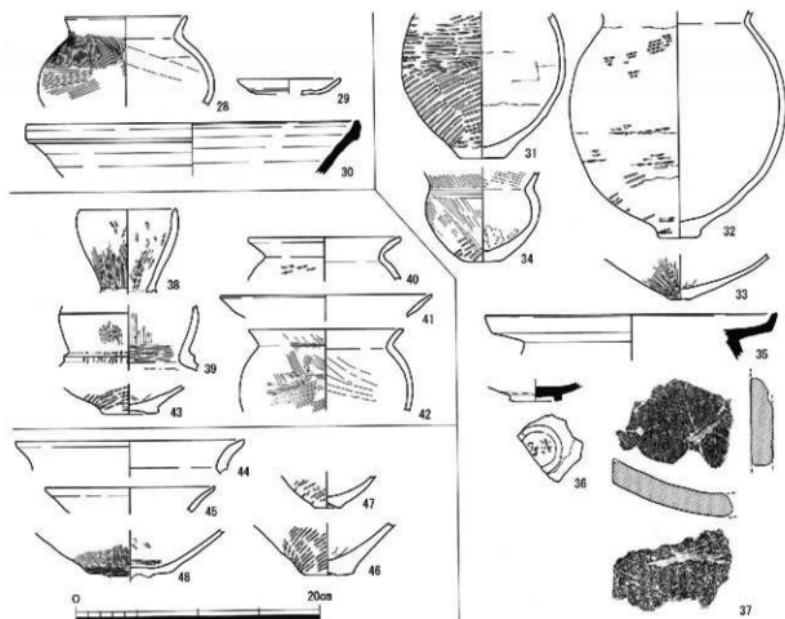
表3 土器群出土遺物観察表(計測値の括弧内は復元値)

発見番号 遺物 番号	出土遺物 番号	種類 特徴	残存度	計測値 (cm)	調整・文様等	色 調	備考
第10回 図版七	10 土器群I (第6層) 高杯	古式土器群 高杯	杯形	口径21.2	腹内へのへき裏	10YR7/3に近い黄褐色	
	11 土器群II (第6層) 高杯	V様式系 高杯	底部の2/3、体部 内:0.4/1.6	口径(15.0) 高さ(1.6)	外:口絞部・横ナデ、体部・右とりのタキ 内:口縁部・横ナデ、体部・ナデ	10YR7/3に近い黄褐色	
	12 土器群II (第6層) 高杯	V様式系 高杯	底部下端~凹部	台部径6.4	外:タキ 内:ナデ	10YR7.5/2に近い黄褐色	
	13 土器群II (第6層) 高杯	古式土器群 高杯	口縁部の1/4、脚部	口径(22.0) 高さ(1.6)	外:杯部・脚部・脚部・肩方向へのへき裏 内:杯・肩・肩方向へのへき裏 高さ1.6mm	10YR7/3に近い黄褐色	東104川土器類 と合流
	14 土器群II (第10層) 高杯	V様式系 高杯	口縁部の1/2、体部 上部の1/2	口径(17.7) 高さ(1.6)	外:口絞部・横ナデ 内:口縁部・横ナデ	10YR7/2に近い黄褐色	
	15 土器群III (第10層) 高杯	V様式系 高杯	口縁部の1/3、体部 上部の1/4	口径(16.9) 高さ(1.6)	外:口絞部・横ナデ、体部・右とりのタキ 内:口縁部・横ナデ、体部・ナデ	10YR7/3に近い黄褐色 10YR8/3に近い黄褐色	外側に付着 物
	16 土器群III (第10層) 高杯	古式土器群 高杯	体部下平~凹部	底径(3.5)	外:体部・横方向へのへき裏 内:ナデ	10YR7/3に近い黄褐色 10YR8/3に近い黄褐色	東海系 (ヒサフ電)
	17 土器群III (第10層) 高杯	古式土器群 高杯	口縁部下端~凸部 内:0.3を欠く	口径(7.8) 高さ(1.6)	外:縦方向のへき裏 内:体部・縦方向へのへき裏、台部・ナデ	7.5YR7/3に近い褐色	東海系
	18 土器群III (第10層) 高杯	古式土器群 高杯	柄部の1/5	口径(21.0)	外:縦方向のへき裏 内:縦方向のへき裏(一部、横方向のへき裏)	10YR7/3に近い黄褐色	東海系
	19 土器群III (第10層) 高杯	古式土器群 高杯	部下平	口径(23.8)	外:範囲内へのへき裏 内:範囲内へのへき裏、底部・横方向のへき裏	10YR7/3に近い黄褐色	東海系
第10回 図版八	20 土器群IV (第10層) 高杯	古式土器群 高杯	口縁部・柄部の1/3を 欠く	底径(12.0)	外:範囲内のへき裏 内:ナデ	10YR7/5に近い黄褐色 10YR7/3に近い黄褐色	東海系 特に同一個体か
	21 土器群IV (遺構C埋土) 高杯	古式土器群 高杯	体部下平の3/4、体 体部大軸 下部の1/2	口径(25.3)	外:体部下平・横方向へのへき裏 内:ナデ	10YR7/2に近い黄褐色 2.5YR7/1黒褐色	外面に黒皮有り
	22 土器群IV (遺構C埋土) V様式系 高杯	V様式系 高杯	口縁部下平 の1/2、体部下平の 1/2	口径(17.0)	外:口縁部・横ナデ、体部・右とりのタキ 内:ナデ	10YR8/3に近い黄褐色 10YR7/3に近い黄褐色	外面に付着物
	23 土器群IV (遺構C埋土) 高杯	V様式系 高杯	口縁部~体部上半 部	口径(16.8)	外:口縁部・横ナデ、体部・右とりのタキ 内:ナデ	5.5YR7.4/2.5YR7/3に近い褐色	
	24 土器群IV (遺構C埋土) 高杯	V様式系 高杯	口縁部~体部下平 部	口径(17.6)	外:口縁部・横ナデ、体部・右とりのタキ 内:ナデ	10YR7/3に近い黄褐色	
	25 土器群IV (遺構C埋土) 高杯	V様式系 高杯	底部・体部下平の 小字底	底径(2.7)	外:タキ、底部・ナデ	10YR7/2に近い黄褐色 2.5YR7/1黒褐色	
	26 土器群IV (遺構C埋土) 高杯	古式土器群 高杯	口縁部~体部上半 部	口径(10.0)	外:ナハ 内:底部のため底堅膜不明(ナハ)	10YR8/3に近い黄褐色 2.5YR7/1黒褐色	
	27 土器群IV (遺構C埋土) 小字型	V様式系 小字型	口縁部~体部上半 部	口径(11.0)	内:ナハ 外:底堅膜不明(ナハ)	10YR8/2に近い黄褐色 2.5YR7/1黒褐色	
				底径(2.8)	内:ナハ 外:ナハ	10YR8/3に近い黄褐色	
					内:ナハ 外:ナハ	10YR8/3に近い黄褐色	

(i) 北調査区では第6層からは中世以前の遺物が出土している、(ii)調査担当者による現地調査での所見、(iii)東調査地南側の第44次調査地の地層との対比などから、第6層は近世の耕作土層、第5層は中世の耕作土層で、南調査区の近世の遺物は第5層に含まれ、中世～飛鳥時代の遺物は第6層に含まれていたものと判断できる。古墳時代の遺物については、本来は第7層以下の地層に含まれており、その一部が後世の耕作等に伴う攪拌により第6層より上位に巻き上げられたと考えられる。北調査区第6層出土遺物の中から3点(28～30)、南調査区第5層～第7層出土遺物の中から7点(31～37)を図化した。

北調査区第7層出土遺物(図版九)

調査当初、北調査区では第6層までを除去した面(主に第7層上面)で遺構検出を行ったが、遺構が検出されなかったため、北調査区中央部以西(1A～D、2A～D地区)に残る第7層を除去した。第7層が残る部分を約10cm掘り下げた時に、古墳時代中期までの遺物(土器[V様式系・土師器・須恵器])が出土した。第7層が薄い部分や残っていなかった部分では、取り上げ時に下位の第8層上部の遺物を混入しているが、第8層からは古墳時代初頭前半以前の遺物が出土しているため、古墳時代前期・中期の遺物は第7層に含まれていたものと推測できる。南調査区では、第5層～第7層と一緒に掘削したため、第7層出土と明確に判断できる遺物はない。北調査区第7層出土遺物の中から6点(38～43)を図化した。



第11図 遺構に伴わない出土遺物実測図

第8層(図版九)・第10層出土遺物

北調査区中央部以西(1A~D、2A~E地区)、南調査区西部(3~4A・B地区)の第8層から土器を主体とする遺物が出土している。これらは多くは主に土器群の周辺で出土しており、中には土器群の土器と接合するものもあることから、土器群に含まれていたものと考えられる。第8層出土遺物はV様式系壺を主体とし、庄内甕・壺・高杯を僅かに含む。先に記載した通り、第10層出土遺物は土器群Ⅲの土器のみで、V様式系壺を主体とし、壺・高杯を少量含む。庄内甕は全く含まないが、庄内式期に併行する東海系の壺・高杯が含まれる。第8層出土遺物の土器群出土遺物に含まれないものの中から5点(44~48)を図化した。

表4 遺構に伴わない出土遺物観察表(括弧内は復元値)

傳説番号	遺物番号	出土位置 出土層位	種類 形状	保存状況	計測値 (cm)	基準・文書等	色 虞	備考
第11層 同様九	28	第6層	土器器 類	口幅約7.4cm、底径約4.7cmのハラ (底径:10cm)、研削のハラ(底径:10cm) 内:山形型、外:ナフ、年代:チテ	口径(10.0)	外:35YR7/15/4に近い黄褐色 内:35YR6.5/4に近い黄褐色		
	29	第6層	中央十脚器 小鉢	口径(8.3) 内:山形型、外:ナフ、底面:チテ	1/4	外:35YR7/23/4に近い黄褐色 内:35YR7/23/4に近い黄褐色		
	30	第6層	中央土器群 中腰器	口幅約6.9cmの小鉢	口径(7.2)	底面ナフ	N6.5の灰白色 (口縁部分はN3の暗灰色)	12角形束縫~13角形 割削(直立縫跡2段目)
第11層 内縫一〇	31	第5~7層	V様式系 壺	体 部 下 手 の 窓	底径1.7	外:右上りのクタキ 内:ナフ	HYT7/31.2Hに青褐色	外壁に斑駁有り
	32	第5~7層	V様式系 壺	家部一長部の 1/3、直縫	底径1.4	外:右上りのクタキ 内:底縫のため不規則(ナフ)	外:35YR7/15/4に近い黄褐色 内:35YR7/8/6に近い黄褐色 外:35YR7/23/4に近い黄褐色	
	33	第5~7層	古式土器群 体 部 下 扉 の 窓	直縫	底径1.6	外:瓶方向へのハラ 内:ナフ	外:35YR15/2灰褐色 内:35YR7/1灰褐色	外壁に斑駁有り
	34	第5~7層	古式十脚器 下端 1/4、及 小鉢	口縫第一体部 下端 1/4、及 小鉢	底径2.7	外:瓶方向のハラ(5条/1cm)、体部上端に瓶方向の ハラ 片:口縫等:ナフ、底部:実底、外:ナフ	外:35YR8/3灰褐色 内:35YR7/3C.4に近い黄褐色	
	35	第5~7層	直縫 合口鉢	直縫~合口部 半手の1/9	口径(24.0)	底面ナフ(内面に一部ナフ)	外:35YR5灰褐色 内:35YR5灰褐色	古良時代前半 (字縫II)
第11層 直縫九	36	第5~7層	直縫 高台 破	直縫~高台 破	高台径4.1	直縫現出し	外:瓶縫部等 3.5YR7/1灰白色、直縫 2.5分~7.5YR7/3に近い黄褐色 内:35YR8/1灰白色	直縫内直縫口
	37	第5~7層	从 平瓦	焼瓦に残存せ る	—	焼瓦:ナフ 片:焼瓦ナフと接し、クリ袖し	10YR8.5/1灰白色	宝町時代後段
	38	第7層	古式十脚器 會	口縫等~翼部 1/3	口径(7.5)	外:内:瓶方向へのハラ等(一筋、直縫のため不明)	10YR8.5/3に近い黄褐色	東海系(ヒナ型) 直縫有り
	39	第7層	古式土器群 壺	直縫部の1/6	—	外:瓶方向のクタキ 底縫と体部とのくわにね 付突起等、内:直縫のため不明(例文式、直縫等に 直縫現出等)	外:35YR8/2灰白色 内:35YR3/1灰(一筋、10YR8/2灰白 色)	
	40	第7層	V様式系 壺	口縫等~体部 上端 1/4	口径(12.4)	外:口縫現出ナフ、体部等のナフタキ 内:直縫現出ナフ、底部:ナフ	10YR8/2灰褐色	
第11層 同様九	41	第7層	庄内人器 類	口縫等の1/6	口径(17.4)	底面ナフ	10YR8/3に近い黄褐色	
	42	第7層	十脚器 壺	口縫等部 上半 1/8	口径(12.8)	外:口縫部~直縫~ケイ骨(1cm)後、直縫~窓 ケイ骨(1cm) 内:直縫現出のため不明	外:35YR6/3灰褐色 内:35YR6/2灰褐色	
	43	第7層	V様式系 壺	直縫	底径4.4	外:左側:右上にナフ 内:ナフ、底面に直縫の直縫現出	外:35YR6/3灰褐色 内:35YR6/2灰褐色	
	44	第8層	V様式系 壺	口縫部の1/2	口径(18.8)	底面ナフ	外:35YR6/3灰褐色 内:35YR6/2灰褐色	
	45	第8層	庄内人器 類	口縫部の1/10	口径(14.0)	直縫のため機能不明	10YR8/2灰褐色	
第11層 同様九	46	第8層	V様式系 壺	成部	直径4.2	外:直縫、心上りのナフタキ 内:ナフ、底面に直縫の直縫現出	外:35YR6/2灰褐色 内:35YR7/1灰褐色	
	47	第8層	庄内人器 類	成部	底径1.8	外:直縫のナフタキ 内:ナフ	2.5YR8/1灰白色	
	48	第8層	古式十脚器 高杯	底部	—	外:瓶方向へのハラ等 内:直縫のナフ	外:35YR8/3に近い黄褐色 内:35YR8/2灰褐色	内共光透

第3章 まとめ

調査の結果、古墳時代初頭前半(庄内式古柏)を中心とする遺構・遺物が検出された。

古墳時代初頭前半より以前の遺構としては、南調査区の第2面で検出された河川(河川201)と落込み(落込み202)がある。この河川は古墳時代初頭前半までにはすでに埋没していたことが近隣の調査結果からわかっている。この河川は、南東から北西への流路を持つものと考えられていたが、今回の調査結果から、南東からの流路が当調査地内で蛇行し、北方向に流路を変える可能性が高いことがわかった。落込み202については、先に記載した通り、人為的な遺構ではない可能性が高く、ヒトの積極的な活動の痕跡は認め難い。

当調査地で、ヒトの積極的な活動の痕跡が見られるのは、河川埋没後の古墳時代初頭前半になってからである。調査地では、古墳時代初頭前半においては西側に地形が下がっており、その下がる地形である落込み(落込み101・落込み201)と落込み埋土下面の溝状の窪み(溝201)、土器群(土器群I～土器群IV)が検出された。

当調査地の南側(第17次・第21次調査地)では古墳時代初頭の墓域に伴う遺構(方形周溝墓・上器棺墓)、さらにその南側(第5次・第8次・第9次・第14次・第40次調査地)では古墳時代初頭の居住域に伴う遺構(堅穴住居・掘立柱建物・井戸・小穴等)が検出されている。一方、調査地の北西側では古墳時代初頭の遺構・遺物が確認されていないことから、落込み部分が古墳時代初頭の墓域の北西部縁辺に位置していると考えられる。検出された上器群(土器群I～土器群IV)の土器は、集落の縁辺部に廃棄された上器であると見られる。

土器群IIIから出土した土器のうち、壺・高杯に東海系のものが目立つが、東海系の土器は、古墳時代初頭の居住域である当調査地の南側(南東約150mの第9次調査地、南西約140mの第12次調査地、南方約120mの第40次調査地)でも出土している。このことは、古墳時代初頭における東郷遺跡の集落の成り立ちを考える際の一つの材料となる。

古墳時代初頭前半の遺構としては、落込みの他に溝(溝101～溝104)が検出された。これらの溝は、少なくとも3時期にわたる切り合いか見られ、縁辺部における継続する土地利用に伴うものであると推定される。溝101については、その埋土の上部は人為的に埋め戻されたものであるが、下部は滌水・流水により堆積したものであることから、すぐに埋め戻されずに、一定期間機能していたことがわかる。当調査地南東側の第21次調査地で検出された水路と、(i)規模と方向、(ii)一時水が流れしたこと、(iii)埋土の最上層で古墳時代初頭前半の遺物が出土していることにおいて同じであることから、同一の溝であったと考えられる。この溝は、当遺跡の北部で70m以上にわたって南東～北西方向に直線的に伸びることから、古墳時代初頭前半以降における当遺跡の遺構群の形成において、何らかの役割を持っていたと推定される。溝102～溝104については、耕作溝であると推測できるが、断定はできない。溝102～溝104が、耕作に伴う溝であるとすれば、当調査地は古墳時代初頭前半の中で、墓域の縁辺部から耕作地へと土地利用の変遷があったことを想定できる。

註記

- 註1 東郷遺跡における遺構群の時期的推移については、原山昌則 1999 「II 東郷遺跡第37次調査(T G91-37) 第2章 地理・歴史的環境」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』に記載されている。記載されてから現在までに、当遺跡内における発掘調査による資料の増加・新たな知見はあるが、記載内容に大きな変更をもたらすものではない。
- 註2 庄内式上器とV様式系の土器が併存することは、一般的に認められていることであるが、弥生時代後期後半のV様式甕と庄内式期のV様式系甕を形態のみで区分することは困難である。そのため、同じ地層・遺構埋土上で庄内式上器または庄内式土器に併行する他地域系の土器を作り出す場合はV様式系(甕)・古式土師器(甕以外の器種)、併わない場合は第V様式と便宜上呼称する。
- 註3 遺構検出面の呼称については、1995『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会(pp.41-42)による。
- 註4 坪田真一 1998 「II 東郷遺跡第44次調査(T G93-44)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註5 高萩千秋・高木真光 1983 「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告 第8節 第9次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会
高萩千秋 1989 「I 東郷遺跡発掘調査報告 第3章 調査の結果 第2節 第12次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告17
高萩千秋 1994 「III 東郷遺跡第40次調査(T G93-40)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註6 米田敏幸・杉本尚子 1986 『八尾市文化財発掘調査概要13 東郷遺跡第21次埋蔵文化財発掘調査概要』八尾市教育委員会文化財室

参考文献

- 出土遺物の形式・編年・時期概念等で参考とした文献について
- ・1990 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 真間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- ・2001 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集 川原遺跡』(財)愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- ・1995 中世土器研究会編『概説 中世の上器・陶磁器』(有)真陽社

図 版



北調査区
北壁西部地層断面図
(第3層～第8層、南から)



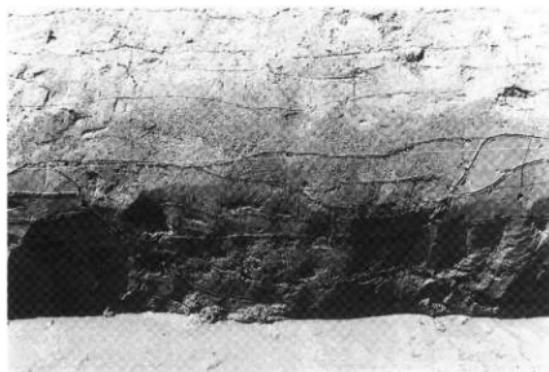
北調査区
第1面全景(左が東)



南調査区
第1面全景(左が東)



南調査区
溝101完掘状況(南から)



北調査区
溝101埋土断面
(南壁部分、北から)



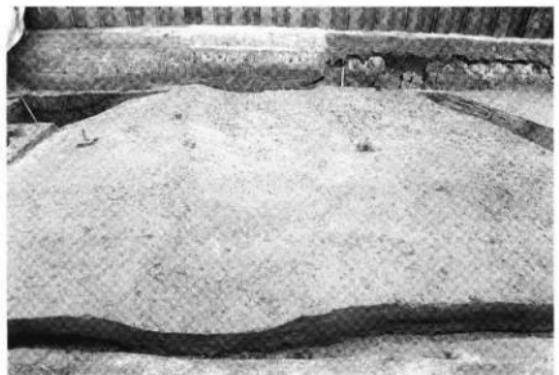
北調査区
溝101遺物出土状況(南東から)



南調査区
落込み101完掘状況(南から)



北調査区
第2面全景(左が東)



北調査区
溝201完掘状況(南から)



北調査区
落込み202完掘状況(西から)



北調査区
落込み202埋土断面(南から)



北調査区
土器群Ⅰ検出状況(北から)



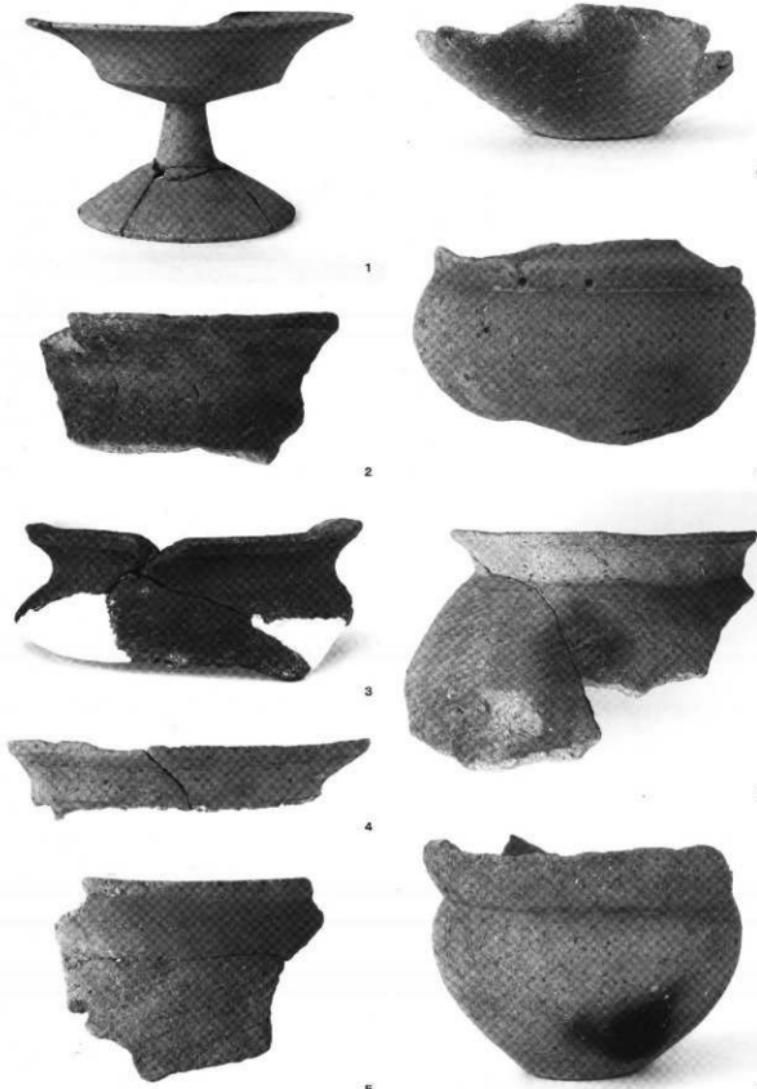
北調査区
土器群II北部検出状況(東から)



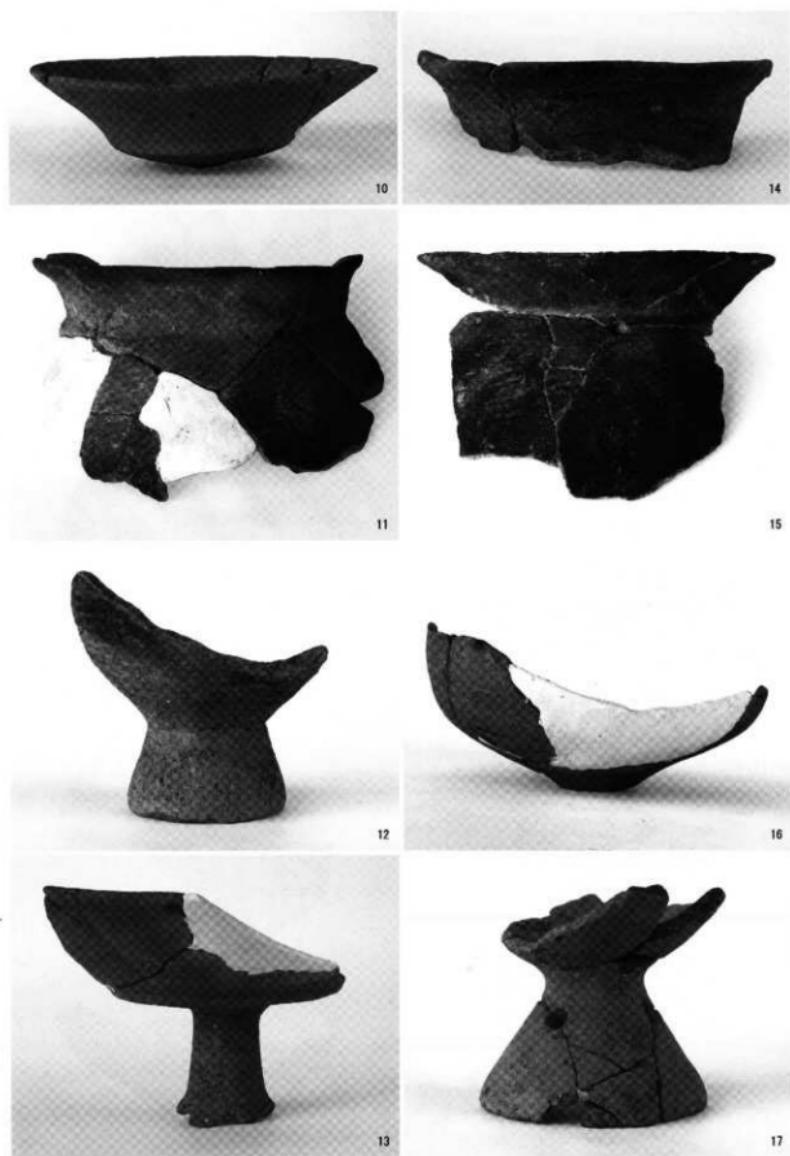
北調査区
土器群III下部検出状況(北から)



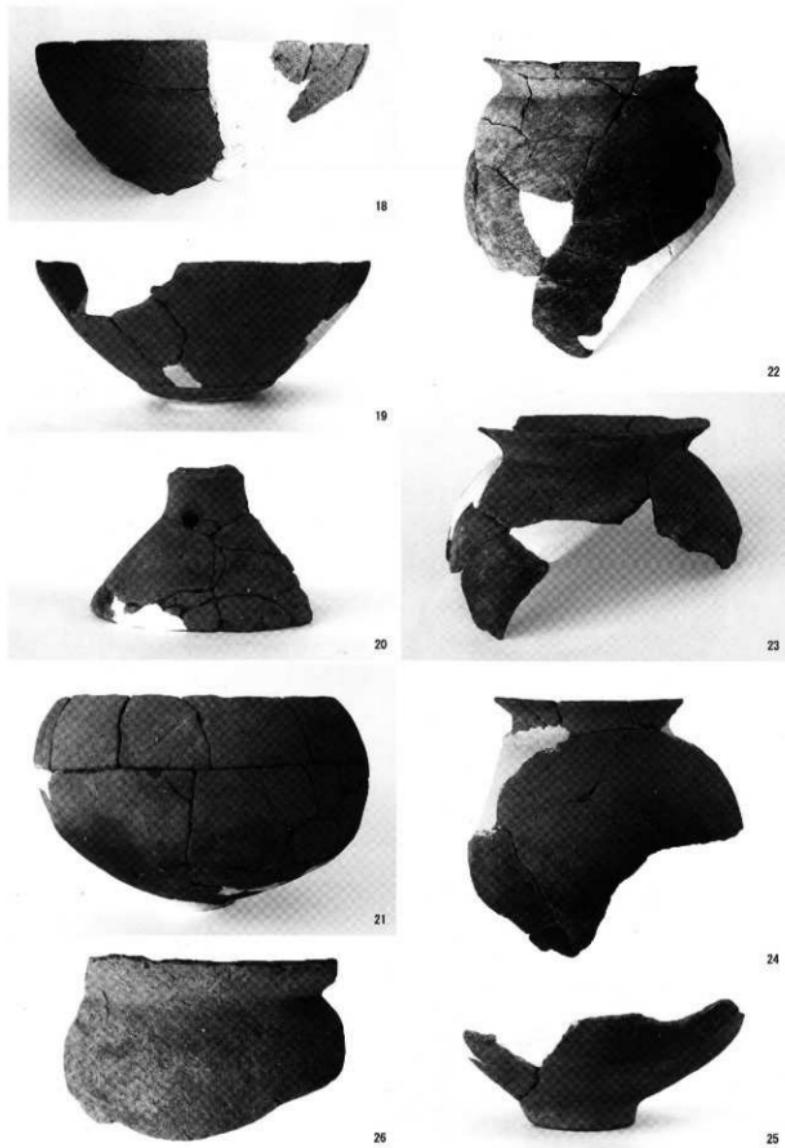
北調査区
土器群IV南部検出状況(西から)



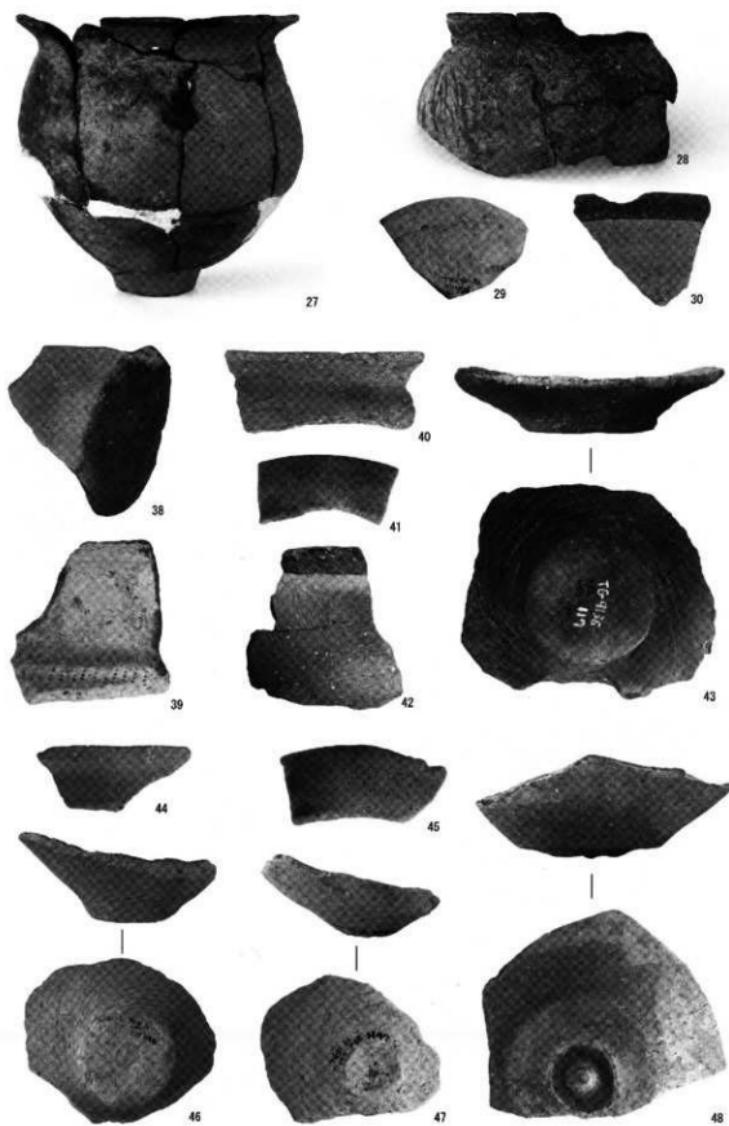
第1面検出遺構(溝101: 1、溝102: 2、溝103: 3、落込み101: 4~7)・溝201(8・9)出土遺物



土器群 I (10)・土器群 II (11~13)・土器群 III (14~17) 出土遺物



土器群III(18~20)・土器群IV(21~26)出土遺物



土器群M(27)・造構に伴わない(28~30: 第6層、38~43: 第7層、44~48: 第8層)出土遺物



31



32



33



34



35



36



37

遺構に伴わない(第5層～第7層)出土遺物

III 東郷遺跡第67次調査(T G 2006-67)

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市東本町三丁目58-5で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第67次調査(TG2006-67)の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成18年4月10日～平成18年4月14日(実働5日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約48m²を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は巖塙直世・藤井孝則である。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。
【遺物実測】岩沢玲子・中村百合
【トレース】西村
【執筆・編集】西村

本　文　目　次

第1章 はじめ	39
第2章 調査概要	40
第1節 調査の方法と経過	40
第2節 層序	40
第3節 検出遺構と出土遺物	42
1)検出遺構	42
第3章 まとめ	43

挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図	39
第2図 第1区平・断面図	40
第3図 第2・3区平・断面図	41
第4図 出土遺物実測図	42

図　版　目　次

図版一 調査地周辺 第1区掘削状況 第1区第1面 第1区第2面 第1区SK101 第1区北壁 第2区掘削状況 第2区第1面

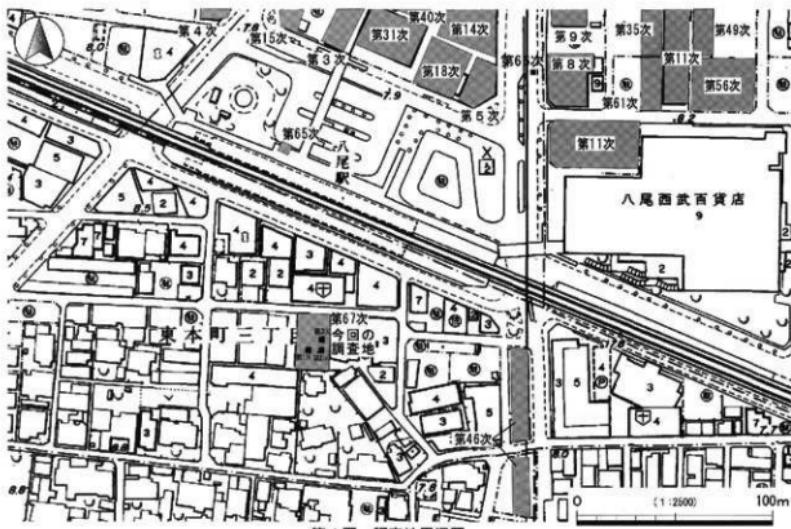
図版二 第2区S D201遺物出土状況 第2区第2面 第2区北壁 第3区掘削状況 第3区第
1面 第3区第2面 第3区北壁 第2区S D201出土遺物

第1章 はじめに

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では本町1・7丁目、東本町1~5丁目、北本町2丁目、莊内町1~2丁目、桜ヶ丘1~4丁目、光町1~2丁目、旭ヶ丘1丁目の一部がその範囲と推定されている。地理的には、河内平野のほぼ中央部を流れる長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上には北に萱振遺跡、西に八尾寺内町、南東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡が存在している。

当遺跡は、昭和46年に八尾市東本町2丁目の水道工事中に墨書き面土器が出土したことが発端になり、遺跡として認識されることとなった。その後、大阪府教育委員会および八尾市教育委員会(以下市教委)、八尾市文化財調査研究会(以下研究会)によって多くの発掘調査が実施され、弥生時代~近世に至る複合遺跡であることが判明している。

今回の調査地が存在する東本町三丁目は、当遺跡のほぼ中央部に位置し、これまでに数十回の調査が行なわれている。近隣の調査成果をあげると、東側約100m地点では研究会が平成6年度に第46次調査を実施しており、古墳時代前期および中世の遺構を検出している(西村1995)。また、北側約150m地点では市教委が昭和56年度に第8次調査を実施しており、古墳時代初頭~前期の堅穴住居や掘立柱建物・土坑等が検出されている(高萩1983)。さらに、第8次調査の西側の第5次調査では、古墳時代前期の井戸・土坑等が検出されており(高萩1983)、同時代の居住域の存在が明らかになっている。



第1図 調査地周辺図

第2章 調査概要

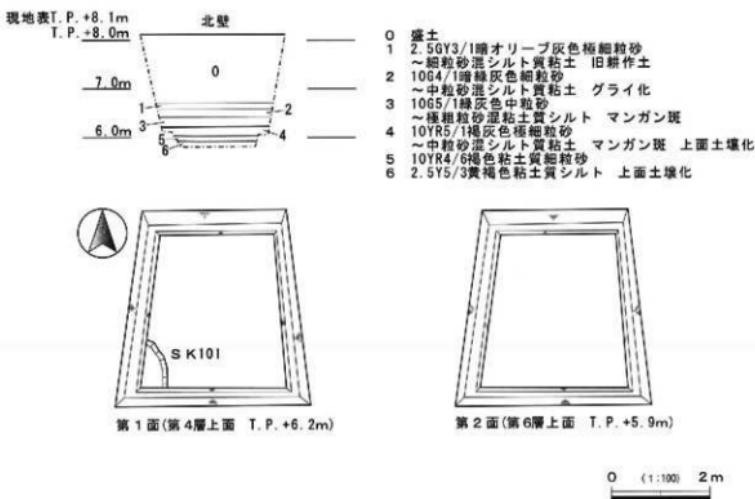
第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、研究会が東郷遺跡内で行った第67次調査にあたる。共同住宅の基礎部分に4×4mの調査区を3箇所設定した。調査順に第1～3区と呼称する。(調査区の位置は第1図に記載した。)

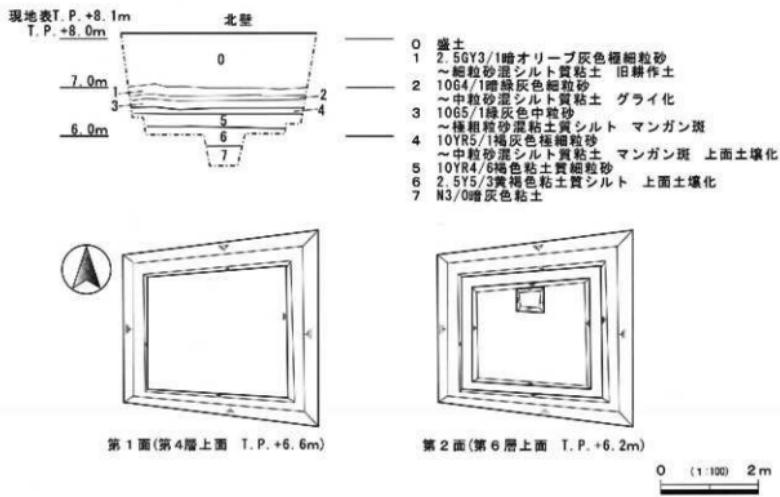
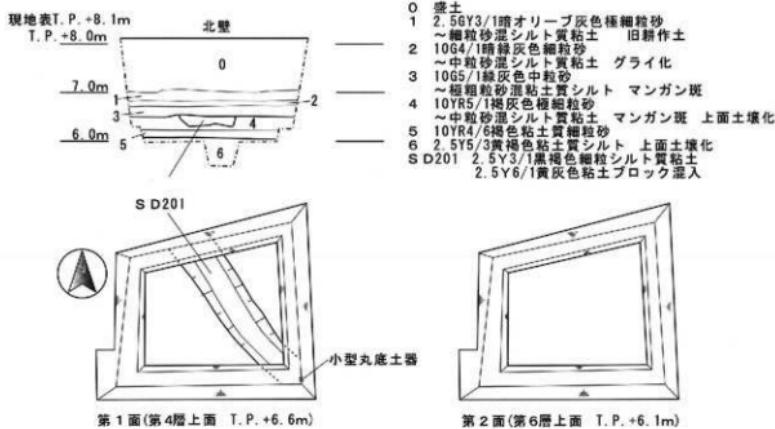
調査は市教委の指示に従い、現地表(T.P.+8.1m)下約1.5mを機械で掘削し、以下約0.7mは人力で掘削し遺構および遺物の検出に努めた。

第2節 層序

0層は盛土で以前の建物基礎などのコンクリートや産業廃棄物を含む。1層は2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土の旧耕作土である。2層は10G4/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土で、グライ化している。3層は10G5/1緑灰色中粒砂～極細粒砂混粘土質シルトで、マンガン斑が多く見られる。瓦器の破片が少量出土しており、中世に相当する地層と思われる。4層は10YR5/1褐色極細粒砂～中粒砂混シルト質粘土で、マンガン斑が多く見られ、上面は土壤化している。5層は10YR4/6褐色粘土質細粒砂。古式土師器の破片が少量出土しており、古墳時代前期に相当する地層と思われる。6層は2.5Y5/3黄褐色粘土質シルトで、上面は土壤化している。7層はN3/0暗灰色粘土である。



第2図 第1区平・断面図



第3図 第2・3区平・断面

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構

第1区

4層上面(T.P.+6.2m 第1面)で土坑1基(SK101)を検出した。また、6層上面(T.P.+5.9m 第2面)で調査を行ったが遺構の検出および遺物の出土はなかった。

土坑(SK101)

S K101

調査区の南西隅で検出した。遺構の南西側は調査区外に至るため規模は不明である。検出した東西幅は0.7m、南北幅は1.0m、深さは0.1mを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土で10YR3/4暗褐色粘土上のブロックが混入する。遺物の出土はなかった。

第2区

4層上面(T.P.+6.6m 第1面)で溝1条(S D201)を検出した。また、6層上面(T.P.+6.1m 第2面)で調査を行ったが遺構の検出および遺物の出土はなかった。

溝(S D)

S D201

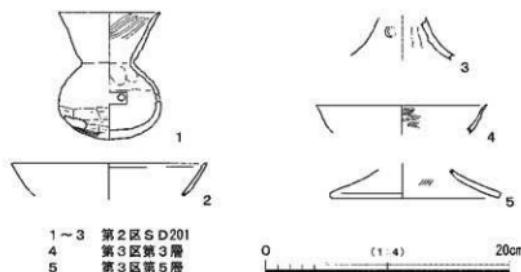
調査区のほぼ中央を南東から北西に伸びる。幅は約0.8m、深さは0.3mを測る。埋土は2.5Y3/1黒褐色細粒シルト質粘土上で、2.5Y6/1黄灰色粘土のブロックが混入する。溝内からは古式土師器が少量出土している。このうち固化したものは1~3である。1は古式土師器の小型丸底土器で、溝の底から出土し、口縁を北側に向かって倒れた状態であった。直線的に外上方に伸びる口縁部。体部内面ナデ。上位に指頭圧痕と粘土接合痕あり。外面下位ケズリのち横方向のミガキを施す。口縁部内外面ナデ。内面の一部に右上がりのミガキを施す。体部最大径付近には、径約5mmの穿孔が1ヶ所ある。穿孔は外面から叩いてあけられている。また、体部下位には長径23mm、短径15mm、深さ約1mmの打ち欠いた部分が1ヶ所ある。

2は古式土師器の甕である。内湾する口縁部。端部は内側に肥厚し面をもつ。内外面ヨコナデを施す。3は古式土師器の高杯である。「ハ」字に聞く脚部。スカシ孔は3方向。内外面ナデを施す。内面しばり目あり。

遺構の時期は古墳時代前期に比定できる。

第3区

4層上面(T.P.+6.6m 第1面)と6層上面(T.P.+6.2m 第2面)で調査を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。第1面を覆う第3層からは中世の瓦器椀(4)の破片が極小量出土し、また、第2面を覆う第5層からは古墳時代前期の高杯(5)の破片が極小量出土した。4は



第4図 出土遺物実測図

内湾する口縁部。端部は外反して丸く終わる。内面横方向のミガキ、外面ナデを施す。5は「ハ」の字に開く鋸部。端部は面をもつ。内面ハケ、外面ナデを施す。

第3章 まとめ

今回の調査地では、中世の遺物を含む地層と古墳時代前期の遺物を含む地層および古墳時代前期の造構を検出した。

第2区で検出したSD201は、遺物の出土状況から墓に伴う周溝になる可能性があると考えられる。また、中世の造構は検出できなかったが、第3区で遺物を含む地層を確認したことから、近隣に造構が存在している可能性が高いと推測できる。

参考文献

- ・高萩千秋 1983 「第5節 東郷遺跡第5次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1983 「第7節 東郷遺跡第8次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・西村公助 1995 「IV 東郷遺跡(第46次調査)」「東郷遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48」財団法人八尾市文化財調査研究会

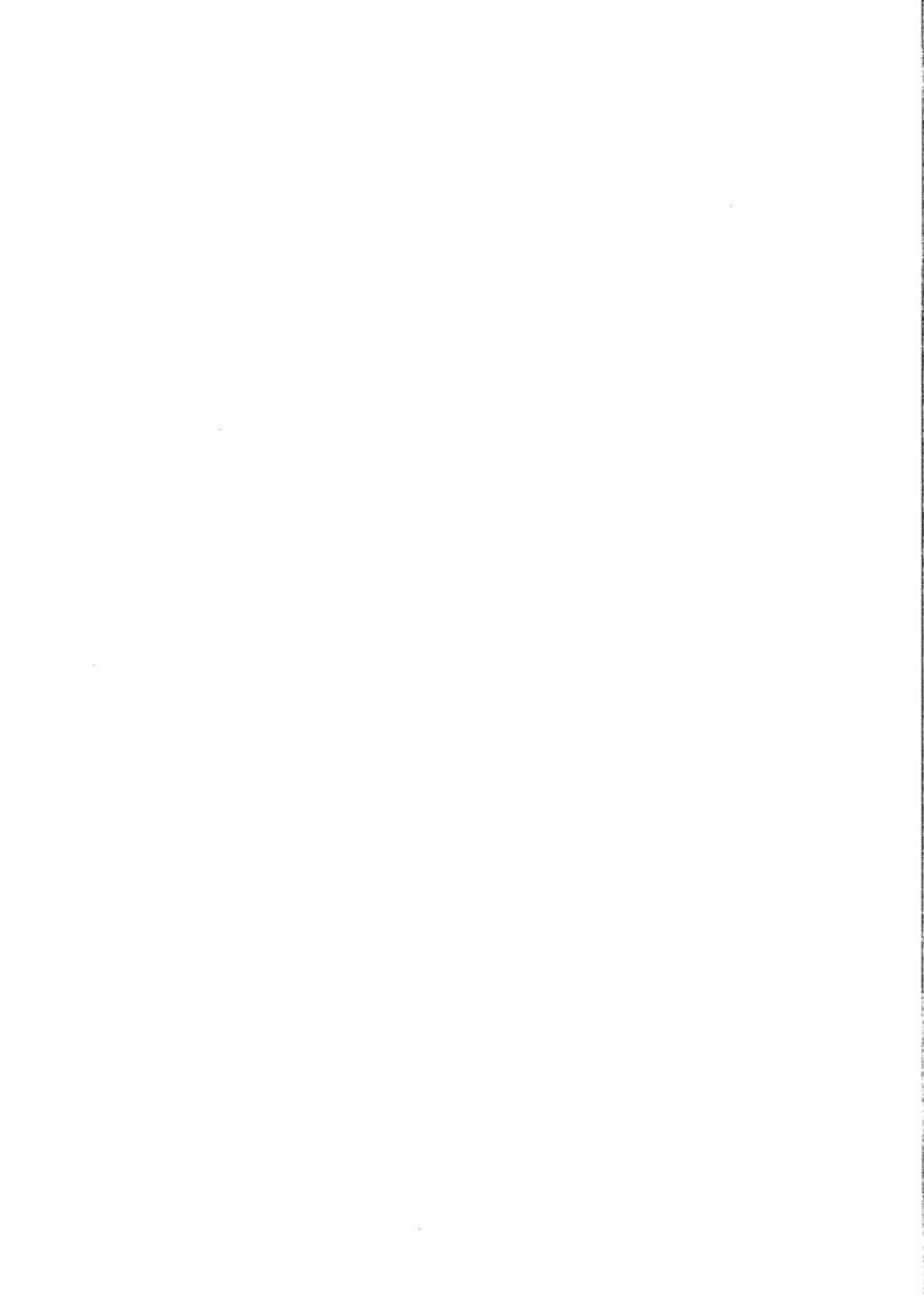


図 版



調査地周辺（北東から）



第1区 挖削状況（南西から）



第1区 第1面 T.P. +6.2m (南から)



第1区 第2面 T.P. +5.9m (南から)



第1区 SK101 (東から)



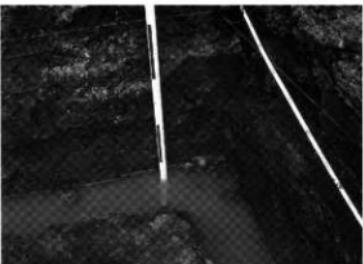
第1区 北壁 (南から)



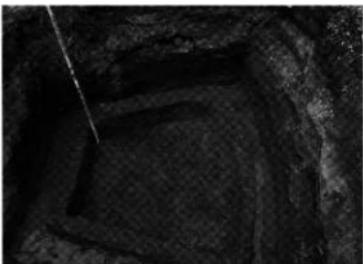
第2区 挖削状況（北西から）



第2区 第1面 T.P. +6.6m (南から)



第2区 SD 201遺物出土状況（西から）



第2区 第2面 T.P. +6.1m（南から）



第2区 北壁（南から）



第3区 摺削状況（北から）



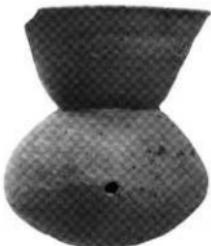
第3区 第1面 T.P. +6.6m（南から）



第3区 第2面 T.P. +6.2m（南から）



第3区 北壁（南から）



第2区 SD 201 出土遺物

IV 八尾寺内町遺跡第4次調査(YC2005-4)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市本町2丁目地内で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する八尾寺内町遺跡第4次調査(YC2005-4)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成18年1月30日から2月3日(実働3日)にかけて、荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は49.5m²である。
1. 現地調査においては、垣内洋平・鈴木裕治・曹龍・田島宣子・村田知子・吉川一栄・若林久美子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成19年2月28日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測 鈴木、図面レイアウト・遺構図面トレース－荒川、遺物図面トレース 山内千恵子、遺物写真撮影－山名康子が行い、他に青山洋、上記現地調査参加者の協力を得た。
1. 本書の執筆・構成は、荒川が行った。

本文目次

第1章 はじめに	45
第2章 調査概要	47
第1節 調査の方法と経過	47
第2節 疲序	47
第3節 検出遺構と出土遺物	51
1)検出遺構とその出土遺物	51
2)遺構に伴わない出土遺物	51
第3章 まとめ	52

挿 図 目 次

第1図 調査地および周辺調査地位置図	46
第2図 調査区設定および地区割図	47
第3図 壁断面および検出遺構平面図	49・50
第4図 遺構に伴わない出土遺物実測図	51

表 目 次

表1 調査地周辺における既往調査一覧表	46
---------------------------	----

写 真 目 次

写真1 八尾・久宝寺寺内町周辺航空写真	45
---------------------------	----

図 版 目 次

図版一 調査地全景	
北壁地層断面	
竹樋I～竹樋III断面	
17層内瓦泉出土状況	
遺構検出面全景	
溝01完掘状況	
図版二 遺構に伴わない出土遺物	

第1章 はじめに

八尾寺内町遺跡は、八尾市北西部の東西0.47km・南北0.5kmの範囲に位置する弥生時代中期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市本町2～5丁目がその範囲に当たる。北側に宮町遺跡、東側に東郷遺跡、南側に成法寺遺跡が隣接し、西側に旧大和川の主流であった長瀬川を挟み、久宝寺遺跡が所在する。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P. +8.3～10.5mを測る。

当遺跡を含む中河内地域は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に面されている河内平野の南部に当たる。河内平野の南部は、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北ないし西方向に流下している。当遺跡は、旧大和川水系のうち旧大和川の主流であった長瀬川右岸の沖積地上に位置する。

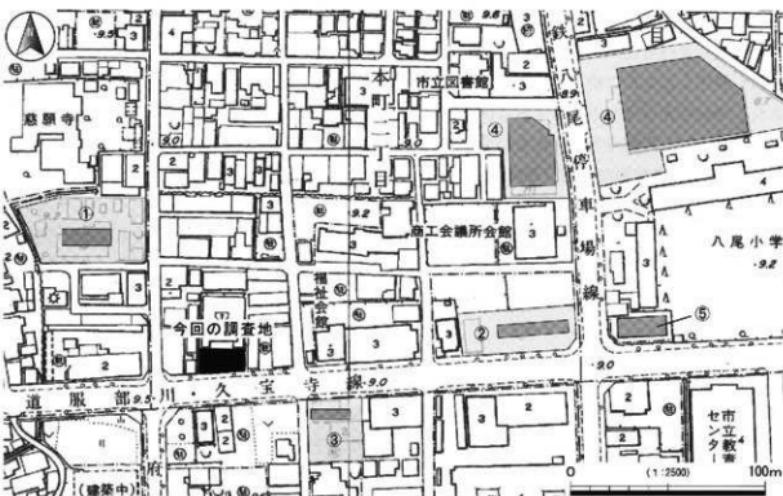
当遺跡名の由来となる八尾寺内町は、慶長11(1606)年に、森本七郎兵衛ら17人を主導者とする一部の久宝寺内町住人と慈願寺が久宝寺寺内町を出て、長瀬川(旧大和川本流)沿いの荒野の地を開拓し移住したことに始まるものである。翌年に、東本願寺の掛所として大信寺御坊が建立され、やがて大信寺を中核とする寺内町が形成された。久宝寺内町住人と慈願寺が移住するようになったのは、久宝寺寺内町において顕證寺の下代として、かつ久宝寺村の庄屋を務めていた安井氏の独裁的・専制的な特権行為に対抗したためであるが、その背景には本願寺の東西分派があつたとされる。

八尾寺内町は、江戸時代初期に成立・形成されて以降、その街路を大きく変えることなく現代に至っている。しかし、昔ながらの雰囲気を留める近世・近代の木造建物は、近年、老朽化等による取壊しや建替えにより減少し、寺内町の周りを囲む水路も埋立て等により、その名残を留める部分が少なくなっている。



写真1 八尾・久宝寺寺内町周辺航空写真（1948年米軍撮影、一部加筆、上が北）

今回の調査地は、行政的には「八尾寺内町遺跡」の範囲内であるが、近世の「八尾寺内町」の範囲外に位置する。当遺跡内では、八尾市教育委員会(以下、市教委とする)による小規模な遺構確認調査を除き、(財)八尾市文化財調査研究会(以下、調査研究会とする)による第3次までの発掘調査が実施されている。八尾寺内町の範囲内では、当調査地から400m余り北側で第3次調査(YC97-3)が実施され、平安時代後期から室町時代にかけての井戸・土坑・小穴・溝、室町時代の溝状遺構が検出され、近世・近代の水路が確認されている。また、八尾寺内町の範囲外では、今回の調査地に近い八尾寺内町南側で第1次(YC95-1)・第2次(YC97-2)調査が実施されており、寺内町形成以前の遺構・遺物が検出されている。当調査地周辺において実施されている発掘調査地の位置と調査結果の概略については、第1図・表1の通りである。



第1図 調査地および周辺調査位置図

表1 調査地周辺における既往調査一覧表

番号	遺跡名・略号	所在地	調査主体	調査期間	検出遺構・出土遺物	文献
①	八尾寺内町遺跡 第1次(YC95-1)	本町3丁目	調査研究会	1995.6.7 ～6.22	[遺構]弥生時代後期末～聖文化層・土坑・小穴・溝 [遺物]弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器	文献1
②	八尾寺内町遺跡 第2次(YC97-2)	本町2丁目	調査研究会	1997.5.26～ 6.3	[遺構]古墳時代前期～溝 [遺物]古式土師器・須恵器・国産陶磁器	文献2
③	成法寺遺跡 第9次(SH91-9)	光南町1丁目	調査研究会	1991.10.29 ～11.1	[遺構]弥生時代後期～土坑・小穴・古墳時代後期～溝 [遺物]弥生土器・土師器・須恵器	文献3
④	東郷遺跡第37次 (TG91-37)	本町1丁目	調査研究会	1991.6.3 ～9.30	[遺構]古墳時代前期・牛堀～溝・古墳時代後期・飛鳥時代～水田・河川・平安時代後期～井戸・室町時代～溝・近世～近代～井戸・土坑・竹籠・溝 [遺物]弥生土器・古式土師器・土師器・埴輪・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器・国産陶磁器・瓦瓦・鉄貨	文献4
⑤	東郷遺跡	本町1丁目	市教委	1981.3.3 ～3.27	古墳時代の遺構・遺物	文献5

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

本書で報告する八尾寺内町遺跡第4次調査(YC2005-4)は、共同住宅建設工事に伴い実施したもので、その基礎工事によって破壊される部分を対象に、東西11m・南北4.5mを測る矩形を呈する調査区を設定した。

調査区の地区割については、調査区の北西側に任意の基準点(X0・Y0)を設定し、東西軸を調査区の東西辺と平行に置いた。そして、調査区を包括できる東西15m・南北5mに5m四方の方眼を設定した。地区名については、東西は基準点から東へA～Cを付し、南北は1を付し、1A区～1C区と呼称した(第2図)。

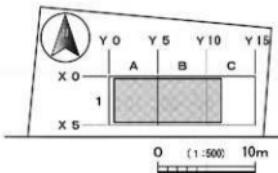
掘削の方法については、今回の調査では、試掘調査で弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した遺物包含層の上面までが機械掘削の対象で、遺物包含層が人力掘削の対象であった。市教委による埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(T.P.+9.0m)下2.3mまでを重機により除去し、側溝を掘り地層を確認したところ、包含層の上面まで達していなかった。そのため、包含層の上面までの現地表下2.4mまでを重機と人力を併用して除去した後、以下0.2m前後を人力により掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、弥生時代後期後半の溝1条を検出した。出土遺物は、整理用コンテナ(60×40×20cm)1箱を数える。

第2節 層序(第3図)

調査区の壁断面で確認した地層は、遺構埋土を除き、21層である。これらを堆積相などから大きく分類し、基本層序(第I層～第IV層)とした。ここでは、先ず基本層序を記載し、各基本層序を構成する単層をその下に記載する。なお、第IV層の下位には、調査区東部の遺構底面で確認した砂礫層があり、これについては最後に記載した。

- 第I層：近代以降の客土・整地層。昭和23(1948)年米軍撮影の航空写真から、調査地には建物があったことが確認でき、その建築に伴う土地造成によるものと推測される。
 - 0層 10YR3/3暗褐色砂質シルト。下位層のブロックが混じる。
- 第II層：团粒構造の見られる砂質シルト層。近世・近代の畑耕作土。
 - 1層 2.5GY2/1黒色細粒の中疊以細の疊混じる砂質シルト。
 - 2層 2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂質シルト(1層より泥質)。
 - 3層 5GY3/1暗オリーブ灰色中粒の中疊以細の疊(～径1cm)混じる砂質シルト。
 - 4層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色中粒の中疊以細の疊(～径1.5cm)混じる砂質シルト。
 - 5層 5GY4/1暗オリーブ灰色極粗粒の中疊以細の疊(～径3.5cm)混じる砂質泥(6層より砂がちで粗粒)。



第2図 調査区設定および地区割図

6層 7.5GY4/1暗緑灰色粗粒の中礫以細の礫(～径3 cm)混じる砂質泥(西壁では粗粒)。

●第Ⅲ層：砂・砂礫主体層。氾濫堆積物。

7層 7.5GY5/1緑灰色シルト質極細粒砂。酸化鉄(しみ状)。

8層 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粗粒砂以細の砂。酸化鉄(しみ状)。

9層 10Y5/2オリーブ灰色粗粒の中礫以細の礫(～径2 cm)混じる細粒の中礫以細の砂礫。東側の一部、10YR4/4褐色粗粒砂～中粒砂の間層を挟む。

10層 7.5GY5/1緑灰色(酸化鉄分沈着部分では、10YR4/6褐色)シルト質極細粒砂～シルト。8層から10層にかけて酸化鉄帯状に沈着。

●第Ⅳ層：砂・砂質土と粘質土の互層。静水域→流水域の堆積物。

11層 5GY5.5/1オリーブ灰色細粒砂以細の砂の薄層・葉層と7.5GY4/1緑灰色極細粒砂混じる粘土質シルトの葉層の互層。

12層 7.5GY4/1暗緑灰色極細粒砂混じる粘土質シルトの薄層・葉層と5G4/1緑灰色シルト質極細粒砂の薄層・葉層の互層。

13層 7.5GY4/1暗緑灰色(15層の上位では2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色)極細粒砂混じる粘土質シルト。5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂の葉層を数層挟む。

14層 7.5GY4/1暗緑灰色(15層の上位では7.5Y4/1灰色)極細粒砂混じるシルト質粘土。

●第Ⅴ層：ブロック状の泥層。人為的な盛土か。

15層 7.5Y4/1灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。炭酸鉄の粒・団塊を含む。

16層 7.5Y3/1オリーブ黒色中粒の中礫以細の砂礫(～径1.5cm)少量混じる粘土質シルト。炭酸鉄の粒を含む。弥生土器・須恵器が出土。

●第Ⅵ層：飛鳥時代前期以降の泥質砂礫～砂質泥層。河川の氾濫・破堤による堆積物。

17層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒の中礫以細の礫混じる砂質泥。東部は所により、2.5GY5/1オリーブ灰色粗粒砂～中粒砂を葉層・薄肩層に挟む。

下部の薄む部分は、18層と5GY3.5/1暗オリーブ灰色極細粒砂少量混じる粘土質シルトの偽礫(～長径5 cmで比較的扁平)が混じる。弥生土器・須恵器瓦泉が出土。

18層 10Y4/1灰色泥混じる中粒の中礫以細の泥質砂礫(～径1 cm)。下部は所により、7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂以細の砂が見られる。

●第Ⅶ層：古墳時代中期以降の泥層。人為的な攪拌層と見られる。

19層 5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。下部に下位層(20層)のブロック(～径4 cm)を少量含む。弥生土器・須恵器が出土。

●第Ⅷ層：弥生時代後期以前の泥層。上面は遺構検出面。

20層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。

21層 7.5GY4/1暗緑灰色極細粒砂混じるシルト質粘土。2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混じるシルト質粘土を径1 cm前後の粒状・ブロック状に含む。調査区東部では下位層に起因する細礫以細の砂礫が混じる。10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混じる粘土質シルトで充填された径1 cm前後の管状の巣穴が見られる。

●第Ⅸ層下位層：弥生時代後期以前の砂礫層。河川堆積物か。

細礫以細の砂礫からなり、湧水を伴う。後で記載する溝01の底面で確認したもので、調

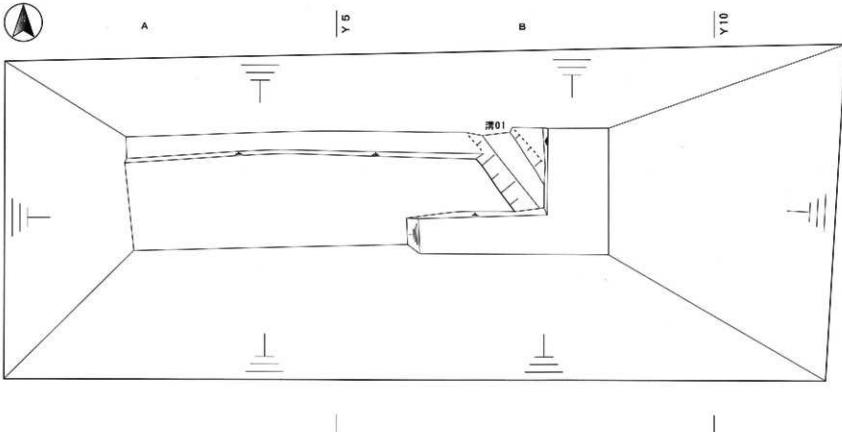
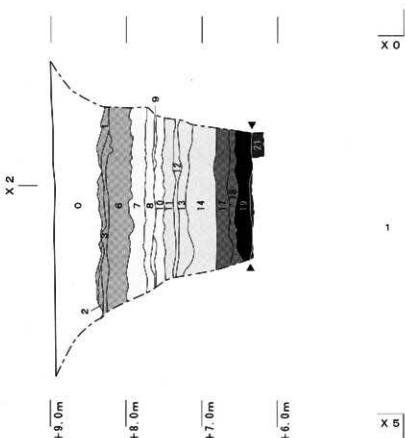
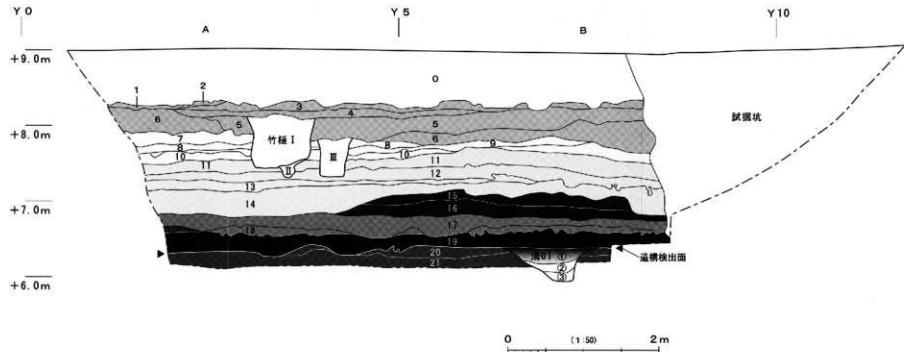
	第Ⅰ層 O層 10YR8/2暗緑色砂質シルト主体
	1層 2.50Y/2褐色暗緑じる砂質シルト
	2層 2.50Y/3/褐色オーリーブ灰色暗緑じる砂質シルト
	3層 50Y/3/褐色オーリーブ灰色暗緑じる砂質シルト
	4層 2.50Y/4/褐色オーリーブ灰色暗緑じる砂質シルト
	5層 50Y/4/褐色オーリーブ灰色暗緑じる砂質シルト
	6層 50Y/4/褐色オーリーブ灰色暗緑じる砂質シルト
	7層 7.50Y/5/褐色オーリーブ灰色暗緑じる砂質シルト
	第Ⅱ層 8層 2.50Y/5/オリーブ灰色シルト質細粒砂由細の砂
	9層 10Y/2/褐色砂
	10層 7.50Y/2/褐色シルト質細粒砂シルト
	11層 7.50Y/3/褐色シルト質細粒砂由細の砂と
	12層 7.50Y/4/褐色シルト質細粒砂由細の砂と
	13層 7.50Y/4/褐色シルト質細粒砂由細の砂と
	14層 7.50Y/4/褐色灰褐色細粒砂由細の砂と
	15層 7.5Y/4/褐色砂質シルト
	16層 7.5Y/4/オリーブ黒色砂少量混じる粘土質シルト
	17層 2.50Y/4/褐色オーリーブ灰色暗緑じる砂質シルト
	第Ⅲ層 18層 50Y/3/褐色オーリーブ灰色暗緑沙質シルト
	19層 50Y/4/褐色オーリーブ灰色暗緑沙質シルト
	20層 2.50Y/4/褐色オーリーブ灰色暗緑沙質シルト
	21層 7.50Y/4/褐色灰色様細粒砂混じるシルト質シルト

測定点

- ① 10Y/4/1褐色極細粒砂混じる粘土質シルト
- ② 7.5Y/4/1褐色粗粒砂混じる粘土質シルト
- ③ 50Y/4/1オーリーブ灰色暗緑由細の砂(21層のブロック裏)

柱状圖測定点

- 柱標Ⅰ 6層・7~11層 10Y/4/1褐色灰色細粒砂質泥のブロック
- 柱標Ⅱ 11層・12層のブロック
- 柱標Ⅲ 7層・9~11層のブロック



第3図 壁断面および検出温機平面図

査掘削深度より下位にあるため壁断面では確認していない。そのため堆積構造は不明である。調査区東部では本層に起因する砂礫が上位の21層に混じり、西部では全く混じらないことから、本層は調査区西部には分布しないと見られる。河川堆植物と推定される。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構とその出土遺物

第VII層(19層)を除去した第VIII層(20・21層)上面(T.P.+6.3~6.4m)で、弥生時代後期に比定できる溝1条(溝01)を検出し、壁断面上で、近世以降に比定できる竹樋3条を確認した。

溝01(第3図、図版1)

調査区東部の1B区で検出した。南東-北西方向に伸びる。調査地外に至るため全容は不明である。検出部分で、幅0.7m・深さ0.45mを測る。埋土は、第3図の通りで、3層に分けられる。大きくは、第VII層(19層)とよく似た上層(①)とブロック上を主体とする下層(②・③)に分けられる。出土遺物は、弥生時代後期に比定できる土器の破片であるが、図化できるものはなかった。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期に比定できる。

竹樋(第3図、図版1)

機械掘削時に調査区西部の1A区の北壁で竹樋を接続する木製の継手が出土し、北壁・南壁の断面上で竹樋を埋設した溝3条(竹樋I~竹樋III)を確認した。竹樋はいずれも南北に伸びる。竹樋IIは南壁では見られず、竹樋Iを埋設する際に破壊されたと見られる。竹樋埋設溝の埋上については、第3図の通りである。竹樋内埋上については、竹樋IIに葉理をなす564/1緑灰色細粒砂~極細粒砂が堆積する。竹樋I・IIIは空洞で、竹樋IIIの北壁部分からは調査時においても少量の水が流れている。竹樋I~竹樋IIIは、調査地の北側に位置する寺内町の水路、あるいは井戸から取水し、南側に水を引くための導水施設と推定される。

2) 遺構に伴わない出土遺物(第4図、図版2)

遺構に伴わない遺物は、16・17・19層から出土している。殆どが土器で、量的には整理用コントナ1箱に収まる。16層からは弥生土器・須恵器が出上しているが、細片のため時期を比定できない。17層からは弥生上器・須恵器、19層からは弥生上器・須恵器が出土している。そのうち17層出土の須恵器(4)、19層出土の弥生土器(1~3)を図化した。

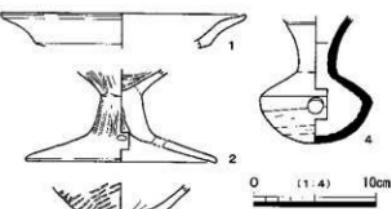
17層出土遺物

4は縁。口縁部を欠く。肩部と胴部の境は稜をなし、稜の直下に径1.2cmの円孔を穿つ。頸部の上位に1条の沈線が廻る。頸部内面の下半に左上がりの絞り目が残る。飛鳥時代中葉(7世紀中葉)に比定できる。

19層出土遺物

1是有縁高杯と見られる。口縁部の小片である。表面磨耗のため調整は不明である。

2は高杯。杯体部下半から柱状部にかけて



第4図 遺構に伴わない出土遺物

の2/3の破片と裾部の小片で、接合はしないが胎上・焼成等から同一個体と判断されるため、透孔の位置から図上復元した。外下方に大きく広がる裾部を持つ。透孔は残存する部分の位置から四方透孔と見られる。調整は、杯部から柱状部にかけての外面に縦方向のヘラミガキ、杯部の内底面には横方向のヘラミガキを施す。3は甕と見られる。底部の1/2が残存する。充填法により底部を作るが、いわゆるドーナツ底をなさず平底で、内面に粘土を充填した痕跡が残る。調整は、外面に右上がりのタタキを施し、内面に板ナデの痕跡が残る。1～3は、ともに胎上に生駒西麓産の角閃石を含むが、2については、1・3に比べ細粒である。1～3は、弥生時代後期後半に比定できる。

第3章 まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半の溝1条を検出した。壁法面に付けた勾配のために調査区の面積に比べて遺構検出面積が狭く、その全容を詳らかにできなかった。当該時期の遺構・遺物は、当調査地の90m北西側に位置する第1次調査地で竪穴住居が、40m南東側に位置する成法寺遺跡第9次調査地では、建物を構成したと見られる小穴群が検出されている。両調査地を結ぶ一帯が当該時期の居住域と認められるならば、その中に位置する今回の調査で検出した溝は、居住域の一部を構成するものであったと考えられる。

機械掘削の範囲であったため平面的には検出していないが、調査区の南北壁で近世以降の竹櫛3条を確認した。これらの竹櫛は、ほぼ同じ場所で3次に亘って埋設されており、八尾寺内町周辺における生産域としての継続的な土地利用の一端を窺い知ることのできるものである。

註記

- 註1 櫻井敏雄・大草一憲 1988 「寺内町の基本計画に関する研究—久宝寺寺内と八尾寺内を中心として—」八尾市教育委員会、pp.56-58
- 註2 高萩千秋 2000 「XII 八尾寺内町遺跡第3次調査(YC97-3)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告66』(財)八尾市文化財調査研究会

参考文献

- 周辺の既往調査について
- 文献1 岡山清一 1999 「III 八尾寺内町遺跡第1次調査(YC95-1)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告63』(財)八尾市文化財調査研究会
- 文献2 岡山清一 1999 「IV 八尾寺内町遺跡第2次調査(YC97-2)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告62』(財)八尾市文化財調査研究会
- 文献3 西村公助 1993 「XIV 成法寺遺跡第9次調査(SH91-9)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告39』(財)八尾市文化財調査研究会
- 文献4 原山昌則 1999 「II 東郷遺跡第37次調査(TG91-37)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会
- 文献5 八尾市教育委員会 1983 『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 1980・1981年度』

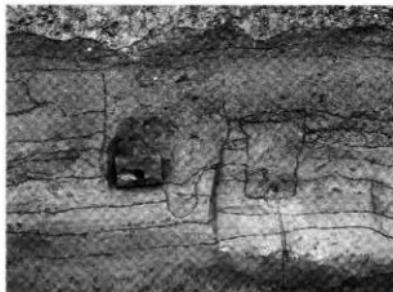
図 版



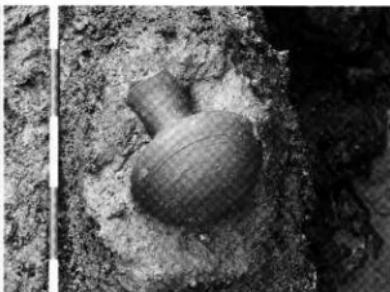
調査地全景（南西から）



北壁地層断面（南西から）



竹櫛Ⅰ～竹櫛Ⅲ断面（北壁部分、南から）



17層底出土状況（東から）



造構築出面全景（西から）



溝01完掘状況（南東から）



4



1



1



2



3

遺構に伴わない出土遺物（1～3：19層出土、4：17層出土）

V 弓削遺跡第6次調査(Y G E 2005-6)

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市志紀町南2丁目1で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する弓削遺跡第6次調査(YGE2005-6)の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年9月20日～同年10月7日(実働14日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約690m²を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は垣内洋平・鈴木祐治・細谷利美・實樹絹美子である。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。

【遺物実測】張 益芬

【トレース】西村

【執筆・編集】西村

本 文 目 次

第1章 はじめに	53
第2章 調査概要	53
第1節 調査の方法と経過	53
第2節 層序	55
第3節 検出遺構と出土遺物	57
1) 検出遺構	57
第3章 まとめ	62

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	53
第2図 調査区設定図	55
第3図 第1～3区地層断面図	56
第4図 第1区検出遺構平面図	57
第5図 第1区SK201平・断面図	58
第6図 第1区出土遺物実測図	58
第7図 第2区検出遺構平面図	60
第8図 第2区SK201平・断面図	61

第9図 第3区検出遺構平面図	61
第10図 第2・3区出土遺物実測図	62

表 目 次

表1 弓削遺跡調査一覧	54
-------------	----

図 版 目 次

図版一 調査地周辺 第1区機械掘削 第1区調査状況 第1区第1面全景 第1区SK101
第1区SK102 第1区第2面全景 第1区SK201

図版二 第1区下層確認トレンチI 第1区下層確認トレンチII 第2区機械掘削 第2区調査
状況 第2区第1面全景 第2区SK101 第2区SK102 第2区SK103

図版三 第2区SK104 第2区第2面全景 第2区SK201 第2区SK202 第2区下層確認
トレンチI 第2区下層確認トレンチII 第3区機械掘削 第3区調査状況

図版四 第3区第1面全景 第3区第2面全景 第3区SK201 第3区南壁 出土遺物

第1章 はじめに

弓削遺跡は八尾市の南部に位置する遺跡で、現在の行政区画では、志紀町南2～4丁目・弓削町3丁目・弓削町南3丁目に所在する。当遺跡は地形的には、旧大和川の本流とされている長瀬川が玉串川と分岐する地点の左岸一帯に広がる自然堤防上に立地する。

当遺跡周辺には、西に田井中遺跡、木の本遺跡、南に本郷遺跡(柏原市)、北に長瀬川を挟んで東弓削遺跡が位置している。

今回の調査地は当遺跡内の北に位置し、当調査地の付近では、大阪府教育委員会(以下府教委と記載)、八尾市教育委員会(以下市教委と記載)、財団法人八尾市文化財調査研究会(以下研究会と記載)により数次の調査が行われている。その結果、弥生時代から近世にかけての遺構および遺物が検出されている。なかでも、今回の調査地から北側約5m地点では平成6年度に府教委が寝屋川南部下水道事業に伴う調査を行っており、No. 2調査区からは瓦質の羽釜が出土している(岩瀬透・阿部幸一1995)。また、今回の調査地から南約100mの地点では昭和59年度に研究会が共同住宅建設に伴う調査を行なっており、弥生時代～奈良時代の遺構を検出している(西村公助1987)。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が弓削遺跡内で行った第6次調査にあたる。



第1図 調査地周辺図

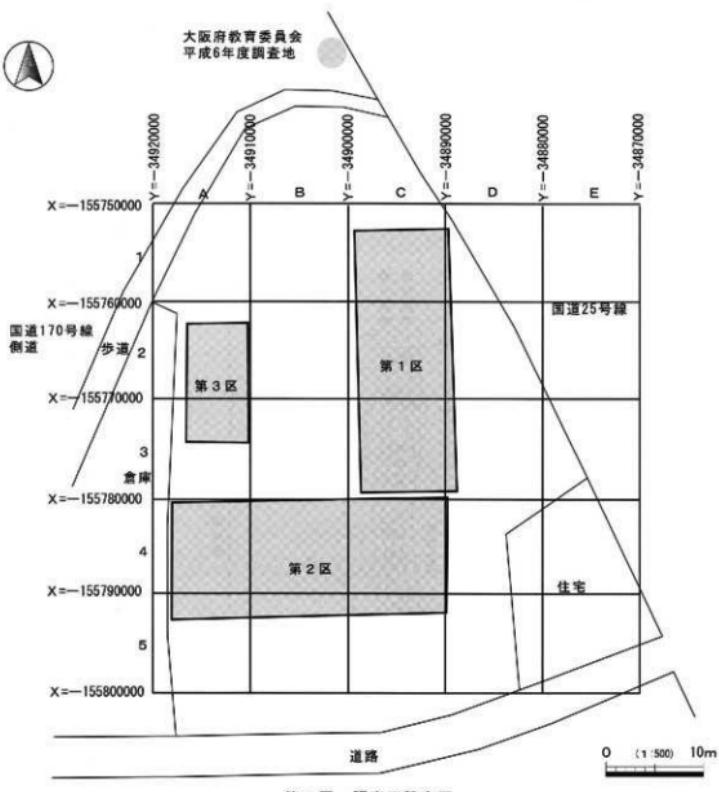
表1 弓削遺跡調査一覧

地図番号	路号	調査地	調査原因	面積(㎡)	調査期間	文献
①	YGE84-1	志紀町南2丁目 74~76	共同住宅建設工事に伴う 発掘調査	1260	S590402~ 0727	西村公助 1985 「弓削遺跡1次調査」『昭和59 年度事業報告』財團法人八尾市文化財調査研究会
②	YGE99-2	志紀町南2丁目 地内	公共下水道10~222丁K 整造工事に伴う発掘調査	20.5	H1111210~ 1220	森木めぐみ 2001 「XIII 弓削遺跡(第2次調 査)」『附:法人八尾市文化財調査研究会報告67』 財團法人八尾市文化財調査研究会
③	YGR2000-3	志紀町南3丁目 173番地	共同住宅建設工事に伴う 発掘調査	50	H121120~ 1206	西村千秋 2004 「II弓削遺跡第3次調査 (YGR2002-3)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター 報告書3』八尾市教育委員会 財團法人八尾市文 化財調査研究会センター報告書3
④	YCR2002-4	志紀町南3丁目 地内	公共下水道13-35工区 整造工事に伴う発掘調査	38	H140722~ 1126	西村公助、種田 勝 2003 「XIV 弓削遺跡(調 査4次調査)」『財團法人八尾市文化財調査研究会 報告75』財團法人八尾市文化財調査研究会
⑤	2003-185	志紀町南2丁目1	共同住宅建設に伴う発掘 確認調査	36	H170822	原山昌則 20061弓削遺跡2003-185の調査』『八尾 市内平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財 調査報告63 平成17年度埋蔵防衛事業 八尾市教 育委員会
	YGE2006-6		共同住宅建設工事に伴う 発掘調査	690	H170920~ 1007	本報告書
⑥	97-444	弓削町2・3丁目 地内	公共下水道工事に伴う発掘 確認調査	56	B100227~ 0306	西 村 1999.3 「5.弓削遺跡(97-444)」『八 尾市内遺跡平成16年度発掘調査報告書』八尾市 文化財調査報告41平成16年度公共事業类 八尾市教 育委員会
⑦	2002-66	志紀町南3丁目 120番、172番、 217番、218番	分譲住宅建設に伴う発掘 確認調査	8	H140530	西村公助 2003 「33 弓削遺跡(2002-66)の 調査」『八尾市立埋蔵文化財平成14年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告48 平成14年度埋蔵防衛事 業 八尾市教育委員会
⑧	2002-23	志紀町南3丁目 180番、181番	共同住宅建設に伴う発掘 確認調査	48	H140819	西村公助 2003 「34 弓削遺跡(2002-23)の 調査」『八尾市立埋蔵文化財平成14年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告48 平成14年度埋蔵防衛事 業 八尾市教育委員会
⑨	2003-195	志紀町南2丁目19	分譲住宅建設に伴う発掘 確認調査	5	H151024	西村公助 2004/3/8 「弓削遺跡2003-195の調査」『八 尾市内平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財 調査報告49 平成15年度埋蔵防衛事業 八尾市教 育委員会
⑩	2003-319	志紀町南2丁目 125番、126番	合戸建設に伴う発掘確認 調査	19	H160123	西村公助 2005/10 「弓削遺跡2003-319の調査」『八尾 市内平成16年度発掘調査報告書』八尾市文化財 調査報告50 平成16年度埋蔵防衛事業 八尾市教 育委員会
⑪	2004-259	志紀町南2丁目49	エレベーターホール建設 に伴う発掘確認調査	6.96	H161104	岡庄清一 2005/6/1 「弓削遺跡2004-259の調査」『八尾 市内平成16年度発掘調査報告書』八尾市文化財 調査報告51 平成16年度埋蔵防衛事業 八尾市教 育委員会
⑫	2005-160	弓削町3丁目80番 1、81番の1、3	共同住宅建設に伴う発掘 確認調査	13	H171018	西村公助 2006 「弓削遺跡2005-160」『八尾市立平 成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報 告63 平成17年度埋蔵防衛事業 八尾市教 育委員会
⑬		志紀町南2丁目	後尾川河底流域下水道 中央南幹線51丁区築造 工事に伴う発掘調査	20	H060401~ H070331	岩瀬透「阿計亭-1995.3 『寝屋川京都流域下水道 事業に伴う工事内・志紀町・弓削・太平寺発掘調査 調査報告』大阪府教育委員会

掘削は市教委の指示書に従い、現地表下約1.5m前後までを機械で実施した。その後、約0.35mの範囲を人力により調査を進め、遺構の検出に努めた。

今回の調査では八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の南西側道路上T.P.+12.7m)を使用した。

調査では、調査地の北西側に基準点(国土座標 X=-155.750000 Y=-34.920000)を置き、そこから南に50m、東に50mの範囲を地区割した。地区割には北西隅から東に10m毎にアルファベット(A~E)、南に10m毎にアラビア数字(1~5)を名付けた。1 A~5 Eの範囲が今回の地区割である。



第2節 層序

第1区～第3区までに普遍的に堆積している7層を基本層序とする。

第0層 盛土。

第1層 10YR6/1褐色細粒砂混粘土。盛土以前の耕作土である。

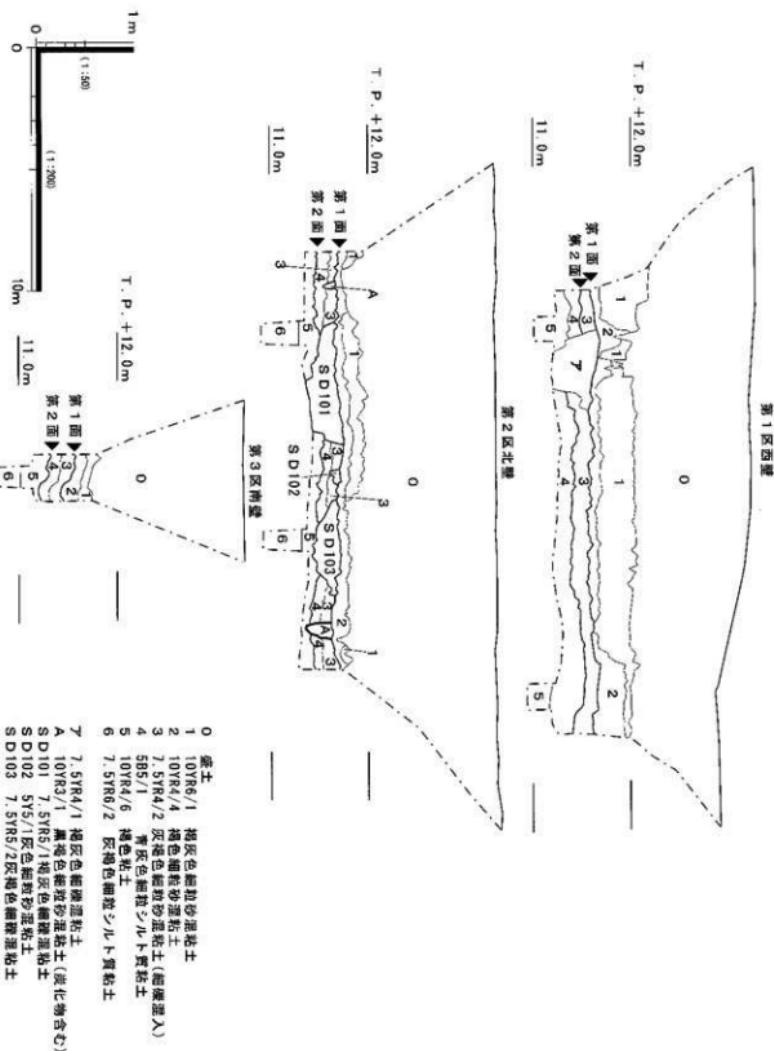
第2層 10YR4/4褐色細粒砂混粘土。

第3層 7.5YR4/2灰褐色細粒砂混粘土(細礫含む)。土壤化層。土師器等の遺物含む。上面で遺構を検出した。

第4層 5B5/1青灰色細粒シルト質粘土。土壤化層。土師器等の遺物含む。

第5層 10YR4/6褐色粘土。土壤化層。上面で遺構を検出した。

第6層 7.5YR6/2灰褐色細粒シルト質粘土。



第3図 第1~3区地層断面図

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構

第1区

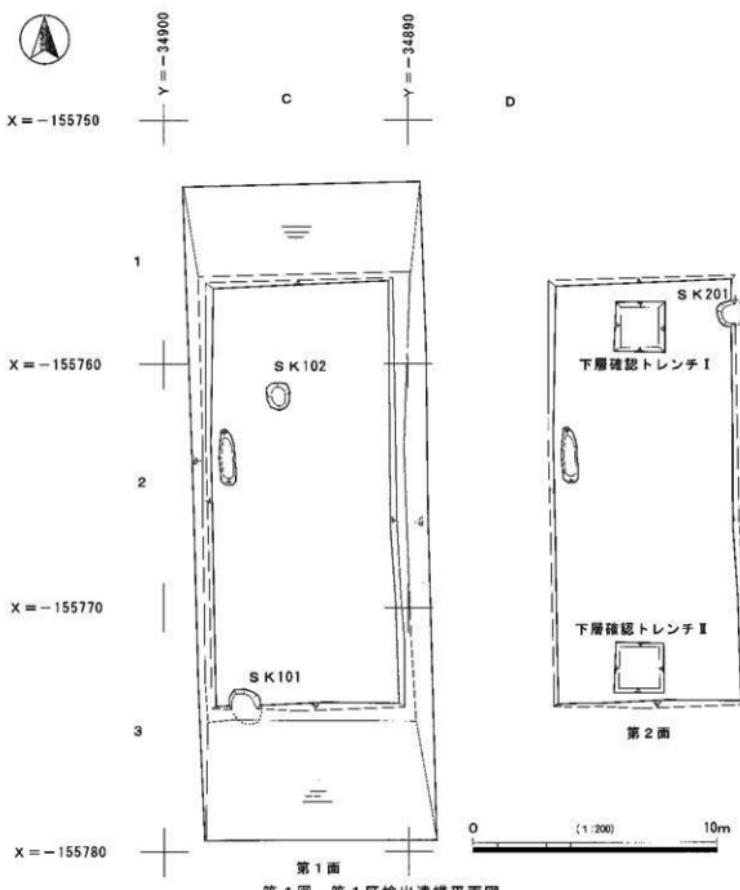
第1区では、第3層上面(第1面)で平安時代～鎌倉時代の土坑2基(SK101・SK102)および第4層上面(第2面)で奈良時代の土坑1基(SK201)を検出した。

第1面

上坑(SK)

SK101

3C地区で検出した。土坑の南側が調査区外に至るため、平面および断面の規模は不明である。



第4図 第1区検出遺構平面図

検出した部分の径1.2m以上、深さ0.1m以上を測る。埋土はN3/0暗灰色細粒シルト混粘土で炭化物を含む。土師器の破片が出土した。このうち図化したものは1である。1は土師器小皿で、外反する口縁部をもち、端部は尖りぎみに丸く終わる。内外面ヨコナデを施す。

S K102

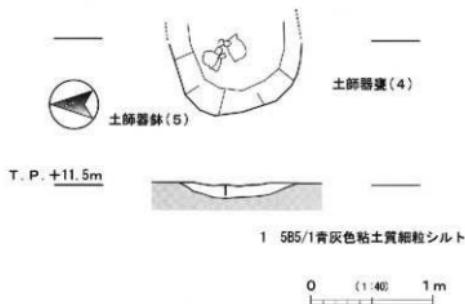
2C地区で検出した。径1.0m、深さ0.1mを測る。埋土は5B5/1青灰色細粒砂混粘土で、土師器、瓦器の破片が出土した。このうち図化したものは2である。2は瓦器楕の高台部で、断面逆台形の高台が貼り付く。内面はミガキを施すが、表部磨耗のため不明瞭である。外面ナデを施す。

第2面

上坑(S K)

S K201

1C地区で検出した。土坑の東側が調査区外に至るため、平面および断面の規模は不明である。検出した部分の径は1.0m以上、深さ0.1m以上を測る。埋土は5B5/1青灰色粘土質細粒シルトで、奈良時代の土師器が出土した。このうち図化したものは3~5である。3・4は土師器鉢である。3の口縁部は直立ぎみに外へひらく。端部は内側に段をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデを施す。部分的にヘラ状工具による工具痕が見られる。外面に打ち欠く



第5図 第1区SK201平・断面図



第6図 第1区出土遺物実測図

部分が多く見られる。また、体部外面と口縁部には煤が付着している。4は球形の体部で、口縁部は外反する。端部は尖りきみに丸く終わる。口縁部内面ハケのちヨコナデ。外面ヨコナデ。体部内面下位ナデを施し、指圧痕が多く見られる。上位横方向のハケ。外面はハケを施す。中位に黒斑あり。5は土師器鉢で、口縁部は内湾する。端部は内側に段がある。口縁部外内面ヨコナデ。体部内面ナデのち放射状ミガキを施す。外面下位ケズリ。中位～上位横方向のミガキを施す。

遺構に伴わない出土遺物

2層からは上師器・須恵器・瓦器・黒色土器の破片が出土した。このうち図化したものは6である。6は瓦器椀である。内湾する体部。口縁部はやや外反する。体部内外面横方向のミガキ、口縁部内外面ヨコナデを施す。

3層からは上師器・須恵器の破片が出土した。このうち図化したものは7である。7は土師器皿である。平らな底部から口縁部は外反する。端部は内側に肥厚する。底部内外面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面に右上がりの放射状ミガキを施す。

4層からは土師器の破片が出土した。このうち図化できるものはなかった。

5層からは土師器の破片が出土した。このうち図化したものは8である。8は古式土師器の二重口縁壺で、内面ヨコナデ、外面ハケのちヨコナデを施す。

第2区

第2区では第3層上面(第1面)で鎌倉時代の土坑1基(S K101～S K104)、溝3条(S D101～S D103)および第5層上面(第2面)で弥生時代後期の土坑1基(S K201)と奈良時代の土坑1基(S K202)を検出した。

第1面

土坑(S K)

S K101

4B地区で検出した。径0.4m、深さ0.15mを測る。埋土はM4/0灰色細粒砂混粘土で、上師器の破片および瓦器椀の破片が出土した。このうち図化できるものはなかったが、瓦器椀は、厚手の器形で内外面ミガキを施すことから、12世紀代に比定できると思われる。

S K102

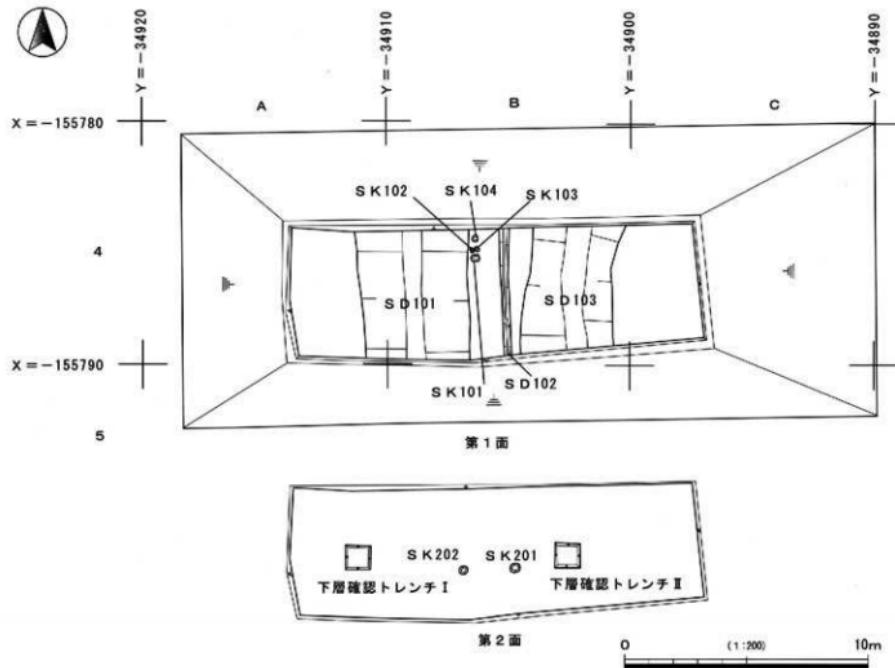
4B地区で検出した。径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土はM4/0灰色細粒砂混粘土で、石が出上した。このうち図化したものは9である。9は根石と思われるが、割れており形状は不明である。平らな部分が2面あり、加工したことにより端部は窪んでいる。全体的に焼けており、煤が付着する。

S K103

4B地区で検出した。調査区ほぼ中央で検出した。径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土はM4/0灰色細粒砂混粘土で、土師器の破片が出土した。このうち図化できるものはなかった。

S K104

4B地区で検出した。径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土はM4/0灰色細粒砂混粘土で、土師器の破片が出土した。このうち図化できるものはなかった。



第7図 第2区検出遺構平面図

溝(S D)

S D101

4 A・B地区で検出した。南北方向に直線に伸びる。幅5.0mを測る。断面形状は逆台形で深さ約0.3mを測る。埋土は7.5YR5/1褐色細礫混粘土で、溝内からは土師器・須恵器・瓦器の破片が出土した。このうち図化したものは10である。10は瓦器椀で、断面逆台形の高台が貼り付く。内面はナデのち斜格子のミガキ。外面はナデを施す。

S D102

4 B地区で検出した。南北方向に直線に伸びる。幅0.5mを測る。断面形状は逆台形で深さ約0.1mを測る。埋土は5Y5/1灰色細粒砂混粘土で、溝内からは土師器・瓦器の破片が出土した。このうち図化できるものはなかった。

S D103

4 B地区で検出した。南北方向に直線に伸びる。幅4.0mを測る。断面形状は逆台形で深さ約0.3mを測る。埋土は7.5YR5/2褐色細礫混粘土で、溝内からは土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦

の破片が出土した。このうち図化したものは11である。11は平瓦で、凹面布目のちナデ、凸面縄目を施す。

第2面

土坑(S K)

S K201

4B地区で検出した。径0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/1褐色細粒シルト質粘土で、弥生時代後期の土器が出土した。このうち図化したものは12である。12は壺で、直立きみにやや外側へ広がる口縁部。体部は最大径が上位にある。底部は突出する平底である。口縁部内面ナデ。外面ハケのちナデを施す。体部内面下位～中位ハケのちナデ。上位ナデ。粘土接合痕あり。外面下位～中位左上がりのミガキ、上位ハケを施す。

S K202

4B地区で検出した。径0.3m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR4/1褐色細粒シルト質粘土で、土師器の破片が出土した。このうち図化できるものはなかった。

遺構に伴わない出土遺物

2層からは土師器・須恵器・瓦器の破片が出土した。このうち図化したものは13である。13は土師器小皿で、「て」の字状口縁を呈す。内外面ナデを施す。

3層からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器の破片が出土した。このうち図化できるものはなかった。

第3区

第3層上面(第1面)

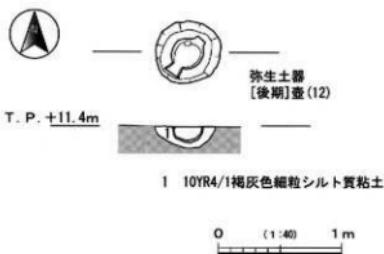
で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。第5層上面(第2面)で奈良時代の土坑1基(S K201)を検出した。

第2面

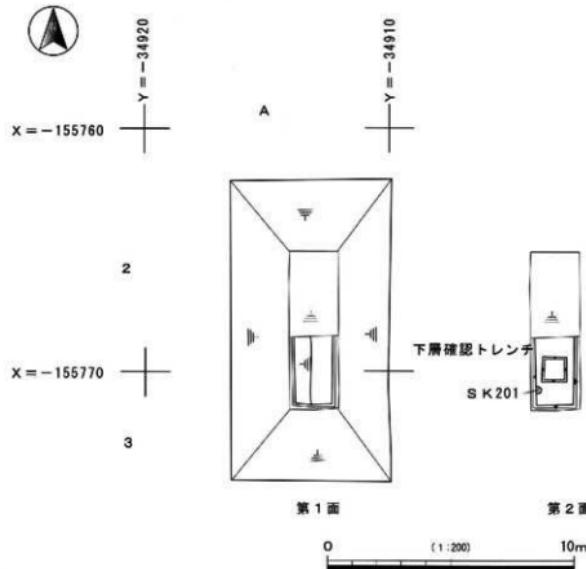
土坑(S K)

S K201

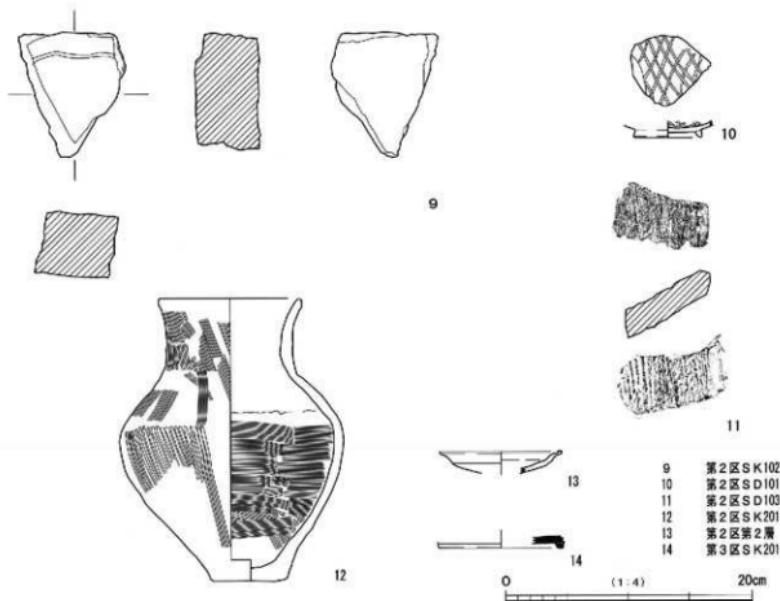
3A地区で検出した。径0.3m、深さ0.15mを



第8図 第2区S K201平・断面図



第9図 第3区検出遺構平面図



第10図 第2・3区出土遺物実測図

測る。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土で、炭化物を含んでいる。奈良時代頃の須恵器の破片が出土した。このうち図化したものは14である。14は須恵器杯と思われる底部で、断面逆台形の高台が貼り付く。内外面回転ナデを施す。

遺構に伴わない出土遺物

2層からは須恵器の破片が出土した。このうち図化できるものはなかった。

5層からは弥生土器の破片が出土した。このうち図化できるものはなかった。

第3章 まとめ

弥生時代後期

遺構は第2区ほぼ中央のSK201のみで、遺物の出土も僅かである。同時期の遺構は、今回の調査地から南西側で行っている調査で検出していることから、居住域は南西側に存在している可能性が高い。

奈良時代

第1～3区の全調査区で検出しているが遺構は希薄である。しかし、第1区で検出したSK201からは完形近くに復元可能な土器が出土していることから、北東側に居住域がある可能性が高い。

と思われる。

平安時代～鎌倉時代

第2区のほぼ全域と第1区で検出した。第2区のSK102からは根石？と思われる平らな石が出土しており、建物に伴う柱穴である可能性が高い。調査区が狭いため建物の配置は不明であった。また、第2区で検出したSD101～SD103は、居住域内の溝である可能性が高いと考えられる。

参考文献

- ・西村公助 1985 「弓削遺跡1次調査」『昭和59年度事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・岩瀬透 阿部幸一 1995.3 『寝屋川南部流域下水道事業に伴う中垣内・志紀・弓削・太平寺遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- ・原田昌則 2006 「弓削遺跡2005-185の調査」『八尾市内平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告53
平成17年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

図 版



調査地周辺(北から)



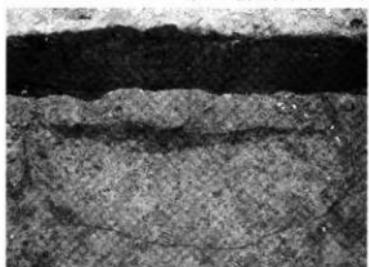
第1区機械掘削(北から)



第1区調査状況(北から)



第1区第1面全景(北から)



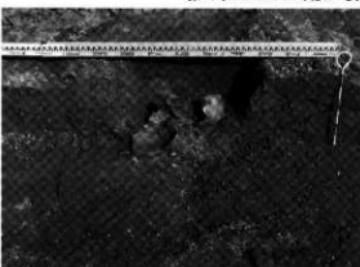
第1区SK101(北から)



第1区SK102(北から)



第1区第2面全景(南から)



第1区SK201(西から)



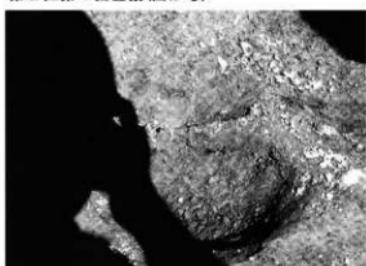
第1区下層確認トレンチⅠ(東から)



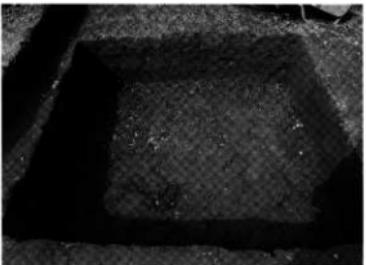
第2区機械掘削(西から)



第2区第1面全景(西から)



第2区SK102(南から)



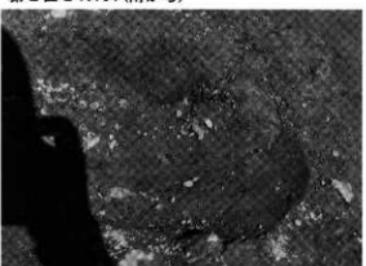
第1区下層確認トレンチⅡ(東から)



第2区調査状況(西から)



第2区SK101(南から)



第2区SK103(南から)

図版三



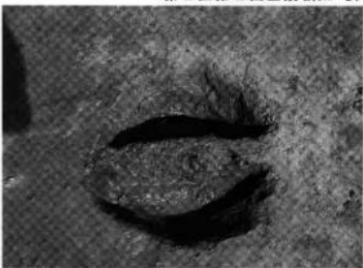
第2区SK104(南から)



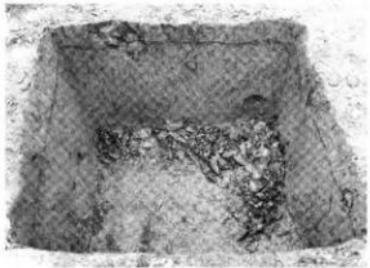
第2区第2面全景(東から)



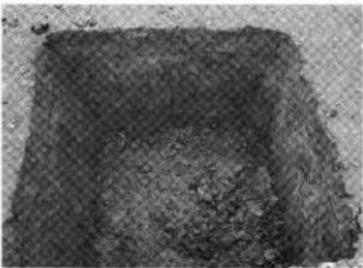
第2区SK201(南から)



第2区SK202(南から)



第2区下層確認トレンチI(南から)



第2区下層確認トレンチII(南から)



第3区機械掘削(北から)



第3区調査状況(北から)

図版四



第3区第1面全景(南から)



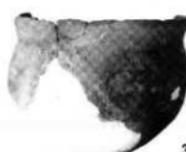
第3区第2面全景(南から)



第3区SK201(北から)



第3区南壁(北から)



3



4



5



8



10



11



12

報告書抄録

ふりがな	さいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうくく97
書名	八尾市文化財調査研究会報告
副書名	I 久宝寺遺跡(第42次調査) II 東郷遺跡(第36次調査) III 東郷遺跡(第67次調査) IV 八尾寺内町遺跡(第4次調査) V 弓削遺跡(第6次調査)
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	97
編集者名	I 稲口 黒 II・IV 荒川和哉 III・V 西村公助
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2007年3月31日

分 類	所 収 遺 跡	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
さくとうじゆいせき 久宝寺遺跡 (第42次調査)	おおさかみやれこしたのひょうこうちゅうか 大阪府八尾市北龜井町3丁目		27212	23	34度37分 18秒	135度34分 44秒	20020930 ~ 20021024	約61	地下通路・インフラ 幹線工事
とうごうじゆいせき 東郷遺跡 (第36次調査)	おおさかみやれこしひかりまち1丁目	大阪府八尾市光町1丁目	27212	37	34度37分 55秒	135度36分 15秒	19910520 ~ 19910618	約550	工場付 自動車 展示場 建設
とうごうじゆいせき 東郷遺跡 (第67次調査)	おおさかみやれこしひかりまち3丁目	大阪府八尾市東本町3丁目	27212	37	34度37分 44秒	135度36分 13秒	20060410 ~ 20060414	約48	共同住 宅建設
やかじな・まついいせき 八尾寺内町遺跡 (第4次調査)	おおさかみやれこしひんまち2丁目地内	大阪府八尾市本町2丁目地内	27212	80	34度37分 19秒	135度36分 28秒	20060130 ~ 20060203	約49.5	共同住 宅建設
ゆげいせき 弓削遺跡 (第6次調査)	おおさかみやれこしひょうこうみみさちゅうか 大阪府八尾市志紀町南2丁目		27212	71	34度35分 54秒	135度36分 59秒	20050920 ~ 20051007	約690	共同住 宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第42次調査)	集落	古墳時代前期～中期 弥生時代後期～古墳時代 前期	土坑、溝 云状、溝	古式土師器 古式土師器	
東郷遺跡 (第36次調査)	集落	古墳時代初頭前半	土器群、溝	古式土師器	
東郷遺跡 (第67次調査)	集落	古墳時代前期	溝	古式土師器	
八尾寺内町遺跡 (第4次調査)	集落	近世 弥生時代後期	溝、竹築 溝	須恵器 弥生土器	
弓削遺跡 (第6次調査)	集落	弥生時代後期 古墳時代 奈良時代 平安時代～鎌倉時代	上部 溝 土坑 土坑、溝	弥生土器 古式土師器 土師器、須恵器 土師器、瓦器	

要約	久宝寺遺跡第42次では、古墳時代前期の土坑を検出した。同時期の居住域が広がることが判明した。東郷遺跡第36次では古墳時代初期前半を中心とする遺構を検出した。第67次では古墳時代前期の溝を検出した。溝内からは土器を打ちいた土器が出土していることから、墓に伴う溝の可能性を考えられる。八尾寺内町遺跡第4次では弥生時代後期の溝を検出した。弓削遺跡第6次では、弥生時代後期、奈良時代、鎌倉時代の居住域を検出した。
----	--

財団法人八尾市文化財調査研究会報告97

- I 久宝寺遺跡 (第42次調査)
- II 東郷遺跡 (第36次調査)
- III 東郷遺跡 (第67次調査)
- IV 八尾寺内町遺跡 (第4次調査)
- V 弓削遺跡 (第6次調査)

発行 平成19年3月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX 072(994)-4700

印刷 服部印刷株式会社
〒578-0903 東大阪市今里1-16-1
TEL 072(961)-1634
表紙 レザック66 <260kg>
本文 ニューエイジ <70kg>
岡版 マットアート <135kg>

